

レベルMAXのユーリがエステルを守るお話

ニコっとテイルズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——だって、それだけがやれることだったから

目次

1.	告白	1
2.	キス	16
3.	アイデンティティ	30
4.	光と影	45
5.	夢の終わり、現実への回帰	58
6.	強さと弱さ	80
7.	$Y \cdot 16Y + 5 \leq 0$	107
8.	⑥前編	138

1. 告白

* 酷薄な4つの記事

『アレクセイ・テイノイア氏が亡くなった。帝国騎士団長だった。』

死因は失血死。頸動脈を小刀で切り裂き、自室で夥しい血を撒き散らしながら死んでいた。

現場に争った痕跡はないが、騎士団は念のため自殺と他殺の両面から捜査をしている。

騎士団を取り仕切る長の突然の訃報に、騎士たちは混乱し、事態の収拾には時間がかかりそうだ』

『アレクサンダー・フォン・キュモール氏が亡くなった。騎士団のある部隊の隊長だった。』

死因は失血死。自宅の浴室にてナイフで左手首の動脈をズタズタに切り裂いて死んでいた。

自宅と現場に争った痕跡はないが、騎士団は念のため自殺と他殺の両面から捜査をしている。

なお、騎士団長の絶命の影響が大きく、騎士たちの間で俎上に載ることは稀であった』

『デアツキ氏が亡くなった。後の調べによると、盗賊だったことがわかった。』

死因は失血死。背中を一闪、剣で切り裂かれて、川に突き落とされて死んでいた。

状況から鑑みて明らかに殺人であり、騎士団は少人数ながらも真相究明に努めている。

それと同時に、この男の行った、あるいは行おうとしていた犯罪についても調査中である』

『ラピードが亡くなった。下町の住人ユーリ・ローウエルの飼いだ犬だった。』

死因は、拡張型心筋症。ユーリ氏の自室において突然激しく咳き込んだ後、急に意識を失った。

すぐに近くの獣医の元に運ばれたが、手遅れであった。外傷等はな

く、事件性は疑われない。

飼い主のユーリ氏によって、下町の共同墓地に、住民たちに見守られながら丁重に埋葬された』

*

エステリーゼ・シデス・ヒュラツセインは、今日も自室で本を読んでいた。

金色の絢爛と煌めくシャンデリア。深紅の帳に囲まれた巨大な天蓋付きベッド。

広大な部屋に張り巡らされるのは、華を額縁に入れたような、派手過ぎず、しかし高尚に編まれた絨毯。

他にも、白を基調としたクローゼットやドレッサーと言った格調高い家具や調度品。

そして、著名な画匠の描いた絵画が部屋の両側面に隈なく掛けられていると、紛うことなき皇女の私室となるのである。

しかし、エステリーゼの目は、自然の光で読む本と共に、嵌め殺しにされた風窓から見える青い小鳥に注がれていた。

彼女が今最も興味があるのは、何度も説明された絵画の意味や自らが就くかもしれない皇位ではない。

ただ、お城の外に出てみたい、ということである。

ここザーフィアス城にほぼ軟禁状態の皇女としては、剣の訓練でたまに向かう中庭以外、外出の機会がない。

中庭に赴くことさえ「外出」と呼べるのがエステリーゼの生活である。

あの小鳥が飛んでいく先に何があるのかも、鳥たちが触れる空気の味がどんなものかも、彼女は知らない。

皇室お抱えの教師陣の厳格な声や、壁の隅にある本の匂いは知っているが、自由に舞う鳥の囀（さえず）りも、雨上がりの草木の匂いも知らないのである。

以前に読んだ物語の中には、特別な靴を履けば、絵本の中に入り込めるというものがあつた。

もしそれがあれば、今すぐにも履いて本の中に飛び込めるのに。挿絵や活字だけでは海の潮騒（しおさい）や、花の芳香は感じ得ないから。

現実には本の中に入ることが叶わないことを知った後も、外に出たいという切なる願いは変わっていない。

しかしエステリーゼは己の、皇女という立場を身に染みるほど理解している。

うかうかと外に出られる立場にないことは、細胞の一つ一つに刻み込まれているのだ。

だから、彼女は、願望と現実のギャップに平伏し、退屈な日常が続くことに溜息をこぼすのである。

やがて、陰鬱な彼女の雰囲気拒絶するかのようになり、羽を休めていた青い小鳥も飛び立って行った。

もう一つ、エステリーゼは、溜息をついた。

窓は鏡となつて、そんなエステリーゼの姿を映す。

綺麗に切り揃えられている桃色の短髪。翠色の瞳は少し淀んでいる。

決して青い鳥にはならない青いドレス。

見飽きるほどに自覚させられる飛べない自分の姿。

鈴は鈴。小鳥は小鳥。わたしはわたし。

みんな違ってみんないいと言うのは、麗句ではあれど真理ではないと、エステリーゼは思っていた。

今は、青い小鳥になりたいなあ。

——しかし、青い小鳥にはなれずとも、外に出たいという願いは唐突に叶えられることになる。

……もつとも、それは青い小鳥ではなく赤い巨鳥の、おかげというよりせいであつたが。

午前中に終わった治癒術の訓練の練習もあって、やや体に疲労が残っていたエステリーゼが、天蓋付きのベッドに向かおうとしていた時のことであつた。

突然視界が、薄暗く覆われた。

太陽が厚い雲に入ったのかな、とエステリーゼが何気なく窓へと振り返ると、

「ぎゃっ!!」

エステリーゼの私室のそれ相応に巨大な窓を優に超える巨鳥が、そこにはいた。

出現があまりに唐突過ぎたことで、エステルの脳が認識できたのは、赤い大鳥ということだけであつた。

混乱のあまり、現実逃避に嵌まつた思考は、赤い鳥つて自分の今着ている青いドレスの色と対照的だな、と余計なことを考えてしまう。

身体の総身が止まってしまっているエステリーゼであっても、赤い怪鳥は容赦しない。

まずは牽制とばかりに、

ガツシヤ——ン!!!

その巨体を以て、嵌め殺しの窓を粉碎した。

それが自分を解放するためではないのは、エステリーゼ自身、その怪鳥の鋭利な眦（まなじり）を見ればよくわかる。

『……忌マワシキ世界ノ毒ハ消ス』

太陽を隠した体から発せられる重厚な言葉は、エステリーゼの身体を圧した。

「しゃべった!? あなたは……いったい……」

エステリーゼがそう言葉を紡いだ時には、怪鳥は口腔の火炎の再装填を完了していた。

そして、エステリーゼの驚愕の表情すら存在しなかったことにせんと、放射しようとした時、

「絶風刃!」

勇ましい声と共に緑の風圧が怪鳥に直撃した。

『ゲグアッ!』

吐き出そうとした炎を強制的に反転させられ、怪鳥はえずく。そして、その巨体と声だけでエステリーゼを圧倒した怪鳥は、逆に驚くほど外へと押し戻される。

その仰け反り具合は、窓から距離のある城壁にぶつかるほどであった。隠された太陽が再びエステリーゼの部屋に射し込まれる。

「だ、だれ……う。」

エステリーゼが部屋の入り口に目をやる。

風圧の出所には、剣を肩に構えた黒髪の青年が立っていた。

一応騎士の制服は着ているが、エステリーゼに見覚えはない。

「……アンタは、ちよつとすつこんでな。」

ちよつと躡が必要なら大鳥さんがいるみたいなんだな。

……マジでオオトリだったら苦労しねえんだがな」

黒い青年は最後をやや窄（すぼめ）めながら呟き、エステリーゼを背中に隠して怪鳥を睨み付ける。

エステリーゼは再び影に覆われたが、今度は悪い心地はしなかった。

『キサマハドケ』

態勢を立て直した怪鳥は、睨（ね）め付ける先を青年へと変えた。バサバサと、羽ばたいているその様は、苛立ちだけでない意味合いが込められている。

「オレを躡けたいのなら、腕つぶしで叩きのめしてからしな!」

退くどころか、ますます挑戦的な笑みを浮かべて前進する青年。

(こ)やつ……)

その姿に、怪鳥は言葉による脅迫を諦めるべきだと悟る。

それどころか、そのただものではない業物と、先ほど受けた強烈な剣圧から、この青年を直接屠ることが可能かすら疑わしい。

あの威力は熟達という段をとうに乗り越えている。我々に協力的な、あの奇特な人間をも遥かに上回るのではないかと思うほどだ。

それでも、この城を叩き壊せば、あるいは覆いつくすほどの炎を放てば、この人間ともども抹殺できるかもしれない。

しかしながら、それは今は避けたい。

目標となる対象以外の無辜の生命を潰すほどには、怪鳥も残虐になり切れない。

人間の中にも愚かではない者もいる。十把一絡げに纏めて獄殺するなど、世界を愛するものとしてできるはずもない。

なので、赤い怪鳥は――

「お帰りか……」

その巨体を旋回し、退却の一手を打った。

*

「大丈夫か？」

青年は、首だけで振り返る

泰然自若とした青年の声の調子に優しさを感知したエステリーゼは、自然とそれに呼応する。

「……はい。助けてくれてありがとうございます」

「どういたしまして」

青年は、エステリーゼから目を逸らし、？き出しのままだった紫の刀身を慣れた手つきで鞘に納める。

「あの……あなたのお名前は？」

おずおずと、エステリーゼは訊ねる。

「……ユーリだ。ユーリ・ローウエル」

一拍置いて、黒髪の青年――ユーリは澀みなく答える。

自己紹介で相手の目を見ないのは、エステリーゼにとって初めてであった。

「ユーリ・ローウエル……初めて聞く名前です」

こちらに振り向かないことをを咎めようとも思わず、自らの脳内で

既知でないことを確認する。

「アンタは、エステリーゼだったか」

あたかもそれが常識だと言わんばかりといった調子のユーリは、相変わらずこちらを向こうとしない。

「どうして、わたしの名前を？」

首を傾げるエステリーゼ。

普段軟禁状態のエステリーゼを知っている人間は、騎士であっても少ないのだ。

「別に。昔の騎士の任務中にたまたま知る機会があっただけ」

エステリーゼは、ほんの少しだけ、ユーリの声に気怠げな調子を汲み取れた。

彼女は、五感の全てが鋭いのだ。

しかし、特に口を挟むべきこととも思えず、

「そうですか……」

納得したことにする。

「ああ……アンタのこと、エステルって呼んでいい？」

そっちの方が呼びやすくてな」

「あ……はい！ 構いませんよ」

ユーリの提案に、エステリーゼは、『エステル』という響きをすぐさま気に入った。

そして、その愛称を囁みしめるように、「エステル……エステル……エステル……」と少し俯きながら呟き続ける。

ユーリは、耳朶を打つ小さな声に、満足げに微笑みながら、ついに身体ごとエステルに振り返った。

「あんなのが襲ってきて、エステルは安眠できるわけ？」

「……え、あの……」

あの突然の事態を飲み込めるほど、エステルは心の整理がついていない。

そしてつけさせる間もなく、ユーリは畳みかける。

「もしそうでないなら、城の外に来ねえか？」

少なくとも、オレがいつでも一緒に居られる場所に」

「はい?」

ユーリの急な誘いを、エステルはすぐには受け入れられなかった。そして思わず、窓の外で霹靂がないものかと確かめてしまった。

「城の騎士じや、あんなデカブツ止められねえだろ。」

なら止められる奴と一緒に居た方がいいんじゃないやねえかって話だ。

こんな部屋にずっといても退屈そうだし」

「……………」

置換されてやつと咀嚼できたユーリの言葉。

ようやくエステルは思考に頭を巡らせることができた。

外に出る。

ずつと願って、しかしいつも叶わぬと思っていた未知への投擲。

突然の黒髪の青年からの言葉は、今まで味わってきたどんな甘味よりも甘く感ぜられる。

しかし、自分の立場を思い出す。

わたしは皇女。迂闊に出歩いたらいけない。

それに帝都の中だけならともかく、もしも結界の外まで行ったら……………」

結界の外。

それは野生の魔物が徘徊している場所を意味する。

この世界の人間は、各々の街に設置されている結界魔導器（シルトブラスティア）の恩恵を受けて生きているのだ。

その魔物の避けの守護なしで生くことなど、果たして剣や魔術を僅かに習ったばかりの自分にできるのだろうか？

普通の人間は、騎士たちに守護されて結界の外に生きているというのに……………」

そこまで考えて、ふとエステルは初めに訊くべきだったことを訊くことにする。

「ユーリさんは「ユーリでいい」……………そうですか。では、ユーリは、どの騎士の部隊に所属しているんです?」

通常騎士は、いずれかの部隊に所属している。

高位の騎士ならば、赤や青と言ったその部隊のシンボルカラーの鎧

を身に纏える。

しかし、ユーリの格好は下級騎士に共通の緑色の衣装であったので、どこの部隊かわからないのだ。

だが、ユーリは想像の斜め上に行く、とんでもない答えを返した。

「オレ？　そもそも騎士じゃねえけど」

「はい!?!　なら、どうして騎士の格好をして、お城の中にいるんです!?!」

仰天同地の事実には、エステルは文字通り一歩引いた。

騎士だから警護に来てたと思ったのに、あつさりとそうではないと言われたのだ。

ならば、ユーリはいったい誰なのか!?

そう慌てふためくのも、仕方ないことであつた。

「たまたま昔馴染みから、騎士の格好を借りてお城の探検してたんだよ。

んで、デカイ物音してここに入ったら、エステルとあのでっかい鳥に出くわしたってわけ」

反射的に身を引いたエステルに、苦笑しながらユーリは釈明する。

「は……はあ、そうなんですか」

エステルは、胸に手を当てて、ホッと一息をついた。

キケンな賊でないとわかって一安心なのである。

よくよく考えれば非常に怪しい答えであるのだが、それを斟酌できるほどエステルは、常識を形成することを許されていなかった。

「それで、話は戻すけど、アンタはどうすんだ？

オレと一緒に来れば、取り敢えず身の安全は保障するぜ」

「どうして、そこまでわたしを……?」

さすがにエステルも眉をひそめる。

いくら何でも、出会ってほんの幾何も無い人間からそこまでされるのには違和感を覚える。

そう思って、訊ねたのであるが……

「決まってる。エステルに一目惚れしたからだ」

一切の混じり気のない黒い瞳に見つめられながら、告白された。

「へ?」

その言葉を聞いたエステルの脳は一旦麻痺した。

「え? ……え~~~~~~~~!!!!」

そして、解を釈した時には、また別の意味で脳を機能停止させられた。

そして、ユーリがおもむろに（エステルにとっては瞬間移動で）近づき、

「ひゃいっ!!」

ガツチリと肩を掴まれた時には、強制的にユーリの顔をいっぱいに押ませられることになった。

「エステル。オレはお前のことが好きだ。

だから、お前のことを守りたいんだ。わかってくれるか?」

「は……はい」

幸いだったのは、気圧されて出てきたエステルの蚊の鳴くような声を、真摯な答えとユーリが受け取らなかったことだ。

不幸だったのは、ユーリが今もお肩を離してくれないことだった。

「……………」

「~~~~~ツ!!」

ユーリの瞳をじつくりと見つめさせられている内に、ようやくエステルは自分の思考を取り戻すことができた。

しかし、その脳は、まず眼前の情報を処理しなければならぬ。

ユーリの顔を具（つぶさ）に分析してみる。

真正正銘の男性なのに、柳眉と評されても差支えないほどの、しかし逆ハノ字がデフォルトになっている厳めしい眉。

その眉毛をサラサラな前髪が、風に揺れるカーテンのように見え隠れさせ、神聖なるものへの誘いのように思えた。

曇り気のない、恐らく常ならば射抜くような力強い瞳には、今は純真と慈しみが宿っている……気がする。

エステルは人間観察が得意であるが、これほどの無垢な清澄と狼のような目尻が併存している人間を見るのは初めてであった。

口元を湛えるのは、不敵な笑み。……どういいう人生経験を積み重ねほどの自信を漲らせることができるのか。

首元を優に超える漆黒の長髪は帷帳（いちよう）となつて、エステルの瞳に背景さえも映りこませることを禁じている。

まるで、それ以外の世界を見ることがすら許さないような、そんな独占欲が滲み出てるように感じられた。

そして端的に言つて、イケメン。

エステルの好きな『彗星物語』の主人公の友人で、琥珀の聖騎士のような密やかな好みのタイプ。

その顔がだんだん大きくなつていつて……

「な、なにするんです!?!」

ようやく自分で身体を動かせるようになった。

ユーリを両手で押しのけた反動で、背中を壁にぶつけてしまう。

その冷たい感触が、自分が自分の部屋にいるという単純極まりないことを思い出させてくれた。

有名な絵画も白い壁も今まで通りだ。

世界を視認できて、ようやく自分が茹でだこのように沸騰していることを思い知る。

爆動する心臓から供給される血液は、熱く滾るものであることを、エステルは初めて学習した。

それでも、はあはあと息を切らしながら、キツつとユーリを睨み付ける。

しかし、上手なのは常に相手の方だった。

「はっはっは。なあ……いいだろう?」

「っ!?!」

快活な哄笑の後に、気障つたらしくトーンを落として訊ねてくる黒狼が、また視界を覆ってくる。

男女関係どころか対人関係すら極端に制限されているエステルにとつて、その抑揚の付け方は反則である。

あつという間に世界が再度分かたれてしまった。

ドンツ!!

「ひっ!!」

再びエステルが世界に帰ってくることはできたのは、ユーリの掌底が壁を打ち付ける音が耳を劈いた時だ。

その雄々しく乱暴な音で、自分がどんな状況に置かれているかを理解する。

そう。これこそが、何かの恋愛物語で読んだ「壁ドン」というものだ。

エステルの積み上げられた知識層は、自分の置かれた状況を正しく認識できるだけの言の葉（ことのは）を与えてくれる。

「うろうろう……」

しかし、自らを支配せんという勢いで迫ってくる青年に対して、いかに対処すべきなのかという回答を与えてくれることはなかった。

まさか「調べるまで待つてください」という文句が通じる相手でもあるまいし。

「……………」

「……………」

ゆっくりゆっくりユーリは近づいて来る。

男にしてはきめ細やかな肌。

流麗な黒髪から流れ込む爽やかなシャンプーの香り。

そして、ユーリの息遣いがエステルの耳朶を打った時……

「はう……」

エステルは崩れ落ちてしまった。

カクンと膝が折れて、唯一緊急回避ができる絨毯の上にペタンと座り込んでしまう。

身体がふにやつとしているのを自覚した時には、もう為されるがま

ましかないのだと覚悟した。

覚悟したのであるが……

「わふっ！」

シヨートし過ぎて熱断線を起こしそうな神経中枢が伝えてくれたのは、桃色の髪を撫でるしつとりと涼やかな手の平だった。

エステルの頭のとっぺんをわしやわしやと搔き回す。

「な、何するんですか!?!」

「はっはっは。わりいわりい。ここまで面白い反応が見られるとは思ってなくてな」

どこまでも楽し気なユーリに、エステルはプクつと頬を膨らませる。

「~~~~!!! もういいです! 知りません!」

まるで小犬のように従順になっていると勘違いされてもらっても困る。

エステルはそう思い、ユーリから火照った顔をパイと逸らした。

ただ逸らした目線の先がいけなかった。

天蓋付きのベッド。

いつもなら自分の部屋に馴染みきった豪華な寝所であるのだが

……

「なんだ? もうやるのか?」

「ちっ、違いますっ!!」

今はユーリにとっての揶揄(からか)いの材料になってしまう。

ブンブンと振った頭をようやく静止させたエステルに、笑顔のままユーリは右手を差し伸べる。

「ほれっ。一緒に来るなら手を取れ。来ねえなら取らなくていいから」

「……………」

柳眉を曇らせ、精一杯目を細めながら、エステルはユーリの手の平を睨み付ける。

待ちに待った自由をこの不埒な人と一緒に?

色んな意味で危険なんじゃないだろうか? この黒才オカミにつ

いて行くことは。

四六時中自分の貞操を心配する必要があるのではないか。

そこまで考えて、心の中の天秤が『行かない』方に傾きかけた時、エステルはふと（ベッドには目を向けられないようにしながら）部屋全体を見回した。

名画も、白い壁もいつも通りある。

常とは異なる所と言えば、嵌め殺しの窓が粉碎されていることか。四角い木の枠の残骸は、高級絨毯の上に四方八方散らばっている。割れた窓が初めて運んでくる風の先には、また青い小鳥が舞っていた。

「……………」

それを見て、エステルは己の感覚を信じることにする。

「……………わかりました。では、わたしの護衛をよろしくお願いします」

合理的な理由を嘯いてしまったと思いつつながら、エステルは眼前の手の平を握った。

大きな手は、ひよいとエステルの身体を持ち上げる。

「よろしくな、エステル」

エステルは、人間観察が得意であったが、

「……………はい、よろしくお願いします！」

ユーリの言葉にどれほどの感情が籠められていたのか、わからなかった。

*

———帝都・下町の酒場

一人の男が、マスターのいるカウンター席までドストドスと近寄ってくる。

「いらっしやい……………ああ、お前さんか。いつものでいいかい？」

「ああ……………いや、今日は飛び切り強えヤツを頼む」

「……………そうだな。また、あんなことがあっちゃまったからな」

「くそっ！ 爺さんがくたばった直後だったのに。今度はガキが逝き

やがるとは!」

「ああー、ああー、ああー。いくらでも話聞いてやつから、グラス壊すのだけは勘弁してくれな」

「ふん……」

「……たまには、景気の良い話でもあればな」

「その前に再発防止だ! ったく。二度とあんな事故が起こんねえよ
うに、ガキどもに徹底しねーと」

「前の教訓が生かされなかつたのがなあ。……10年近く経つと風
化しきつちまうか」

「くそっ! テッドの馬鹿野郎がっ!! 嫌でも思い出させるじゃねー
か」

「……………はいよ。つまみだ」

「……………まずいな」

「美味しくても虚しいからな」

男は、グラスを傾けた後、灼熱の液体を嚙下する。

水道魔導器（アクエブラスティア）が汲み上げる噴水の水飛沫の
忌々しい跳音から、聴覚を麻痺させるために。

2. キス

『以下に記載されているのは、人魔戦争の戦没者である。』

本案件は極秘事項であり、決して外部に漏らしてはならない。

ここに掲げてある者の遺族に対して、密やかに慰問及び補償金の支払い、そして口外の禁止の伝達を行うように。

・
・
・
・
・
・
129 シュヴァーン
130 イエガー
131 キヤナリ

・
・
・
・
・
・
以上、全201名』

*

足元がふわふわする。

念願の外に出ることができたらどんなに感動するのだろうか、長年エステルは夢想していた。

しかしながら、城門の御階（みはし）を下つても、生まれ育ったお城を地面から直接見上げる形になっても、一向に心を動かされるとい

うことはない。

景色を感知するための神経伝達物質が存在していないかのようにあつた。

代わりに、身体全体の神経は、全て目の前にいる黒髪の青年に収束されているのである。

告白。「好き」だと言われた。

あの衝撃の炎は、エステルルの頭から全然抜け切れていない。

むしろ、目の前にこの黒髪の青年がいる限り、より一層煽られてしまう。

そして、いつまでもいつまでも舞い上がるほど燃え続けるのだ。

だから、文字通り熱に浮かされているエステルは、いつの間にか市民街の一軒家にワープしたような気分であつた。

己の髪と同じピンクを基調とする旅装束に着替えたことも、城内がやたらと静かだったことも、青年が密やかに女神像の下を見て唾つたことも、城のある貴族街から市民街への長い長い階段を下っていることも。

一切エステルルの頭の中に刻み込まれることはなかつたのである。

「んじゃ、今日の所はここに泊まるぞ。

買い物とかもしなきゃなんねえし」

ずっと無言だったユーリが、神経の終着地点だった人間が急に話し出したことで、エステルルの身体は過剰なほど震える。

「え、は、はい……。えっと、ここは……？」

エステルは、いつの間にか目の前にあつた2階建ての、近隣と比べても普通の大きさの家に、おっかなびっくりしながら訊ねた。

「オレんち。取り敢えず入れよ」

「は、はい……」

女の子が、独り暮らしの男の家に入るのが危険極まりないということとを、エステルはこの時知らなかった。

すぐに学習するが。

「寝室は2階。風呂はあっち。トイレはそこ。取り敢えず覚えたか？」

「はい」

エステルは、通されたダイニングキッチンをキョロキョロ見回しながら頷く。

テーブルや、椅子、食器棚といった最低限の家具に、壁に掛けられた剣や斧が調度品代わりに設えられている実に簡素な部屋であった。

また、ユーリには失礼ながら少し意外だったのは、棚の中に結構本が詰まっていることである。

——ユーリって、読書家なんだ。

何というか、言動から武人の血が心身を循環しているような雰囲気
が醸されていたので、文の方にも才があるとは思わなかったのである。

「んじゃ、ちよつと休んだら買い出しに行くぞ」

「はい」

本について尋ねるのは後でもいいかと思い、エステルはダイニング
ルームを後にするユーリを見送った。

*

買い物というのも、エステルにとっては初めての体験であった。

市民街の一角の、人々の賑わいに包まれる商業地区のテントの張られた
出店群に2人は入って行く。

まず買いに行ったのは、帽子と眼鏡。

ユーリ曰く、変装用だから早めに買っておくべきとのこと。

そう言うものなんですか？ と思いながらも、真っ白な帽子と度
入っていないハーフレスメガネを気に入ったエステルは、早速購入し
てもらった。

次に、ユーリが食料品を的確に品定めをし、手際よく籠に詰めてい
くのを、エステルは目を大きく開けながらまじまじと観察していた。
ついでに、お金を払ってモノを買うということも、ユーリの姿を見
て初めて学習した。

エステルの性格ならば、好奇心の赴くままに後先考えず軒を連ねる

店の品々に心を傾かせてしまい、一向に買い物が終わらないのが通常である。

しかし、ユーリの第一印象があまりに強過ぎたため、その本能すらユーリの方向へと捻じ曲げられてしまったようであった。

本来乱反射するはずのエステルの好奇心は、全て目の前の青年を凸レンズとして収斂してしまっているのである。

だから、割と従順にユーリの後ろ姿を追っている。

だけど、割と頻繁にエステルの方を振り返るユーリの顔を見つめる勇氣はまだない。

なので、伊達メガネ越しに映ってしまふ美男子の物憂げな視線は、白い帽子の鍔を盾に防がざるを得なかった。

*

月がきれいであろうがなろうが狼男は出現する。それをエステルが知ったのは、まさしくその日の晩であった。

「エステル、こっち手伝ってくれ」

「はい」

まず人狼は、牙を隠す。

ユーリがエビの腸（わた）を慣れた手つきで取っている間に、エステルはマイタケむしりを楽し気に勤しむ。

ユーリがだし汁を混ぜ合わせているときに、エステルはおっかなびつくりしながら白菜を包丁で切る。

そして、ユーリがうどんやその他の具材が煮えたのを確認し終えた後、エステルは生卵を割るのに失敗し、あわてて殻の破片を鍋から手で掬おうとするのをユーリに止められた。

そんな買い物から続くユーリの常識的行動の連続は、常識を形成し得なかったエステルだからこそ容易に油断を誘えた。

エステルは、初めて調理体験を堪能し、すっかりと心が弛緩してしまっただのである。

「いただきます」

「いただきます」

エステルは、出来上がった『鍋焼きうどん』を小鉢に取り分けて、スルスルとすすっていく。

醤油の出汁の効いたえびやいかの魚介類の濃厚な味を、滑らかなうどんが程よく薄め、口の中が心地好く中和されていく。

白菜のシャキシャキした食感に、シイタケのコリコリした食感は、栄養の偏りの矯正だけではないハーモニーを奏で、食べていて飽きさを来させない。

それに卵のまろやかさが全体を包み込み、喉越しを良くする。

概して言えば、

「とつても美味しいです！」

エステルが、眦（まなじり）を極限まで弛緩させ、自然と弾んだ声に乗せた端的な絶賛こそが、この鍋焼きうどんに対する評価であった。

「そいつはよかった」

普段と変わらない調子のユーリは、瞳を閉じたまま、ズルズルとうどんをすすっている。

それが、照れ隠しなのか、それとも単に意に介していないのか、エステルには判断がつきかねた。

しかし、今は別のことを尋ねることにする。

「ユーリって、お料理上手なんですね。どこかで習ったんです？」

「いいや。ガキの頃からやってるから、慣れただけ。」

「こんなもん慣れりや誰だつてできるようになるさ」

「そうなんです？」

「ああ。……味見さえ、忘れなければな」

最後の一言が、一オクターブ下がったことをエステルは聞き逃さない。

「味見って……昔、何かあったんです？」

「まあな」

そう誤魔化すように軽く答えたユーリは、小鉢の縁に口をかけ、う

どんの汁を飲み始める。

「……………」

エステルは、ユーリの喉仏が、嚙下に連動して蠢（うごめ）くさまをじつと見つめる。

しかし、ユーリは、小鉢をテーブルに置いて、大鍋からうどんと具材を取り始めた。

エステルの視線を一瞥にとどめ、そのまま、またうどんを箸で摘まんでいく。

どうやら僅かに疑問に思った程度の眼圧では、ユーリが口を割るところはなさそうである。

しかも問い質すほどの必要性も今は特に感じない。

なので、エステルもユーリから目線を逸らし、好物となった鍋焼きうどんに頬を緩ませることにした。

そのふんわりとした口の緩みこそが、

「……………」

オオカミさんの狙いの一つでもあった。

「んじゃ、エステル。風呂沸かしたから入って来いよ」

「え？ わたしもお片付け手伝いますよ？」

「いいって。今日は疲れてんだろ。ここは任せとけて」

「……わかりました。では、お言葉に甘えさせていただきます」

空になった大鍋に2つの小鉢を重ねたユーリがキッチンに向かって行くのを、エステルはペコリと頭を下げて見送った。

ニヤリとしながら、ユーリは鍋類を運んで行く。

風呂上り。

エステルは、乾燥魔導器（スカッティオブラスティア）という、所謂ドライヤーを駆動させて、水気を吹き飛ばした。

エステルは、ユーリがこんな魔導器を持っていることに少しクスツとした。やはり、あの肩甲骨付近まで掛かっている長髪のためだろうか、と考える。

それに魔導器は、帝都が一括して管理しているから、貴族ならばともかく一般の人なら入手困難だというのに。

こんなものまで設（しつら）えるとは、やっぱり底の知れない人だな、と思う。

「上がりましたよ〜」

エステルは、寝巻用の桜色のネグリジエに着替えてから、踝まで覆う白いソックスでフローリングをペタペタと歩き、ダイニングへと赴く。

そして、ユーリの背中へと快活に声をかけた。

「ん。じゃあ、俺も入るわ。」

そこに本あつから、適当に読んどけよ」

「はい。ありがとうございます」

椅子に座って読んでいた本を棚に戻した後、ユーリは本（エサ）を指差してから、風呂場へと向かう。

ワクワクしながらエステルが、本棚を検（あらた）めると、

『『エアルの詳解』？ 『魔導器と術式の相関関係』？ 『リゾマータの公式 序論』？

……何だか、難しい本ばかりですね」

この世界のエネルギー源のエアルや、魔術的奇跡を齎す魔導器に関する學術書が並んでいた。

『リゾマータの公式』とは、エステルも聞いたことがない。

エステルが嗜まざるを得なかったお城の蔵書には、普通の貴族の所蔵している以上に多くの稀覯書（きこうしょ）が揃っていると思っていたが、そのエステルでさえ覚知しないものがかかりある。

もつと丹念に見詰めてみると、古代グレイオス文明や、その文字の解読法について著された書物、さらには御伽話の類まであった。

（……………）

……エステルは、ユーリという人間について、改めて首を傾げた。
突然の告白……はともかく。

エステルも剣を修行しているから判るが、ユーリの剣技は絶技と言ってもいい。

一般の騎士ならば、場合によっては一生をかけても辿り着けない領域に至っている。

さらに、世界の理を文理の別を問わずに、奥深く究めんとする蔵書の数々。

これらを読破し、さらに理論の体得までするととなると……夥しい年月が必要なように思われた。

加えて言うと、あの料理の腕。

正直なところ、お城のコックよりも美味であった。

城内で食す豪奢にして、薄味の料理にエステルがやや辟易していたこともあったが、一応舌の肥えた自分にあれほど舌鼓を打たせられるとは……。

ついで、部屋を見回してみる。

家具が必要最低限なのはともかく。

市民街にあるこの家屋を所有するか借家するには、それなり以上の財産が必要なはずである。エステルには家の物価などはわからないが、それぐらいのことは推察できた。

これらの分厚い本を取り揃えるのにも、決して低廉とは言えない額の財が課せられるのは、想像するに及ばない。

(うーん……?)

ユーリを眉目秀麗で、文武両道な人間と評するのは容易い。

そんな人間に、自分があんな……大胆なことを言われるのも、まあ、悪い気はしない。

だが……ミステリアスな部分をどうしても拭い去れない。

不気味というほどではないが、ここまで並々ならぬ人間だと少し引いてしまう。

別にエステルは、優れた人間に嫉妬するたちではない。むしろ素直に礼賛できる性格だ。

とは言え……一の人間が完璧と呼ばれる型まで铸られた趣を目撃するとなると……やはり気後れしてしまうのは抑えきれない。

対して自分は、実戦経験ゼロの剣技。蔵書のレベルと比べると、教養レベル程度しかない知識。料理など習得の機会すら与えられな

かった。

外見だつてきつと大したことない。そんな自分と、何もかも凄まじいレベルにまで達しているユーリとは……比較するのすら烏滸（おこ）がましさを感じる。

皇女という、先天的に与えられた身分がその間隙を埋め合わせるには到底足りない。

わたしじゃ、ユーリと釣り合えない……。

と、そこまで考えて。

あれ……？ わたしは何を考えているんだろう？

いや、ユーリはそういう対象じゃ……。

いえ、決して嫌いというわけではなくて……。

えつと……あの……その……何て言えばいいんだろう？

だから、うん。あれ……何でしょう。あれですよ。

友達……ではなくて。

恋人……いえ、ちが、います。

嫌いではないんですけど……うん。

好きかと言われると……カッコいいし、何でもできるし……。

ちがうちがう！ 好きでも、嫌いでもない。

まだ、保留ですよ、ほりゆう！

……つてそういえば、まだユーリに何にも言つてなかったような

……。

これは、失礼でしょうか？

好きの返事に……えつと……好きでも嫌いでもない……。

うんうん!! ちがう。嫌いというのは何か違う。じゃあ、でも、そ

の。

好きと認めれば……。

そ、それもちがう、ちがいますつて！

エステルは、己の中を駆け巡る感情にうまく言葉を宛てられないでいた。

本の山の前で、身悶えしながら時折顔をブンブン振り回している様は、端から見るとなかなか滑稽である。

気を紛らわすために、火照った顔を眼前の蔵書群に向けるが、雰囲気的にエステルの悶々を解消するような本はなさそうであった。

しかし、それでも諦めないことが大切という格言を胸に宿し、射抜くような目線で本を睨みつけていると、

「きやつ!!」

後ろから抱きすくめられた。相手は言うまでもない。

「あれ、本読んでなかったの？ 意外だな」

「ゆ、ユーリ!? な、なんですか!?!」

背中から感じる熱と、お風呂上がりのシャンプーの香りにエステルは?み込まれる。

ユーリの両腕は、華奢なエステルの肩を優しく包み込んでいる。

それに、耳元で不惑な声が囁かれるものだから、エステルの脳はとろけそうになった。

(いけません! このままではいけない気がします!)

エステルの本能が警鐘を鳴らす。

このままでは、行ってはならない方向に行ってしまう。

これは危険! ピンチだ!

「は、離してください!」

なので、エステルはジタバタと身体全体を必死に動かそうとする
と、

ペロン

「ひゃいつ!」

エステルの首元を、熱くざらついた感触が流れた。

それが、ユーリの舌だと気付いた時には、

(あ、あれ……?)

身体の力の大部分が抜けていた。

そこに、

「エステル……」

「~~~~~!!」

物憂げなユーリの声が、完全にエステルの抵抗を停止させる。

そして、ユーリがエステルの身体全体を壊れない程度に強く抱きしめ続けた。

(あ、あう……)

ユーリの雄々しさと洗髪剤の混合した香りが、エステルに延々と注ぎ込まれる。

あらぬ方向に向かったエステルの思考は、『チーターは突進してガゼルに噛みついて引き倒した後、5〜10分噛み続けて窒息させてから捕食する』ことを思い出させる。

今も似たようなものではないか。

ユーリは、わたしを捕まえた後に、香り殺してから捕食するのではないかと、

そうは思うのだが、やっぱりどうしても力が入らない。

首元に停止ボタンでもあったかのように身体がどうしても動かず、ただただユーリの熱気と芳香を延々と受け続けることになってしまった。

5分ほど経ったであろうか。

もはやエステルに時間の感覚など分からないが、しばらく包み込まれてから、

「ううううう……」

か細い呻き声と共に、膝から完全に力が抜けてしまった。

もはや身体にどうやったら力を入れられるのか、その方法さえもエステルは忘れてしまっていた。

「んじや、行くか」

それを切っ掛けとして、ユーリは、脱力しきったエステルをいったん離す。

そして、崩れきったエステルの膝裏と背中に腕を回して、軽々とその身体を抱え上げた。

(……………!?)

しばらくトリップしていたエステルは、自分の視界に自分の生脚が広がっていることに気付き、意識を取り戻した。

そして、今どういう態勢で自分が運ばれているかを認識する。

(お姫様抱っこ!?)

その言葉を宛てた時、自分が正真正銘のお姫様であることを思い出す。

しかし、そのお姫様のエステルでさえ、こんな風に実際に「お姫様抱っこ」をされた経験はない。

こんな風に、男の腕が自分の膝の裏を通り、背中を回るということは人生で初めてであった。

(~~~~~!!)

しかし、それを認識したところでエステルにできることは何もない。

ユーリの顔も、自分の態勢も現実として認められなくて、ギュツと目を瞑り、身体がより丸まってしまふ。

そして、よりユーリの運びやすい湾曲を描いてしまふのであった。

再びエステルの身体感覚を取り戻してくれたのは、ふわつと柔らかな感触である。

階段の軋む音も、寝室のドアをユーリが軽く蹴って開けた音も、何もかも彼女の聴神経は伝えてくれなかった。

そして、ちよつと乱暴にユーリがエステルをベッドに放り投げた時に、エステルは知覚を取り戻したのであった。

(あ、あれ……?)

そして、エステルが現実に帰って来た時には。

照明魔導器の燈っていない暗い部屋。カーテンは開いているが月光は入ってこない。

自分の頭は少し硬めの枕の上。

力の抜けきった身体もユーリの匂いが残存するマットレスの上。

そして――

自分を覆いつくす巨大な影。

眼前に聳(そび)える巨大な黒オオカミ。

眼光是、純真な少年の面影が消え去り、ギラリとした肉食獣のそれ

と化している。

ちようど、舌舐めずりをした。

それを、見て。

ようやく自分の置かれている状況を掴んだエステル。

食事から風呂までの流れで連想すべきだったのは、『注文の多い料理店』だった！

「ま、ままままままま待ってください!!!」

目の前にいるのがオオヤマネコであろうが、オオカミであろうが危険であることには変わりはない。

生存本能か何かで、とにかくも出鱈目に手足を動かすエステルに、

「やだ」

ユーリは、エステルの爆発しそうな顔だけを両手で包みこみ、そし

(?????)

唇を重ねた。

!!!今度。今度こそ。

!!!エステルは、自分を奪われた。

唇というのが、誰であっても柔らかく、そこにも自分を停めるポタ

ンがあることを自覚した。

自分の唇が押し潰されると同時に、手も足もピシッと石のように固まってしまう。

それでも、ユーリの侵攻は止まらない。

ユーリの舌は、エステルの口をこじ開け、前歯の列を門歯から奥歯まで嘗め尽くす。

2、3度の往復でエステルは屈服し、玉手貝が開かれた。

ユーリは、牽制とばかりに、あるいは味わい尽くさんとばかりに歯列の裏側も一度だけ舌を這わせた。

次に、口蓋のすべてに執拗なほど舌を走らせる。まるで自分以外の何をもエステルの口に通るのを許さないように。

そして、とどめとばかりに、エステルの舌と自分の舌を絡ませる。

エステルの舌は、本人と同じようにペタンと伏せていたが、ユーリの舌は強引に跳ね起こし、蛇のように巻き付いた。

しばらくエステルのざらついた舌の感触を味わった後は、仕上げとばかりにエステルの口に溜まっている唾液という唾液をすべて吸い尽くした。

そして、自分の唾液を注ぎ込んで行く――

この辺りで――

ああ、この人は、本当にわたしのことが好きなんだな

そう確信できたエステルは、理性を手放した。

3. アイデンティティー

どこまでもどこまでも続く真っ赤なお花畑。

赤いお花の香しさをしっかりと受け止めながら、庭師は一人歩いていました。

庭師の仕事場は、実は赤いお花畑ではありません。

その先に場違いに咲いている、なのはなとたんぽぽの世話がお仕事なのです。

使い古されたお皿、壊れた人形、赤く煌めく宝石、二つの清らかな水晶が、赤いお花の中に落ちていているのをきちんと見届けた後に、庭師はこがねいろのおはなばたけに辿り着きました。

きいろいおはなたちに囲まれたあと、庭師はふとお空を見上げます。

そこには、まんまるなお月さまがありました。

庭師は、改めて自分の分け入っているまつきいろなおはなばたけを見渡します。

そこには、ところどころ綿毛のままのたんぽぽがありました。

それを見て、庭師は今日のお仕事を決めました。

たんぽぽの綿毛を全部刈り取ってしまおうと考えたのです。

まんまるなお月さまに白い綿毛が届いてしまうのは、イヤだなと思っただけです。

全部刈り取るのはなかなか骨が折れそうですが、一生懸命がんばるつもりです。

紫の幕をもう一度左に回した時、今度こそ庭師のやることはなくなってしまうから――

*

「むにゆう……………」

白い太陽を浴び、白いシートに包まりながら、エステルは目を醒ま

す。

隣からはユーリの体温を感じない。残り香はいつぱい感じるが、いい匂いが下から漂ってくるから、朝食の準備でもしているのだろう。

開きっぱなしのドアの先を、エステルは睨み付けていた。

「~~~~~!!!」

不意に昨晚のことを思い出して、エステルはシーツをガバっと頭から被る。

ほのかに染み込むユーリの香りが鼻腔をくすぐるが、それよりも反射的な防衛機制の方に身を任せた。

教師からよく褒められた物覚えの良すぎる頭脳が今は恨めしい。

昨日の情事が、高性能なパノラマとして展開され、鮮烈に、繰り返し、再生産されてしまっているのではないか。

その度に、エステルは足をバタバタさせた。

——第一線は越えなかった。

ただ、それだけだった。つまり、それ以外の全てはやられたということだ。

素肌という素肌は、全て隈なく隙間なく触られた。

髪も、胸も、背中も、お腹も、脚も、お尻も!!!

お城に報告すれば、ユーリは軽く極刑になるだろう。

いや、たぶん逃げるんだろうけど、少なくとも帝都にはいられなくなるだろう。

でも。

そんなことはどうでもいい。

……そんなことはしないのだから。……命の恩人だからというだけでなく。

それよりも何よりも。

気持ち良かった。

口の中を強烈に蹂躪されたり。

人並みの大きさはあると思いたい胸を、絶妙な強さで揉まれたり。

クルつとひっくり返されてお尻をマッサージのように愛撫されたり。

まるで確認しなければ自分が消えてしまうかのように、何度も何度も全身で巻き付いてきたり。

と、エステルの精神を苛む羞恥のフラッシュバックは別にしても。エステルは、人の肌に触れることそれ自体がたまらなく嬉しかった。

……思えば、わたしは孤独だった。

幼き頃に両親を亡くして以来、傳いて接してくる人間ばかりで誰一人として正面からわたしを見てくれる人は存在しなかった。

剣の師匠（せんせい）は、一応身分の別を問わず厳格に指導してくれたが、だからといって身体的な接触というご法度なことをするはずもない。

成長期、というよりは時間潰しの連続で熱を持って剣や治療術や読書に打ち込めたのは、わたし自身の嗜好というよりも、どちらかと言えば寂しさの埋め合わせのためだったのかもしれない。

人との接触の極端な制限は、何よりも愛情を齎してくれる人間の枯渴を意味していた。恋人とまではいかなくとも、気軽に話し相手になる友達すら、わたしにはいかなかったのであるから。

そこにユーリが来た。

長年、自分でも忘れるほどの年月が押し込めていたわたしの人に対する飢えを浮かび上がらせ、即座にその空虚を充足してくれた。

およその人間が尻込みをする、皇女という高貴に余り過ぎる身分を度外視して（ちよつとし過ぎなような気もするけど）、直に身体と身体で触れ合ってきてくれた。

そして……本当に愛情を注ぎ込んできてくれた。もつとも直接的なコトはまだにせよ。

男と女が一方だけでは不完全であるという創世記の神話以前に、わたしは単純な肉体的接触のできる人間を潜在的に望んでいたに違いない。

そう考えると、ユーリは、天からの恵みのように思えた。……やつ

てたことは、ケルベロスに近かったような気もするが。

まあ、自分のことはともかく。

(ユーリ……かわいかったなあ……)

一心に自分に無心してくるユーリというのも、段々かわいらしく見えてきた。

愛撫されている時は、身体が溶解するんじゃないかと気が気でなかったけど、人心地付いて身体の力が抜けきって眠っているユーリの寝顔を見ると、オオカミの様相が消失していたのだ。

オオカミが犬に変わる。

頭の中でそう切り替わった時、わたしを捕縛している両腕が、途端にじやれる子犬の肢に変化するものだから不思議なものである。

自分がユーリに救済を与えているような天使に変化した気分になった。

だから――

「おーい、エステル。そろそろ起きて手伝ってくれ」
階下からユーリの声が響く。

その声を聞いて、エステルは胸の中に、昨日まではなかった確固たるものができていることに気が付いた。

「はーい。今行きます！」

シートから這い出ながら、快活に返したエステルは、それに対して「アイデンティティー」という言葉を宛てた。

*

「あの赤いやつを探しに行く？」

「はい。やっぱり、このままではいけないと思います」

決然とエステルは、ユーリに告げた。

ユーリの作ったオムライスを食べている時の話である。

とろっとした黄色い卵液を残したまま、ふわっとした黄色い毛布で赤いチキンライスを包み込んでいる。

崩すのが惜しまれるほどの均一の取れた芸術性を偲びながら、エステルがオムライスにスプーンで割き、一口頬張った。

ケチャップと香辛料でやや濃い目に味付けられたチキンライスが、ふわとろの卵によって程よく薄められている。

チキンをアクセントに、卵とライスの混合した食感も、お城で出されたオムライスよりも上等であった。

皿出しと、仕上げのケチャップをかけただけの自分が食すのが申し訳なくなるほどだ。

オムライスのあまりの美味しさに、エステルは、朝からユーリに？み込まれそうになる。

しかし、今日は違う。

エステルは、あの怪鳥がなぜ自分を襲ったのか、それを知らなければならぬと思った。

無論、いつまた襲われるかわからないからでもあり、言葉を話せるというならば意思の疎通ができると考えたからでもある。

自分の命はもとより、護衛をしてくれるというユーリの命をこれ以上徒に危険にさらしたくないという、人としての思い遣りがその気持ちを支えている。

ただ……奇妙な話ではあるが、決め手になったのは、ユーリが本当に自分のことが好きだということを体現してくれたことである。

未だかつて想像もしたことのないほど直接的に自分への好意を向けられたことで、エステルは、じんわりとした温かみのある安心感に内包されていた。

それは、この人なら、絶対に自分を守ってくれるという信頼でもあるし、自分を孤独にしないという確信でもある。

しかし、その安心感に縋ろうとすると、どういうわけか外に目が向いてしまうのだ。

何というか、この人がいるから絶対に帰って来られる場所がある。この人がいるからどんなことにも挑戦できる。

愛情に包まれて育った家庭の子供に積極性が沸いてくるのと同じように、エステルは無条件にユーリを信頼でき、そしてあの怪鳥を探

しに行こうと決意できたのであった。

自分の気持ちの因果をすべて言語化できたわけではない。

しかし己の気持ちの齎す果実を、エステルは確実に享受する。なので、ユーリに対して自分でも驚くほど芯の通った声で、要望を切り出すことができた。

「……………」

ユーリは、言葉の代わりに、試金石の双眸でエステルの瞳を覗き込む。

昨日の少年のような無垢な瞳とも、オオカミのような野生の瞳とも異なる黒曜石の耀きに、エステルはやや戸惑う。

それは、瞳の色の多様性についてではない。

窺うような視線に見つめられて浮かんできた言葉が、なぜか「トートロジー」だったからである。

確かに、ユーリに支えられて出てきたエステルの言葉で、ユーリに対して願望を伝えるのは、遠回しな自問自答をさせていると言えなくもないかもしれない。

しかしながら、かの主張と理由の無意味な逆転を意味する概念が、この場の状況を捉えるものとしては相応しくないように思われる。

そもそも全くもって自問自答の形式だったとしても、論理の無意味な混ぜ返しをするようなものではないのだ。

しかし、それなのに、「トートロジー」という言葉が頭から離れない。ユーリから送られる視線から、そんな概念を贈られたと感じる自分に、エステルが内心首を傾げていると、

「……ま、自分の命が意味わかんねえで狙われるのも気持ちわりいかならな」

しばらくエステルは翠色の双球を覗き込んだ後、ユーリはあっさりと頷く。ついでに、「トートロジー」という用語も雲散霧消する。

はて、今の今までなぜそんなことを思っていたのか。拍子抜けなほどあつという間に埒外へと飛んで行った。

しかし、消え去った単語のことはとりあえず傍にやり、ユーリに意識を戻すことにする。

耳朶を打ったユーリの声色は僅かに弾んでいるように思われた。咎めの色は一切なく、むしろ満足げな色が滲み出ているのである。

「……いいんです？」

怪鳥を探しに行っても良いのかと、咎めも何もなくて良いのか、と二重の意味をエステルは込めたが、

「ああ。絶対オレが守ってやるから、大丈夫だ」

「……っ!! ゴホゴホッ!!」

その言葉で。

エステルは、また大ダメージを受けた。

きちんと小さく噛んでからものを飲み込むという、皇族としてのマナーが染みついていているエステルが、食事中に咽（むせ）るのは初めてであった。

しばらくエステルは俯き、なるべく小さくなりながら咳に集中する。

口の中にもものが入っていないなくてよかった。色んな意味で、醜態は晒したくない。

言葉の衝撃をある程度咳に乗せて逃がした後、エステルは、

「そ、そんな恥ずかしいこと言わないでください……!」

ユーリを一生懸命にらみながら、頑張ったと言った。

昨日は、赤面したままノックアウトされたのであるから、少し成長したと言ってもいいだろう。

しかし、

「わりいわりい。エステルが可愛いからな」

ガタンツ! と、エステルは顔をテーブルに打ち付けた。

オムライスのお皿とお茶の入った湯呑みを避けられたのは、全く僥倖なことであった。

要するに、ユーリには、いっさい自分の言葉が届いていないことを、テーブルに伏せながらエステルは思い知らされる。

ついでに、自分の中に芽生えたと思った確固たる芯というのが、どれだけ脆弱であるかということも。

さつきベッドでユーリに対してかわいい、という感想を自分も持ったことなどすっかり忘れてしまっていた。

ユーリは、エステルが初めて淹れてくれたかお茶を美味しそうに啜りながら、オムライスを食べ続けた。

*

ユーリという人は、役割分担をしてくれる人である。

それが、料理でも、買い物でも、掃除でも。

そして——戦闘でも。

「オレ一人だと万が一って時があるから、自衛できるようにもなってもらうぞ。」

……でも、心配すんな。いざって時は、駆けつけるからよ」

この一言で、エステルは、いつでも寄りかかれる壁が生まれた感じがした。

そして、真骨頂は、壁にいつでも頼れ、いつでも離れられる権利があるという安心感が齎されたということだ。

お城の中で皇女という立場だと、どうしても他人が自分を世話をしようとする。

お茶くみであろうと、不注意でスプーンを落とした時であろうと、必ず執事なり侍女なりが駆けつけるのだ。

剣や魔術を習っても、所詮それらは獲得行為。自らが生産しているだとか貢献しているという充足感は生まれえない。

元来世話好きのエステルにとって、それはなかなか苦痛であった。

ところが、ユーリは必ず何かしらの役割を与えてくれる。

そうされることで、エステルは自分の居場所ができる感じがした。

しかも、まだまだ不慣れで戸惑うことの多い自分にも呆れることなく、ぶつきらぼうな口ぶりではあるが押しつけがましくなく教えてくれる。

「注ぎ始めは薄くて、後になるほど濃くなるから、お茶の濃さが平均するように注ぐんだよ。ほれ、こういう風に」と、お茶汲みのコツを実演してくれたり。

そして、一回教えたら後は完全にエステルに委ねてくれる。夕食で失敗したお茶汲みも、朝食ではきちんとできるようになって褒められた。

バツタリと伏せているエステルであっても、確かにユーリの言葉は届いたのである。

こうした面からみても、自分の存在意義を燈されたような気がして、エステルはますますユーリの虜になっていた。

単に「守る」というならば、それこそユーリがすべてお世話すればよいのかもしれない。それだけの力がユーリには間違いなくあるだろう。

しかし、「ユーリがエステルを守っている」となれば、また話は変わってくる。

つまり、それは身体的という意味だけでなく、精神的にも満足させながら「守る」ということだ。そっちの方がエステルにとっては嬉しい。傳かれるのに内心辟易していたのであるから。

エステルの目に映るユーリは、強引に自分に存在を植えつけ、しかし丁寧に「個」を尊重してくれる、今までにないタイプの人間で、しかし理想的な人間であったのである。

だから――

「それっ！」

鋭い刃のような双葉で攻撃してくる狂暴なモンスターのプチプリを、エステルは淀みない剣裁きで冷静に仕留め、

「よくやったな、エステル」

目を細めながら称賛し、軽く手を掲げるユーリに、

「やりました！」

エステルは、ほんの少し頬を赤らめながら、しかし誤魔化すように飛び跳ねてバシンとその手を叩いた。

「ははっ……んじゃ、行くか」

「はいっー」

身体の内と外から精力を供給してくれる青年にエステルがついて行かない理由はなかった。

*

「え？ デイドン砦に行くんじゃないんです？」

「ああ。今の季節は平原の主とやらのせいで封鎖されているからな」

ユーリの自宅で文献を調べて、エステルが御伽話の中から砂漠に住まう言葉話す怪鳥についての情報を引っ張り出し、二人はまずコゴール砂漠を目指すことになった。

コゴール砂漠に行くには、船に乗る必要がある。とはいえ、帝都から出航する船に乗ると、エステルの正体が露見する可能性があった。

なので二人はカプワ・ノールという海港からコゴール砂漠のあるデズエール大陸行の定時連絡船に乗ることにしたのである。

そして、その道中、本来ならばデイドン砦を抜けて進む予定であったのだが、ユーリによるとそれができないらしい。

「困りましたね。他に道はないのでしょうか？」

「デイドン砦に行く街道から逸れて西側のクオイの森を抜ければ、ハルルには着く」

花の街ハルル。そこで咲き誇る満開の桜は、エステルが長年夢想していた場所であるが、

「クオイの森って……呪いとその身に降りかかるっていううわさですけど……」

今はそちらよりも、目下の呪いの森に対する慄きが勝っていた。

「大丈夫だって。何度も通ったことあるけど、んなもんなかったからな」

振り向きざまにユーリは、相変わらずの芯の通った声でエステルを安心させる。

ちなみに、ユーリは上から下まで黒衣を纏っているが、下はともかく上は軽く上着を羽織っているという様相であり、大きく胸元が開いていた。

その胸元から男性ホルモンが漂ってくる感じがして、ユーリの顔を見る前に大胸筋がチラついてしまうのが、うら若き乙女の悪い癖である。

高鳴る動悸を歪曲すべく、エステルは話題を転換する。

「そ、そうなんですか。それにしても、ユーリは結界の外のことをよくご存知ですね」

若干声の上擦ったという失策を、恐らくユーリは聞き逃さなかっただろう。

しかし、ユーリは何とも言えない表情を浮かべながらも、淡々と質問にだけ集中した。

「……ま、何度も旅に出りや、嫌でも詳しくなるさ」

「うらやましいな……わたし、そんな機会なかったから……どのぐらい旅に出たことがあるんです?」

「さあな。数えるのも虚しくなるくれえかな」

「……?」

ユーリは明後日の方向を見遣った。

『虚しい』という呟きに籠められた感情の強さに、エステルは首を傾げる。

「ま、いつか話すことになるだろうが、今はとつと先に進むぞ」

「……そうですね。でも、無理に話さなくてもいいですよ?」

エステルは、人間観察が得意である。とりわけ心の中を席卷する人間に対してはなおさら敏感になれる。

昨日は羞恥が塗りつぶした得意技も、地に足が付き心が充足している今日は、ますます鋭敏になっていた。

なので、自然と慮（おもんぱか）る気遣いができるのであるが、「いや……話さなければならねえ時が来るから、そんな時まで待って

くれ」

「ユーリ……」

ほんの少しだけ、目の前の男のイメージ像がグラついた。

陰に包み込まれた言葉を濾過した時、僅かな怯えの色がくつきりとエステルに耳に残存したのである。

この何でもできる人にいったい何があったのか？

比類なき剣技を披露し、全で一撃で魔物を仕留める男が怯えるようなことが過去の旅にはあったということか？

そこまでの事態とはいったい……？

「……じゃ、取り敢えずクオイの森に行くぞ。今日中にハルルには着きてえからな」

「はい……」

意外なことに、ユーリは疲労の調子を隠すようなことはしなかった。

はつきりとは言えないが、なんとなくユーリのような人は己の感情をなるべく他人には晒さないように思えたので、エステルはけっこう驚いた。

無言で歩む黒衣の背中に、エステルも黙ってついて行く。

昨日ユーリを完璧な人間だと勝手に評して気後れを感じたが、どうやら修正する必要があるそうだ。

自らの守護役が弱さを見せることは、本来望ましいことではないかもしれない。

しかしながら、エステルにとつては、その弱さこそが、ユーリと自分を真に繋げる橋架のように思われた。

完璧な人間などいない。誰もが救いを求めている。

やたらと自分を求めてくるのにも、のつびきならない事情があるからかもしれない。

そう思ったエステルは、自分が橋を渡り、ユーリの心の穴を埋め合わせてみよう、と。

元来の優しさから、そんな想いが芽生え始めたのである。

*

——選ばなかった道の先

「ああ……許しておくれ、こんなバカな母親を……」

涙を流しながら嘆く女性は、ほんの数刻前に下してしまった反射的な決意を悔悟する。

娘を見捨てたのだ。後ろから迫る巨大な猪の魔物の群れの地響きに慄いて。

確かにむずがる子供であった。行商の最中に何度手を焼いたかわからない。

けれども、何も見捨てることはなかったではないか。

まだ幼くて、大のおとなだつて震え上がる『平原の主』と呼ばれる魔物の集団に、子供が動けなくなるのは当然のことではないか。

それなのに、この馬鹿な親ときたら！

足が竦んで、クマのぬいぐるみだけを抱きかかえて地面に伏せてしまった子を。

自らが腹を痛めて生んだ子を。

そして、その無邪気な笑顔に何度救われたかわからない子を！

どうして、いつもの調子で「もう知らない！ 勝手にすればいいわ！」などとほざいて見捨ててしまったのか！

慌てて我に帰った時には、もう遅い。

既に猪の群れが視界に入っている。この距離だと、テイドン砦の門から出て救出することなどもうできない。

今助けに走ったところで、被害者が余計に増えるだけだろう。

だから、助けに行くべきではない。

母親は、そう思いつつ、しかしそんな打算的な思考に陥ってしまう自分に対して吐き気を催すほど嫌悪感が沸いた。

振り返れない。振り返る勇気もない。

自分を求めて、ぬいぐるみを抱いて助けを求めている我が子の最期

をどうして見ることができようか。

珍しいことではない。

旅仲間の商人だって、道中で魔物に襲われて大人だろうが子供だろうが何人も失ったのだ。今回は自分の出番が来たということ。

どう言葉をかけるべきかわからないという無言の慰めを受ける番が、とうとう自分に回って来た。ただ、それだけのことである。

だから――

母親はかぶりを振る。

どうしてこうも自己憐憫の言葉だけが胸の中で謳われるのか。

どうして娘の絶望と断末摩に思いを馳せられないのか。

どうしてこうも自分は身勝手なのか。

母親は、自らに忸怩たる思いを抱いていた。

もつとも。

結局のところそんな思いを抱こうが抱くまいが関係ないことをすぐに悟ることになった。

「……!? ちょっと、なんで門が閉まらないのよ!」

「わかりません!! くそっ! アイツら、もうすぐ来るつてのに!!

くそっ! くそおっ!!!」

ギリギリまでデイドン砦に退避してくる人たちを迎え入れようと、結局全員の救出が叶わないと決断した女性が狼狽する。

門番役の騎士が、閉門のために魔導器を操作しているのであるが、どうにも門の降下が途中で止まってしまふのだ。

猪の魔物が轟かせる強烈な地鳴りは、もう既におどろおどろしい登音(きょうおん)へと変わっている。

今すぐにも門が閉まらなければ、間違いなくデイドン砦にいる人間が巻き込まれるというのに!

「くそっ!! くそっ!! くそおおおおっ!!!」

騎士は狂乱のあまり涙を流しながら作業しているが、しかし魔導器は言うことを聞いてくれない。

デイドン砦に辿り着けなかった子供や男の、聞きたくもない最期の

悲鳴が鼓膜に突き刺さっているというのに！

どうしても門が閉まらない!!!

「うわああああああ!!!」

強烈な衝撃を感じた時には、もう最期であった。

「ああ……」

母親には、目前に迫る猪の群れが、天からの救済のように見えた。娘を見捨てた罪悪感の炎に焼かれて現世で獄殺されるよりも、こうして娘と同じやり方で一思いに殺された方が何十倍も慰めになる。

今、私もそつちに逝くからね――

晴れやかな笑顔のまま猪の鼻息を感じ取った母親は、安らかな死を享受する。

「なんてこと……」

閉門の指示のために砦の門の上にいた女性――メアリー・カウフマンは、目を見開きながら「平原の主」に蹂躪されるデイドン砦の惨状を見届けた。

魔物狩り専門のギルドと騎士たちが応戦しているが、いかんせん多勢に無勢。

砦を覆いつくしている猪の魔物が、この先の帝都をも困ってしまうのではないかと心配するのがもつともな数であった。

（生き残ったらどんな商売をしようかしらね。グミの流通量増加？それとも火炎属性付与の武器の流通増加かしら？）

幸福の市場（ギルド・ド・マルシエ）の社長メアリー・カウフマンは、身についてしまった商人の思考で、この現実からの逃避をはかった。

4. 光と影

ここは、世界のへそ。この世界——テルカ・リユミレースの中心点に位置する海域だ。

そこに一隻の大型船が漂流していた。いや、「漂流」と呼べるならば、この船の乗組員である海精の牙（セイレーンのきば）の連中はむしろ粹がったであろう。

しかし、無遠慮に真実を照らし出す満月の光は、時化や船の故障といった生易しい空想を照らし出してはくれない。

照らし出しているのは、ただただ夥しい数の遺骸である。

「はあっ……はあっ……」

そして、そんな無慈悲な真実を見詰めることができる人間はたった一人。しかも、もうしばらく時間が経てば、自分が人間でなくなることを自覚している男であった。

「人間でなくなる」という意味が、単に人を殺めてしまった罪悪感という喩えならば、慰めになるどころか、そもそもこの男はこんな死体の山を築いてはいない。

倒れている己の仲間や護衛対象の乗客のように、物理的に魔物へと変化（へんげ）するという意味だからこそ、男は自分の得物を振るわざるを得なかったのだ。

男の身体からは、肌が焼け落ち、段々と骸が剥き出しになりつつある。

そして、その骨は肥大化して、理性というものを削ぎ落してから、強力な魔物へとその身を窠（やつ）すのであろう。

……その顛末は、目の前にいる死体たちが如実に示しているのだから、間違いはない。

「……………」

どういう仕組みかはわからない。なぜこんなことをされたのか全くわからない。

わかっていることは、この船——ブラックホープ号にあった大量の魔導器と術式がいきなり発動し、大量のエアルが仲間や乗客に注ぎ込

まれ……魔物たちの饗宴という地獄絵図となったことである。

そして、男にできたことは、馬謖を斬る思いで魔物に変化してしまったほぼ全員を殺害し、彼らが人を殺める怪物になるという不名誉を被らないようにすることぐらいであった。

右手に拳銃、左手には船の錨を模した剣——奇しくも処刑用の剣に似つかわしい——をもって、一人を除き全員を殺害した。

(首領(ボス)……)

そして、あとただ一つやるべきことは、重症に呻く己の首領を楽にし、自らも慣れ親しんだ海へ投擲すること。

仲間を殺すことを躊躇った(しかしそういう人間でなければ自分が慕い付き添うことはなかった)心優しき首領——その金髪を万感の思いで眇(すが)める。

思い起こされるのは、自分たちの船を得るのに四苦八苦、借金を重ね、大方外れに終わった宝探しの日々。

僅かでも報いがあれば、また大仰に飲み食いして借金を増やす馬鹿な日々。

——そんなすべての心覚えを、この老女と共に築き上げてきた。

もしも。

もしも、海精の牙(セイレーンのきば)に伝わる不老長寿の妙薬アムリタが今手元になれば、首領に飲ませる絶好のタイミングであったであろう。

ただ、そんなことは歴史から虚しき空想を捻り出すのと同じこと。今回の仕事では使わないに違いないと、アジトに置いてきてしまった。

今からアジトに向かっても、徒勞に終わるのは首領の状態から見て一目瞭然。

首領が変貌してしまった仲間に身体が硬直している間に、刃が腹部から背中まで貫いたのを、男は目撃してしまっていた。

真夜中の、こんな世界のご真ん中の海で船が通りがかってくれることを期待するの……劇の中だけの話であろう。

だから、海精の牙(セイレーンのきば)の参謀役——サイファーは

決断した。

「すみません……首領……」

自らの不甲斐なさとこれからの所業に心の底から謝罪しながら、サイファーは、老女のこめかみに銃口を突きつける。

「あり……がとうなの……じゃ……今まで……」

「っ!!」

喋れなくて当然の状態から振り絞られた首領——アイフリードの感謝の言葉は、結果としてサイファーの最後の逡巡を奪い去った。

引き金を引いた時、悼むというより驚愕の感情が己を席卷したのに気付いた時には——

ついに、愛すべき者を殺してしまっていた。

「ふう………ふう」

その瞬間、まるで一仕事終えた時のように溜息をつけたことで、サイファーは己のかわいさというものを完全に捨て去ることができた。その事実には思わず笑みがこぼれる。

ついに、精神まで怪物になることができたようである。さらば、死することになにか躊躇う必要があらんや。

サイファーにそんな生への執着を捨てさせることこそが、アイフリードなりの最期の贈り物なのだ。サイファーは、そう思うことにする。

そんな無慈悲なはずの慈悲に心から感謝の想いを捧げ、先に死に逝ったアイフリードの姿を目に焼き付けながら、ついにサイファーは己の口の中に銃を突きつける。

そして——

——世界の中心に水没した愛が、錨に引っ掛かることはなかった。

*

暗くてじめじめとしていて重い。

クオイの森というところを三つの形容詞に集約するならば、このように結論づけられる。

聳え立つクオイの森の大木は、弱肉強食をそのままに、枝を広げ、葉を増やし、縦横無尽に日光を独占する。

そのせいで疎（まば）らにしか陽の光が森の中に入って来ず、運良くその場所を獲得できた花の周囲を萎れた下草が恨めしそうに囲んでいる。

土壌からの水気も木々に覆われて拡散できず、さらに葉の群れの蒸散によって森の上下に水分が囲われており、暗中で纏わりつくような湿気が肌を蔓延った。

そして、生育悪く日光を得られなかった不憫な葉たちは、恨みの籠った二酸化炭素を排出し、森の空気をどんよりと重くする。

先ほどまでいたカラツとした太陽の下にあった草原地帯とは真逆で、しかもクオイの森の呪いの話が頭から離れないエステルにとって、この森の中を歩くのは不気味で不快で気が重かった。

とはいえ、前方を歩く影そのもののような様相のユーリの背中は、そんなエステルの胸中を晴れやかなものにしていた。

森に入る前の不安げな表情もどこへやら。この人について行けば絶対大丈夫であるという無条件の信頼が、その背中から醸されているのである。

「蒼破刃！」

それは、蒼い剣圧が一の剣の振るいで四方八方に飛び散って、全ての魔物を一撃で仕留めるからでもあり、

「きゃっ！」

「おっと……大丈夫か？」

「は、はい！ すみません……」

「気にすんな」

視界不良で大木の根っこに躓いたエステルに事も何気に手を貸して、転倒を防いでくれたりしたからでもある。

「……………」

しかし、それらだけに終わらない。

エステルはさり気なく差し伸べられた逞しい手の平の感触を思い出しながら、すぐに周囲の警戒に移ったユーリを見遣る。

昔の言葉だと、「影」は「光」の意味を持ったらしい。どうしてそんな意味を持ったのかを、エステルは今現在まざまざと実感させられていた。

一見森の闇の中に溶け込みそうなユーリの姿は、それがユーリであるが故に、確かに光り輝いている。

ごく稀に木漏れ日に入った時に光の中から現われる大きな人影にエステルが覆われたときは、暗いはずなのに明るかった。

『光は影の 影は光の 果てまで付いて行くのだろう』

エステルは、自分の好きな歌詞のフレーズが、これほどまでにマツチングしている情景に出くわすとは、想像だにしていなかった。

まさしくそうなのだ。ユーリという男は、その二つの端境を自由に行き来できる。

巨木よりも存在感の大きな影の輝きに、せいぜい自分は、小さな光として追従するに過ぎないのだろう。

それでも。

大きな人が自分を求めている限り、自分は矮小ながらも付いて行く。

願わくば——自分の優しさがほんの僅かでも輝きに同化できることを信じて。

*

もうしばらくだけ、エステルにとっての輝かしい時間は続いた。

「エステル。ちよつと行った所に、魔物が群れているから、ちよつと別のところで時間を置くぞ」

「そうなんです？　ならそうしましょう」

先導するユーリの視線の先を追うと、確かにウルフの群れやキラ―ビーといった魔物たちが奥の草叢に屯（たむろ）していた。

何かを囲っているようだが、ここからでは遠くて彼らの獲物は見えない。

でも、ほとんどの魔物は同種族同士ですら社会を構成したりはしないので、時間を置くというのは当然のことと言える。

もとより、魔物狩りのために旅をしているのではないのだから。

「ほれ、エステル。こっちこっち」

「は〜い」

ユーリが足早に先導した先には、

「わぁ……い！」

赤、紫、橙、黄色と豊かな色彩の花々で覆いつくされた花畑があり、エステルは感嘆の声を上げる。

まるでその花の色を意図して真似たかのような蝶々も優雅に舞っている。

サラサラとそよぐ清澄な風音ともに、渾然とした薫りが、うっとり目を瞑るエステルの鼻腔をくすぐった。

どうやら、何らかの要因でここだけ大木が生育できず、結果としてできた陽だまりに花畑が生成されたようだ。

植物の憎しみを具現化したような、うばたまの暗黒樹林と僅かに分け隔てたところで、ここだけは植物が仲良く調和しながら明るく暖かく軽やかな空間が形成されている。

そんな桃源郷のような景色に、エステルは大いにはしゃいで、花畑に向かって駆けて行く。

「すごい！　すごいです！　世界にはこんな場所があったんですね！」

自らを歓迎する花園を乱さぬように気を付けながら、エステルは若草の絨毯の上で蝶たちと同化した。

外という長年夢想していた空間の理想を体現した光景に自らが溶け込んでいることすら、およそ信じられないものであった。

それが幻想ではないと確かめるように馨しい香りで肺を満たし、柔らかな草原に足がついていることを確認するべくクルクルと舞う。

齢18に至るまで一切実現できなかった美しい自然との共演を、飢えを満たすようにエステルは享受していた。

「はふう……」

そして、自らが現(うつつ)にしていることを全身で証明しきった後は、まるで花や蝶の一員となるように仰向けに寝転がった。

「すげえはしゃぎようだな、おい……」

半ば呆れるように、しかし感慨深げな声を上げながら、ユーリは笑みを浮かべる。

「だって、ずっとずっとずっと、こんな景色を夢見ていたんですよ！だからとっても嬉しいです！」

小さな桜の花は、花畑から興奮冷めやらぬ声音で、周りの花々の花粉を舞わせた。

「ユーリも！ こっちに来てください！一緒に楽しみましょうよ！」

「ああ……わかったよ」

ユーリの声こそはやや気怠げであったが、足はそうでもなかった。花のない所を歩きながら、大の字になっているエステルの傍にゆっくりと腰を下ろす。

そして、華の興演に目を細めながら、自らも楽しむことにした。

*

しばらくの間、自然の囁きだけが世界に存在する音であった。

蝶のパタパタと舞う音すら耳を撫で、時折風が閑やかに芝生をそよぐ。

そんな幻想のような理想空間を、エステルは光である影と共に、精一杯享受していた。

そして、十分に間をとった後、エステルがそんな静謐さと麗（うら）らかさをかき乱さぬように祈りながら、そつと口を開く。

「……ユーリ、ありがとうございます」

「ん？ 何がだ？」

「わたしをお城から連れ出してきて。こんな綺麗な場所にまで連れてきてくれて」

「選んだのはエステルだろ。お前が自分で行きたいって手を引かないきゃ、ここまで来なかったわけだし。」

お前が旅に出たと言って初めてここまで来れたんだろ」

ユーリは、若草と同化したような双眸を直視しない。

「それでも……ユーリがいなければ、わたしは……」

「よせよ。そうやって礼を言われるやつじゃねえよ、オレは」

ユーリは本気の感謝の言葉を受け取ろうとしない。

でも、エステルにとってそれはちよつと面白くない。

なので、たまには趣向を変えて攻めてみることにした。

「もう……いいじゃないですか。素直に受け取ってくれたって。」

わたし、ユーリにはとっても感謝してるんですよ？」

「……つたく。自分を危険に晒そうとしたヤツに何を言ってるのやら」

「あ、自覚はあったんですね」

まあ確かに昨日のユーリはオオカミそのものであっただろう。

とは言え、ちよつと乱暴だけど、それ以上に自分を満たしてくれる

優しい人という像は、エステルの中では崩れない。

少なくとも、奥の道に陣を張っているウルフたちとは訳が違う。

魔なる性質を持つウルフたちは、エステルをこのような幻想的な空間に誘ったりはしないのだ。

「……まあ、いいです。いつかわたしが、頑張つて恩返しをするんですから」

ほんの少し拗ねたようにエステルは、目を瞑る。

「ほう、そうか？ なら、一つ頼みたいことがある」

「えっ？」

ユーリの真剣な声色が、再びエステルを淫色（くりいろ）の瞳へと合わせさせる。

瞳の中の色も、ユーリの剣技と同じくらい尖鋭なものに見えた。

そして――

「ずっと生きててくれ」

再び、静寂（しじま）が二人の間に割って入る。

しかし、先ほどとは性質を異にする静けさだ。

今度は、風のそよぎも、蝶の羽音も、エステルには一切入ってこない。

恐らくエステルの意識を取り戻させたのは、僅かに目に入らんばかりの嫋（たお）やかな髪の毛がユラユラと動いたからであろう。

ユーリの瞳を瞳として認識でき、ようやくと己の意識を奪った言葉を釈した時、

「ふええええっ!!」

また、エステルは真つ赤になって飛び跳ねた。桃源郷は熱く眩くなり、そして重力がひっくり返ってしまったのだ。

図らずもユーリと思い切り距離を取り、剣も盾も装備しないが、臨戦態勢に近い構えを取った。

そして、先ほどまでの自分が如何に無防備な状態であったのかを再認識した時、また戦慄する。

オオカミの前で何という格好をしていたのだ。自分を頂いてくださいと、お皿の上に載っているような状態ではなかったか。

自分を夢の世界へと連れ添ってくれても、所詮オオカミはオオカミ。

あそこにいる魔物ほどではないが、確かに警戒すべき存在なのだ。

特に、臆面もなく放たれるどんな蜜よりも甘い言葉。

それが上辺だけの甘言であるならば、どんなに良かったか。

そうではなくて、真剣勝負の緊張の込め、まさしく真の言葉だからこそタチが悪い。

まだまだ心が脆弱なエステルにとっては、余りにも切れ味が鋭過ぎた。

とはいえ、昨日よりは、ほんのちよびりだけ強くなったエステルは、「だ、だから、突然そんな……は、恥ずかしいこと言わないでください！」

肩で息を吐きながら、たどたどしくもしつかりとした仕返しができた。

しかし、相手は真剣を鞘には収めない。ただ、朝食のような甘い攻撃の幕無しではなかった。

「いや、エステル。……これは大事なことだ。

絶対にオレより先に死ぬんじゃない。そうだったら、オレはお前を許さねえからな」

「……………」

エステルは、思わず言葉を失う。

ユーリの言葉が、あまりにも強い芯に支えられ、あまりにも真つすぎ過ぎて、とてもとてもすぐには言葉を返せるようなものではなかったのだ。

そして痛烈を超越した言葉は、エステルの心に違和感を齎す。

どうして自分にここまで？

一目惚れっただけで、男の人はこんなに強い言葉を？

わたしがお姫さまだから？

——違う。そんな風に見られたことは一度もない。『エステル』以外の目で見られたことなど全くない。

なら——

「わたしとユーリって、どこかで会ったことが？」

自分の記憶にはないが、ここまで想われるようなことがユーリにはあったのだろうか。

もはやそれぐらいしか思い浮かべられない。

「……………」

鋭い視線を送り続けたユーリは、その言葉で目を落とした。それを見て、はじめてエステルはユーリを上回った気がする。

しかし、迷子の子犬のようにシユンと俯くその姿を見て、喜悦に浸ることなど到底考えられない。

むしろ、触れてはいけないものに触れてしまったようなそんな罪悪感すら感じる。

でも、ユーリの心を支えられるのなら支えたい。自分が微力ながらも力になれるなら――

森に入る前にそう考えたことを思い出し、エステルはユーリが口を開くのを待った。

「あ、あの……」

「わりい………まだ、説明できそうにねえ。

……もうしばらく、待ってくれ」

その懇願は、継るような憐憫さを伴っていた。

優しさの塊であるエステルが、それを無下にすることができないはずもなく、

「はい……」

ユーリに合わせるように、声のトーンを落として頷いた。

「でも、約束だ。お前は、エステルは、絶対に生きてくれ」

強い調子のユーリの言葉に、

「はいー」

気圧される形ではあるが、エステルは声を張り上げた。

「良い返事だ」

ユーリは、瞳を閉じて、噛みしめる様に満足気に首を縦に振る。

「……さて、アイツらも散ったみたいだし。そろそろ行こうぜ」

気が付くと、森の奥のオオカミやキラービーの群れはなくなっていた。今なら安全に抜けられる。

そして、再び前に行くユーリの背中を追う時間が始まった。

だが――

「……………」

現代語の「影」には、きちんと影の意味があることを、エステルは、

はつきりと思い出させられた。

*

「もうすぐ出口だ」

ユーリの声音は平時のものに戻る。

花畑を抜けて、ほんの僅かながら魔物と戦い、無傷のまま二人は森の出口に着いた。

ようやく花畑以外で、燦燦たる太陽を浴びることができるようになるのだ。

もつとも、エステルにとっては、そんなことよりも眼前のユーリの状態が気掛かりであった。

花畑に入る前の方が、よっぽど明るいように思える。

とはいえ、迂闊には訊けない。

もちろん、先ほどのユーリの躊躇いを慮ったからでもある。

しかし、それ以上に、心なしか森の出口に向かうにつれて、ユーリの影が色濃くなってきたように思われるからというのが大きい。

それはちやうど、あの魔物の群れがいた前後に差し掛かった頃合いからのことであった。その辺りから、とてもとても訊ねられるような雰囲気ではなくなったのである。

「はい、ハルルの街が楽しみです」

ほとんどというより完全に虚偽の笑顔を、エステルは人生で初めて浮かべた。

そして、声をきちんと弾ませられたかどうか——そんな心配をするのも初めてのことであった。

「んじゃ、とつとと行きますか」

闇の森から眩しい太陽の下へ、ユーリは進み出る。

その瞬間、目に突き刺さる太陽のせいで、影は見えなくなった。

とはいえ、強い光で影がかき消されたというよりは、誤魔化されて

消されたようにエステルには思えてならない。

しかし、これから行くハルルの街を想いながら、エステルはユーリに黙って追従せざるを得なかった。

——太陽を浴びながら、ユーリは、もう一度だけ暗黒のクオイの森を見つめ返した。

5. 夢の終わり、現実への回帰

エステルは、ユーリに膝枕をしていた。

無駄に豪華すぎる自室のソファに座り、自分の膝にユーリの頭を載せている。

大いに興奮しながら、エステルは、己の腹の方を向いて眠っているユーリの重みと温かさを感じ、そのサラサラとした長髪を梳（くしけず）っていた。

ちなみに、ユーリの顔は基本的には見えていない。

というのも、エステルは市民街の学園の制服を着用していて、その赤と黒のチェック柄のスカートで、ユーリの顔を覆っているからである。

——そして、ユーリが目を醒ました瞬間に見る光景を必ず自分の履いている黒いパンティーにするようにしていたのであった。

自分の生脚の上でユーリが寝返りを打ちそうになる度に強引にスカートの中に引き戻す辺り、とても徹底している。

規則的な寝息が股間を刺激して、背徳的なくすぐったさにムズムズする。

自分の太ももが水枕のようにきちんと柔らかいかは、ちよつと不安だったりもした。

「はう……」

自分の膝を枕にユーリが寝ている幸福と、起きた瞬間にまた怒られるかもしれない憂鬱に、エステルは少し複雑な溜息をこぼす。

ユーリが勉強に疲れて、本当に珍しくぐったりと眠っている時にこうしたのは良いが、こうやって破廉恥なことをしてしまったら、また機嫌を損ねてしまいそうで怖い。

けれども、これは賭け。あれこれやってるのに、全然振り向いてくれないユーリに対しては、こうやって強引に攻めるぐらいでちょうど良いのだ。

……何だかんだ言って、ユーリは自分の傍から離れないし。

——しかし、詰めが甘いのがエステルである。

「ふわあ……」

この世で最も強くて、格好良くて、さらに美しさまで兼ね備える勇者様の無防備な姿も、ずっと眺めているとどうしても飽きて来る。

時折スカートをめくってユーリの寝顔を覗き煽情的な気分になつてから閉じるを繰り返すと、段々と眠気が伝染してくるのも当然のことであつた。

昨日計画を思いついて以来そのまま保ち続けた緊張と興奮で、前の晩によく眠れなかつたのも大きい。

視界の外縁にある黒のハイソックスに包まれた足と茶色の革靴を脳が認識しなくなり、視界の中心を占める大好きでたまらないユーリの寝顔も眠気のせいで遮られてくる。

そして、うつらうつらとお花畑な頭を揺らし続け、ついにはカクンと俯き、高級な櫛を片手に、エステルを意識がなくなった。

*

——夢だつた。

夢で眠つた瞬間に起きるのもどうかと思つたが、ひとまずはあんな羞恥心を自ら曝け出すような真似をしているのが現実の自分ではなくてよかつた、とエステルは夢の中とは別の意味の溜息をこちた。

安堵とは別に、自分の深層心理はいったい何を考えてるのやら、とも思つたが。

「気が付いたか？」

「はい……」

硬いながらもあつたかい枕と、髪の毛を優しく梳(す)いているタオルケットの触感を心地よく感じながら、反射的にエステルはユーリに返事をする。

タオルケットに包まれているせいか、視界は暗い。

でも、なんだか、黒と肌色が混じつてるような……

「えっ!？」

嗅覚が回復した時、エステルは気が付いた。

昨日何度も嗅いだユーリの……雄々しいながらも恐ろしいまでに甘い匂い。それが脳髓を強烈に刺激している。

ということとは、自分がいま臥所（ふしど）にしているのは……

「すすすすみませんっ！ ……ふにゅっ！」

「まだ寝ておけ。立ち上がるのは、ちゃんと身体が回復してからしろよ」

慌てて起き上がろうとしたエステルは、頭を押され強制的に寢床へと戻された。もといユーリの太腿へと戻された。

そう。夢とは逆に、ユーリが、エステルに膝枕していたのであった。自分の髪の毛を梳（す）いているのは、タオルケットではなく、ユーリの手櫛。

目を醒ました時に見たのは、ユーリの鍛え上げられた腹筋と普段着の黒衣。

膝枕をする・されるの彼我がひっくり返っているだけで、夢と同じ状態であった。

膝枕と言うのが、するのもされるのも男と女のどちらでもいいのかな、と思いつつも……

しかし、今はそれを考えるべきではない。

——どうして気が付いたらユーリの膝の上にいたのかということ推測しながら、ハルルの街の悲劇を思い出さなければならなかった。

「それで……生きてる人は？」

頭を撫で続けるユーリに、エステルは上目で訊ねた。

「………………。ダメだった。誰もいねえ」

「そんな……」

眉を寄せ、険しい顔でユーリはかぶりを振る。

そして、エステルの髪の毛を梳（くしけず）る速度が増す。

もはや、良く整えられた髪をグシャグシャにせんという勢いであつ

た。

しかし、そんな些末なことにエステルを意識は行かない。行くわけもない。

「わたしたちが……もつと早く着いてたら「エステル」」

どうしようもない方向へ思考が沈潜しようとするエステルを、ユーリは鋭い声で制す。

「……こんなことは誰にも予想できなかった。

お前は、何も悪いことをしちやいねえ……それをきちんと認識しておけ」

「でもー」

「そうやって、何度も何度も『ああすればよかった』『こうすればよかった』って考えに逃げて、現実と向き合わずにただ時間だけを浪費するヤツをオレは何度も見てきた。

……少なくとも、この事件でエステルは何も悪いことをしちやいねえし、昨日からここに着くまでの行動にほとんど余計なことはなかった。

だから、そうやって自分を責め立てるんじゃないやねえ。——それこそ、ここで死んじまったヤツに迷惑だ」

「……ユーリ」

相変わらず、ユーリの言葉には実が伴っている。

経験や観察に裏打ちされた確信があるからこそ、ここまで自分の心に響くのだろうと、エステルは思う。

それは、慰めとまではいかなくとも、確かに取り留めのない思惟に墮落していくことを回避させる矯正力は持っていた。

……でも、それでも。

「……わたし、まだしっかりと受け止められません……うつつ……」

世間から隔離されていたエステルが、あまりにも忌憚なき真実を受け止めることは、まだ、できなかった。

感受性豊かな彼女は、死んでしまった人と街の苦しみと無念をどうしても想像してしまう。

魔物に噛まれた時、どれほど痛かっただろうか。

自分の身を守ろうとして自分の家に火をつけた時、どんな思いだっただろうか。

まだまだ未来のあったはずの子どもたちが、ここで生涯を終えてしまふとは、どれほどの心残りがあつただろうか。

そして……街のシンボルであるハルルの大樹は、自分の街を守れなくて、どれほど悲しんでいるだろうか。

そんな死んでしまった人たちの想いを汲み取ってしまうと、体の内側からこみ上げてくる涙をどうしても抑えきれない。

「わかつてる。……オレはここにいる。エステルが泣き止むまですつとここにいてやる。」

……だから、今日は思う存分泣いておけ」

「はい……あ、りがどうございます……」

エステルの涙声を掻き消すように、ユーリの手櫛は素早くなる。

耳に垂れるピンクの髪の毛の摩擦が、紛れもなく自分と現実とを遊離させていた。

そして、エステルはユーリのお腹に顔を押し付ける。腕を背中に巻き付け、しっかりと固定する。

——人がいるという温もりを、今日ほど感じた日はなかった。

でも、それと同時に——

*

夢は壊された。迂回されていた現実へと回帰してしまう。

——ハルルの街は滅んでいた。

桜吹雪のピンク色の花びらがハルルの街を訪れる旅人たちを優美に歓迎するような理想的な光景はない。

桜の花びらの堆積のせいでハルルの街に住んでいる人々が、玄関の掃除の手間を増えて内心迷惑しているような現実的な光景もない。

視界を席卷する光景は、ただひたすらに死体と魔物と炎だけであつた。

夕日影に感嘆することなく、遠目に映る黒煙を見咎めてユーリと二人で急行したところ、まず街の入り口で多種多様な武器を持った大人たち……だけでなく子供たちまでもが何人も血を流して死んでいた。それだけでエステルには十分にショッキングな光景であつたが、ユーリがお前の治療術を待っている奴がいるから今は踏ん張れ、と叱咤してくれたことで辛うじて正気を保てた。

とはいえ、家々から立ち込める炎と煤煙、人と魔物から漂う渾然一体となつた腐臭、そして、オオカミの魔物たちによるムシャムシャという咀嚼音……入口から見回した限りで既に生存者の存在は絶望的に思われた。

「生きてる奴らの前に、まずはコイツらを片づけねえとな」

憤怒の表情で目を尖らせるユーリは、いつものように片手だけで剣を引き抜き、臨戦態勢を取って駆け出した。

エステルもそれに続いて剣と盾を構えたが……結論から言えば、その必要はなかつた。

まず、ユーリは人を丸呑みできそうなほどの巨大なオオカミの魔物——ガットウーズという凶悪な魔物だ——が飛び掛かつてきたところを、

「円閃牙！」

剣の根元を支点とする縦の高速回転で真つ二つに切り裂いた。

そして、周りにいたその仔たち——ガットウーズ・ピコを、ついでとばかりに淀みない袈裟切りの連続で屠る。

「守護方陣！」

さらに、剣を地面に突き立て……天まで届かんという勢いの、同心円状の光の柱をつくりだした！

(すごい……)

エステルが思わず魅入るほどの、強烈な守護の光柱。

それを認めて、ハルルの街に散開していた魔物たちが続々と集まってくる。

狙いは、もちろんユーリ。けれども、エステルには、ユーリは絶対に負けないという確信が持てた。

「へっ！どっからでもかかって来いよ！」

不敵に挑発したユーリの瞳は、恐らく笑っていないなかっただろう。

飛べない大型鳥のアックスビーク3体を、『幻狼斬』という瞬時の背面取りで、あっという間にまとめて切り裂く。

巨大な蜂の魔物のビーたちは、『爆碎陣』の火炎の一撃で大地に叩き伏せる。

そして、多少知恵があつたのか、個々では敵わないばかりに小型の魔物のウルフたちが一斉に噛みつきこうとしたところを『烈碎衝破』の衝撃で一気に蹴散らした。

最後に、鈍重大木の魔物であるトレントを、ユーリの十八番（おはこ）とも言つていい『蒼破刃』の蒼い剣圧で吹き飛ばす。

こうして、ひとまずの魔物退治に終止符を打った。

「……………」

ここに来るまでの道中で、高精度なカリキュラムのようにエステルに相応の敵を回し続けたユーリが、一切の手加減をしないところなるということのエステルはまざまざと思い知らされた。

一体どれほどの魔物と戦い続けられるのか、エステルには見当もつかない。

しかし、言うまでもなくそんなことに思索を耽らせるべき時ではない。

「エステル、行くぞ」

「ええ」

まずは生存者を見つけないと。

*

まず、ユーリの『守護氷槍陣』の水で火を消失させ手近な民家に踏み込むも……炭化した人の姿しかない。

火の巡り具合からして、もう少し早く来ていれば、と思うが、どうしようもないことと強引に割り切って次の場所へと向かう。

もちろん家々を回る途中で、生きている人間がいなか目を凝らしたが……皆既に事切れていた。

すべての家の火災を止めて生存者がいないことを確認し終えた後、今度はハルルの街の外を隈なく調べた。

しかし、やはり全員が全員明らかに死んでいるとわかる状態であった。呻き声すら、全く聞こえない。

……喉笛を切り裂かれていたり、内臓が剥き出しになっている死体などは、エステルには一瞥するのが精一杯である。

そして、太陽が沈み切っていないというのに暗夜行路を駆けるような気分で、街の頂上部、ハルルの桜の大樹の根元に辿り着くが……やはり生存者はいない。

その樹に埋め込まれた結界魔導器の魔核の弱々しい光が、街の人を守れなくて申し訳ないと謝罪しているように見えた。

「……………どうして結界が作動しなかったのでしょうか？」

こんなにも無機質で乾ききった声を発したのは、エステルにとって生まれて初めてのことであった。

その問いかけに、言っても慰めにならねえだろうが、とユーリは前置きしてから答える。

「ハルルの街の結界魔導器は、満開の季節になると結界の働きが弱まっちゃう。

そんな時に魔物に襲われたみてえだ。

……ここの地面、緑色になつてんだろ。これは、ハルルに着いた時、最初に襲って来た魔物の毒だろうよ。

これをこの樹が吸収しちまって、結界が機能しなくなったんだろな」

ユーリもやるせないという溜息を隠さない。

「……騎士団の人たちは、何を？」

「巡礼のこと言ってるのか？ アイツらにそれを期待するだけ無駄だぜ——本当に」

エステルのイフの願望を、ユーリは容赦なくバツサリと切り捨てる。

憤りを包もうとする配慮は全くない。

「……………」

エステルは、二の句が継げない。

魔物の毒を吸収した大樹の桜の花びらは、黒ずんで見える。

それと連鎖して、自分の唇もザラついてくるようにエステルには感じられた。

そんな呆然自失のエステルをユーリがいったん引き戻す。

「エステル。取り敢えず、宿に行こうぜ。今日はもう考えるのは止めるな」

「……………はい」

覇気の消失したエステルは、我を張ることなく、ただただユーリの声の導きだけに従った。

「野郎……………」

「あつ……………あつ……………！」

木をあしらってできた——もう既に半壊の様相を呈している宿屋の入り口を開けた途端。

顔が半分消失していた男の姿が視界に飛び込んで来た。

半面だけ残った、慄きが張り付いた表情が、断末魔の状態を如実に表している。

ユーリはそれを見て、そして宿屋の惨状を認めて、低音ながらも今までにない憤怒の声を上げる。

しかし、その怒声がエステルの耳朶を打つことはなかった。

……今までは、微かながらも、生きている人がいるという可能性に縋って何とか気丈に振舞おうと努めてきた。

だから、およそ人の姿を取らなくなった死体を見ても、生存者が存在しているはずだという希望で認識を強引に屈折させてきた。

——しかし、火の手の回った家の中で見た原形を保っていない

人々、さらに外に遍満する死者を見続けて、生存者がいるとは思えない現実を無意識下で認めた時。

エステルの中で、ギリギリの所で張り詰めていた緊張の糸が切れてしまった。

それ故、眼前の凄惨な死体をしかと脳が認識し、その直截的な衝撃を処理しきれなかった。

エステルの視界は、真っ暗になって、膝が折れる。

——顔（くずお）れることはなかった。

*

「……もう大丈夫か？」

「はい……ひとまずは」

エステルは、自分を情けなく思いながら、ようやくユーリの膝から頭を上げる。

そして、ベッドの上のユーリの隣におずおずと座りなおした。

まただ。

結局また、ユーリに頼ってしまった。

こんなんじや、いつまで経ってもユーリのためになることができないというのに。

「ほれ」

ユーリはさらに自分にハンカチを突き出す。

しかも、泣きはらした顔からそっぽを向いて、自分の羞恥心を氣遣ってくれる。

——まったく、どこまでも紳士的な人だった。

ありがとうございます、と顔を伏せながら礼をし、エステルは、どこまでも柔らかく、しかし乾いているハンカチに顔を埋めた。

そして——ほんの僅かだけ顔を拭いて、すぐにユーリにハンカチを返す。

「もういいのか？」

「はい……」

ユーリは少し目を丸くしていた。

エステルとしては、このハンカチにあんまり長い時間頼りたくなかったのだ。

ほんの少しでも、気丈なところを見せたくて。

とはいえ、まだ顔が火照っているのは間違いないだろう。

なので、宿屋の部屋に張り巡らされている別のことを訪ねることにする。

「この、わたしたちを覆っているものは何なんです?」

「これ? 『結界』つてやつさ。一日だけなら、魔物も風雨も完全に凌いでくれる代物だよ」

「そんなすごいもの、よく持ってますね」

「ま、いろいろ旅してきたからな」

ユーリの語調には、誇らしげな色はまるでなく、むしろ自嘲の色が濃かった。

結界の外を旅立つのは並大抵の人間にはできないことなのに、そんな風な口調になるのが、エステルにはちよつと信じられない。

しかし、それを訪ねる前に、太陽が沈む方角とは反対の窓を流れるように眺めていたユーリは、エステルに向き直りある提案をする。

「明日、墓をつくってやろうぜ」

「墓……う?」

「ああ。このままこの街を放っておいて、街の奴らが魔物のエサになるのは後味悪いだろ?」

なら、オレたちで墓つくって、ほんの少しでも慰めてやろうぜ」

「ユーリ……! はい!」

慈しみの籠ったユーリのアイディアは、エステルの心を震わせ、この街に入って初めての笑顔を齎した。

それは——どうやら満面の笑みだったようで、ユーリの顔を逸らさせた。

そんなユーリの仕草の意味に気付かず、エステルは首を傾げながら、どうしたんです、と訊ねるが、

「何でもねえよ。……さ、今日は早く飯食って、とつと明日に備えつ

ぞ」

ベッドから立ち上がったユーリは、テキパキと言って、部屋の出口へと向かった。

*

——桜の木の下には屍体が埋まっている

最初にこのフリーズを聞いた時、何と倒錯的なこと……とエステルは思ったものだが、まさか、自分の手でそれを実現することになるとは夢にも思っていなかった。

……いや、この場所に来るまで、ある意味でずっと自分は夢の中にいたのかもしれない。

お城という無菌室にずっと隔離されていたから現実を知らなかっただけで、外にいる人間はずっとずっとこんな刺激の強過ぎる日常を享受していたのだろう。

ユーリの出現、クオイの森の花畑、ハルルの街……事実は小説よりも奇なり、というのは紛れもなく真実なのだ、エステルは心の底から実感していた。

さて、そんなエステルは現在、朝日を浴びながら、この街を見渡せるハルルの桜の大樹の前で、シャベルを使って穴を掘っている。

少し硬い土を切り出し、目一杯掬ってから土砂を放り投げる——呆れるほど単調で、しかし結構な重労働であるが、武醒魔導器（ボーディブラスティア）を装着しているエステルにはあまり関係のないことだ。

武醒魔導器（ボーディブラスティア）。装備者の能力を高める魔導器である。

これを装備しているからこそ、この世界の人間は、体躯に勝る魔物と渡り合え、常人では不可能な剣技や魔術を用いることができる。

……まあ、これがなくとも普通の人とはズレた鍛え方をしているエステルは、かなりの体力があるのだが、それには触れないでおく。

エステルの役割は、ハルルの大樹の前に共同墓地の大穴をつくるこ

と。

……それは肝要なことであると彼女も理解しているのであるが……結局ユーリに重責を担わせているという自責の念に蝕まれてもいた。

ユーリの役割は街に点在する死体の回収と運搬。

一夜明ければ、絶望的な腐臭が漂い、散乱する血と肉を求めて魔物が再び跋扈するハルルの街。

遺体に対してまだ生理的耐性が付いておらず、しかも一撃必殺で魔物を屠れるほど強くないエステルが、死体を拾って回るといふ芸当ができないのは明々白々。

なので、どう考えても自分に課せられるべきなのは、そのどちらもしなくて済む単純な労役しかないわけであるが……理屈では納得できても、感情的には納得しがたかった。

(こんなんじゃ、ダメなのに……わたし)

魔物にやられて、人としての原型を留めていない亡骸を回収し続けることは、ユーリにどれほどの精神的負担を課しているだろうか。

誰もが目を覆いたくなるような現実を……どこか臙げなところがある気がしてならない青年に直視させ続けるとは、あまりにも甘え過ぎてはいないだろうか。

こんなことで、本当に良いのだろうか。

そんな昨日からの後ろめたさから来る悶々が、エステルの心で蜷局(とぐろ)を巻いている。

……魔物の断末魔の鳴き声が響き、勇ましい剣技を垣間見ながら、今日こそは何か恩返しをしなきゃ、とエステルは心に決め、シャベルで土を掘りながらそれを考えることにした。

*

「お。かなりでっけー穴ができたな。……お疲れさん、エステル」
「ユーリこそ……辛かったでしょうに……本当にお疲れさまでした」
太陽が南中したころ、ユーリがリヤカーを引きながら大樹の前までやって来た。

その荷台に乗っているのは、藁に巻かれたり、ずた袋に入れられたり……場合によっては絨毯が巻かれた夥しい数の遺骸である。手近なものに包（くる）んで仮拵えの棺としたのだろう。むろん、物資も人手もないこの場では致し方ないことである。

汗ひとつ掻いていない状態でユーリは、エステルの掘り進めた——小型の隕石が衝突したかのような大穴に死体をなるべく丁寧に据え置いて行く。

肩で息をしているエステルも、お祈りをし、一体一体に謝りながら、意を決した表情で死体の安置を手伝うことにする。

……手伝おうとするエステルを、ユーリは一瞥したが、結局何も言わずにそのまま死体を優しく置いていく。

2人は何も言葉を交わすことなく、ひたすら遺体の安置を進めていった。

太陽が西に沈みそうな頃。

ユーリがリヤカーを何往復かして、すべての遺体を墓に入れ尽くし、さらに今度は2人で土を元に戻し終える埋葬が完了した。

その後、ユーリが大樹に上り、なるべく大きな桜の枝を一本切り取り、加工して墓標をつくる。

十字架の墓標に、『ハルルの街の人　ここに眠る』とエステルが文字を刻んで、共同墓地は完成した。

そして、2人は目を瞑り、日が完全に暮れるまで手を合わせ続け、ハルルの街の人たちの無念を慰めた。

——黙禱を終えて、エステルが目を開けた時、ハルルの街の結界魔導器の魔核が一瞬強く輝いた気がした。

*

「し、失礼します……」

言った後に、別に挨拶をする必要はなかったではないか、とちよつと後悔したエステル。

その手には……

「ん？ ……おつ？ お前がつくつたのそれ？」

お皿の上に載ったサンドイッチがあつた。

ユーリはかなり意外な表情を浮かべ、緊張のあまり足元がぎこちな
いエステルを見遣つた。

「は、はい……」

エステルは、初めて自分でつくつた手料理——と呼んでも良いのか
不安であつたが——をユーリの元へとおつかなびつくりと運んで行
く。

お墓をつくり終えた後、さすがにユーリも疲れが出たのか、ベッド
の上に腰かけたまま放心している様相だつた。

なので、エステルはこつそりと宿屋の階下にある辛うじて残ってい
たキツチンで、サンドイッチをつくつていたのだ。

ユーリが自分のためにしてきてくれたことと比べれば、象と蟻ぐら
い微々たるものであるが——エステルなりにできることを考えた時、
最終的にこれしか思いつかなかつた。

クオイの森でつかの間の休憩をした時に、ユーリが作ってくれたサ
ンドイッチを、エステルはこつそりと眇め、頭に叩き込んでいたのだ。
「………ふっ………んじゃ、いただきますか」

ユーリの口から漏れ出た笑いがいかなる意味を持つのか。

あいにくとサンドイッチをユーリが手に取つた途端に顔を伏せて
しまったエステルが、その含蓄を吟味することはできない。

そして、ユーリは、エステルのサンドイッチを頬張つた。

「………エステル。お前、なんで塩コショウ振つたの？」

「はえっ！」

心を忘れない。

外見だけのイケメンではなく、内面まで完璧に——男らしい。

——そんな偉人が、自分だけを見てくれる。

そこまで思い至って、エステルは感嘆の吐息を漏らす。

……とはいえ、生憎と魅力だけで人間は構成されてはいない。

「んで、エステル」

「は、はい！」

「さつき『罰として』って言ったよな？」

「……………はい!？」

ユーリの目の色が変わった。オオカミモードにチェンジだ。

エステルの心がガンガンと警鐘を鳴らす。

ユーリと接していれば嫌でもわかる剣呑な眼つき。

確かにユーリに何かしらの貢献をしたとは思っていたが……それとこれとはまた話が別なんです！

そんなエステルの一歩引いた……けれどあらゆる意味で逃げ場がないという現実に思いを馳せてしまった畏怖で開ききった瞳に——ユーリは安心させるような笑みを浮かべる。

「心配すんなって。罰ゲームはただ一つ。着替えてもらうってだけだ」

「え? ……きがえ?」

「そ。オレの荷物にいろんな服入ってるから、オレの指示したやつを着て来るだけだって」

「ほ、本当にそれだけです?」

疑心でエステルの目が窄まるのも無理なからぬことである。

「本当だって。頼みたいことは、それだけだよ」

「……………わかりました。どれですか?」

とても不安ではあるが、サンドイッチでユーリに負い目のあるエステルは、さほど抵抗することなく従うことにした。

「これで……………いいです?」

エステルは、おずおずと訊ねる。

こげ茶色の半そでのワイシャツを、ベージュのネクタイで締める。下は、真つ黒なミニスカートに正面だけネコの肉球がペタンとあしらわれている。

同じく太もも付近まで覆う真つ黒なニーハイソックスは、肌とのコントラストを大胆に際立たせる。

端的に言えば、サービス精神旺盛なお店の三毛ネコウエイターの格好であった。

エステルは、この衣装を内心ちよつと恥ずかしく思いながらも、可愛らしいなと思っていた。

ここでどうしてユーリがそんな女性用の服を持っているのかを疑わないのが、彼女が純真無垢なお姫様たる所以である。

そして、自分で着心地を確かめるように、その場でクルッと一回転した。

「……ああ、すげえいいよ」

そんな何とも形容しがたいユーリの声の方をエステルが振り向いた時、

「へ?」

頭に何か被せられた。

なんだろう、と上を向き手をかざしてみると少し弾力はあるけど柔らかな触感が手の平に残る。

「ネコミミだよ」

「ネコミミ……? どうしてそんなものを……?!?」

ユーリが発情していた。気づいた時には。

今まで以上に鼻息を荒くし、目を爛々とさせながら、自分の前に聳え立っている。

これはまずい……エステルはそう直感して、反射的に踵を返そうとした。

しかし、野生のオオカミよりも俊敏なユーリから逃げられるはずもなく――

「きゃっ?」

グイッと腕を掴まれ、そのままユーリと一緒にベッドの中にズルズルと引きずり込まれた。

柔らかなマットレスの感触とともに、眼前には馬乗りになったユーリの姿。

昨日は安心感で包み込んでくれたユーリの胸も、

「ふにゆう……………！」

今は自分を逃がさないための漬物石になっているようにしか思えない。

自分の全身を覆いつくしているユーリは、今度は首元の匂いをスンスンと嗅ぐ。

気分的には、クマに食べられないように死んだふりをしている人のようなものであった。

匂いを検められ、気に入られれば食われる。

…………いや、ある意味食べられるという運命は決まっているのだが、乙女の矜持としてそう簡単に捕食対象とはなりたくないところである。

「ユーリ！ 今は不謹慎ですよ！」

眉を尖らせて抗議したが、果たして自分は本当にハルルの街の人たちを想って言っているのか。

むしろ、単にだしにしているだけではないか、と感じながらもエステルは咎めの言葉は上げた。

すると、ユーリはおもむろに顔を上げ、先ほどよりも口角を吊り上げる。

「不謹慎、ね。」

ここには二人しかいねえから、そう言ってくれるだけ幸せだよ。

そういうことを言ってくれる奴がいて、どんなに幸せなことか……………」

「あつ……………」

しみじみと、感慨深げなユーリの声音は、ハルルの街に2人しか人間がないという事実をエステルにまざまざと思い出させる。

もちろん忘れていたわけではないが、「不謹慎」という言葉に囚わ

れたところで非難する人間がないことが、エステル的心中に寂しさの糸を引いたのであった。

自分たちがこんなことをしていても咎める人がいない——心が針でポツカリと穴を開けられた気分になる。

「ま、オレたちは、きちんと墓つくって死んだ人たちを慰めたんだ。

街のやつらが、オレたちに対して恨むようなことはないと思うぜ。

むしろ、自分たちのせいで生きてる奴らが楽しめねえってんなら、それこそ無駄に傷つけちまう……。

……だからな、エステル。オレたちは、オレたちの時間を楽しもうぜ」

「ユーリ……いーはいー」

ユーリの話はとても理に適っている。

慈しみの声音に乗り、スーツと頭に入った理屈が、エステルのちよつと頑なだった脳をほぐす。

死者をきちんと悼んだ自分たちは、確かに生者として現世を楽しむ権利があることについてはエステルも納得した。

「……………はい？」

——とはいえ。

『オレたちの時間を楽しむ』ということは……

「ちよつ、ちよつと待っててください、ユーリ！ それって結局わたしを襲いたいってことじゃないですか！」

「何だよ、人間きの悪い。それに今、『はいー！』って返事をしたろ？」

「……………」

まるで悪徳商法のような手口を使い、止めとばかりに悪戯つぽくウイंकをするユーリ。

一般市民であれば、詐欺だと抗議の一つでもしただろう。

しかし、そこは次期皇帝候補のエステル。

そのウイंकに一瞬絆（ほど）され、さらには自分の言ってしまった言葉に責任を感じてしまう世間慣れしていない箱入り娘。

「そうかも……」と心の中で思ってしまった時点で負けである。

もつと言えば、ユーリから視線をずらしてしまった時点で負けなの

であった。

「つーことで、いただきます」

「ちよっ……んっ！」

今日も今日でキスから始まり、エステルは抗拒不能状態へと陥れられた。

ネコミミによつて本能が刺激されたユーリは、以前よりも攻めが激しかった。

エステルの唇を塞ぎながら、ユーリの右手はエステルの胸をワイシャツ越しに揉み立てられたのだが、前よりも力が入り過ぎていて少し痛かった。

とはいえ、キス攻めから解放されてトロンとしたエステルのワイシャツの中をまさぐつて、手で直に胸を揉んだ時はそんなことはなかったのであるが。

クルつとひっくり返されてミニスカート越しにお尻を、ゆつくりとねつとりとバレンで摺（す）るように撫でまわされる。しかし、押し付け具合が強く、臀部が変わるんじゃないかと、エステルは少し心配した。

とうとうスカートの中に手が侵入する。ネグリジエよりもある意味でスカート越しの方が、秘所を暴かれるときの羞恥心が強くなる気がするな、とエステルの中途半端に残った冷静な部分は思っていた。

白いパンティー越しに撫で上げられ、段々畑よろしく直にお尻に触れる段階になった時……ユーリも飽きたのか趣向を変えようと思つたのか、ペチーンとお尻を叩き始めた。

「あうっ！」

さして痛くはないのだが、突然の打擲にエステルは嬌声を抑えきれない。自分で上げた艶めかしい声で、ほんの少し理性が返って来る。

何というか、このままだとユーリに従属するような感じがして……でもそれが嫌な感じがあんまりしないのが、エステルの自分探しの成果であった。

そして、もう一度仰臥の姿勢に戻され、今度はユーリに正面からギューツと、強く抱きしめられる。

……それは、何か不足している栄養素をエステルから吸い上げているようであった。

ユーリの匂いは確かにとても甘美で強烈ではあるが——それでも慣れと言うのはやって来る。

まだ完全に耐性ができたわけではないが、エステルの全ての理性が失われるようなことはなくなっていた。

なので、顔は相変わらず真っ赤であるが、ほんの少しだけユーリを観察する余裕がエステルにはできていた。

(やつぱり……わたしにすごく執着している……)

背中に巻き付かれる2本の腕の強さは、ベアハッグを彷彿させる強烈な締め付け。

ニーソックス越しに巻き付いている脚は、蛇が獲物を締め付けているかのようにであった。

クオイの森で違和感があったから何かあるとは思うが……それにしてもここまで自分を拘束したいと思うほどの、執着の根源はどこから来るのだろうか。

(ダメ……もう限界……)

それが体力なのか、理性なのか、あるいはその区分自体どうでもいいのか。

エステルにはよくわからないが……ひとまず今日の意識はここでおしまいようだ。

人が塵殺（おうさつ）されてしまったハルルの街。

この無人の街で2人だけの夜はこうして過ぎていった。

6. 強さと弱さ

ヘルメスは、片足からの疼痛（とうつう）の電気信号を歯痒く感じながら、ようやく地平線の彼方に出てきた学術都市アスピオを見遣った。

もうすぐ着くはずなのに、足が健常ならば何の徒労もない道中なのに……今は空へ駆け上らねばならないかのようにあまりにも遠く感じる。

ほとんど右足を引き摺るように歩いているヘルメスにとって、アスピオに辿り着くか、それとも道中の魔物に殺られるか——ほとんど五分五分と言ってもよい状況であった。

ハルルの街に止宿し、旅立った矢先のことである。

ヘルメスは街道の分かれ道を間違え、アスピオではなく、デイドン砦の方角へと足を進めてしまっていた。

ヘルメスは、人間とは異なる進化を遂げたクリティア族であり、自分の種族の特徴であるのんびりとした性格も例に洩れず引き継いでしまっている。

なので、後先考えずに進んで行き、道に迷うことは割と頻繁にあることではあった。

そして、今回も途中で道の間違いに気付くには気付けたが……その気付き方が考えうる限りで最悪であった。

デイドン砦を襲撃し、いつものように失敗に終わって退却している最中の、“平原の主”の群れに出くわしてしまったのである。

夥しい数の、イノシシの魔物であるサイノツサスと、“平原の主”こと、二階建ての建物を優に超えそうな巨体のブルータル。

しかも、襲撃の興奮冷めやらぬどころか、獲物の人間を確保できずに怒り心頭状態の一派。

ヘルメスとて、魔物の跋扈する結界の外を一人で自信をもって歩けるだけのことはあり、槍術も魔術も熟練の域に達している。ただの魔物の群れに負けるほど弱くはない。

しかし、今回は相手が悪すぎた。眼前に聳（そび）えるギガントモ

ンスター一味をたつた一人で退けられるほどの自信は毛頭、ない。だから、すぐに逃げの一手に打って出た。

それは、間違いではなかった。

背後を見せて走れば、野生動物はより興奮して襲って来ると言うが、人間をエサとする魔物たちは逃げようが逃げまいがこちらに来襲してくることは、火を見るより明らかなことなのであるから。

ただ——ブルータルの強烈な突進を避けた時に、その頭上の耳から生え出て口元まで垂れた、獲物を貫くためだけに発達したような角が——ヘルメスの脹脛（ふくらはぎ）に致命的な裂傷を与えてしまっていた。

沸き立つ痛みを、アドレナリンの興奮作用が鎮めてくれたおかげで、猪突猛進しか能のないイノシシの魔物たちの間を蜿蜒（えんえん）と移動することで凌ぐことには成功した。

なので、あの場では何とか魔物たちの餌食になることは回避できたのだが……昂る神経が収まった後は、脹脛（ふくらはぎ）が引つ切り無しに灼熱の痛みを主張してしまっていた。

ヘルメスは治療術を使えない。魔術や魔導器の研究には群を抜いて才能があったし、白兵戦も苦手ではなかったが……治療術だけは、どうにも適性がなかったのである。

簡単な傷の処置では、生憎と痛みの信号を抑えてはくれない。だから、生き残るには、運よく魔物に当たらないことを祈りながら片足を引き摺るしかなかった。

もうすぐだ。もうすぐ、アスピオに着く。

そうすれば……何とか命を繋げられる。

そんな一縷の望みで身体を鞭撻し、歯を砕く勢いで噛みしめて強引に足を稼働させ、ようやくアスピオを捉えてきたのであるが——

「ああ、これは……」

ヘルメスはこの時ほど、人間やクリテイア族にだけ知恵があればいい、他の動物には欠片も必要もないものだと思ったことはない。

今度は、ガットウーゾ——爪に毒があり、俊敏さはどんな魔物よりも優れているオオカミの魔物——に出遭ってしまった。しかも、ガツ

トウーゾ・ピコという仔連れの状態で。

どうやら仔と共に、アスピオの前に立ち塞がるように陣を張っていたようである。

目が合った以上、見逃すはずもない。

あの素早い突進を掻い潜って魔術を詠唱する時間を確保できるはずもない。

踏ん張りの効かない足で槍を振るっても、物干し竿で撲（なぐ）るのと同じこと。

仮に槍で貫通させて親を絶命させたとしても、回り込んでくるであろう仔にまで対処することなど到底不可能なことであった。

ヘルメスの聡明にして高速回転し過ぎる頭脳は、あつという間に絶望という答えを弾き出してしまう。

その解答に従い、ヘルメスは槍を抜くこともなく、詠唱することもなく、生き残ることをあつさりと諦めた。奇跡を願うたちでは元々ない。

そして、残された時間を抵抗ではなく懐古に耽ることに使うことにする。

「ごめんよ、ジュデイス……」

迫り来るガットウーゾたちの鼻息荒い疾走音を、懐から取り出したペンダントを開けて見詰めることで知覚を屈曲させ遮った。

肖像画に写っているのは、生まれたばかりのあどけない娘の姿。出産によって、愛する妻は間もなく死んでしまったが、その悲哀を幼少の娘に何度癒されたかわからない。

クリティア族特有の尖った耳は生まれたてながらも立派であるが、まだまだ頭から伸びる触角は小さい。

娘を預けての今回の旅は、自分の開発した魔動器の危険性を否定したくて、人間の英知を借りようとアスピオを指摘したわけであるが——どうやら、叶いそうもない。

あまりにも出来の良い魔導器の開発に興奮して自らの名前を冠してしまっただが、それが名誉となるか汚名となるか——それを決めるのは自分ではないらしい。

ガットウーゾたちが近づいて来た。

生温かさが感じられるほどまで接近されると反射的に対面しようとしてしまうのは、本分ではないとはいえ一応流れている戦士の血潮ゆえんか。

しかし——危機に直面したとき特有の、緩々（かんかん）と流れる視界は、迫り来る魔物ではなく——なぜか未知の街のアスピオの方にピントを合わせていた。

常闇の街と評判が悪いが、だからこそ面白いではないかと、旅の目的とは別に悪評を断ち切つて心を躍らせながら目指した街。

今度はどんな出会いがあるのだろうかとワクワクしながら歩いた日々。

焦燥した目的とは別に、身勝手ながらも漠然とした憧憬の念をアスピオに抱いていたのであった。

愛娘よりも次に向かう街のことを人生の最後に思い浮かべるとは——最期に考えることなど分からぬものだ。

——自分への皮肉の籠った微笑みを浮かべたヘルメスの最後の思考を、誰も記録することはなかった。

*

「よろしいのですか、ジュデイス」

「ええ。私は躊躇わないわ」

「……………」

強風吹き荒ぶ空中。曇天の空の内容物が仮借のない霹靂であることを心得られる者こそが、世界の剥き出しの真実を凝望（ぎょうぼう）する権利を獲得できる。

色彩豊かな羽根で舞う、茜色の巨鳥のようなドラゴンが、傍らに並んで飛行している青い鯨のようなドラゴンに乗っているクリティア族の女性——ジュデイスに問いかける。

そして、何度目かわからない決然とした回答に、諦念の溜息をこぼ

す。もつとも、ジュデイスの表情自体は、真つ白なフルフェイスの仮面によって、クリティア族特有の長い触角も突起のような耳朶とともに隠されていて窺えないが。

それでも、巨鳥の姿をしたドラゴンは、彼女に業苦を背負わせたくない想いから、無駄と悟りながらも説得を試みる。

「よいですか。あなたは、本来背負う必要のない、父親が作ってしまった悪魔の魔導器の破壊を手伝ってくれている。

それだけでも、十分以上に助かっているのに……「クローム」……何でしょうか？」

仮面越しのくぐもった声にさえ滲み出る意志の強さから、茜色のドラゴン——クロームは己の試みの失敗を瞬時に突き付けられた。

「ありがとう」
「……………」

そのうえ、こちらの想いを汲み取り、感謝までされてしまったのは、もはや取り付く島もない。

ジュデイスが逡巡したのは、件の話が出てきた瞬間だけ。

その逡巡さえも、すぐに懐からペンダントを取り出し、数秒見詰めただけで打ち消してしまっていた。

世界の秩序を守るクロームたち始祖の隸長（エンテレケイア）でさえ、人間への情に比例して困惑し、紛糾したというのに——よりにもよって人間に近いクリティア族のジュデイスがいの一番に了承するとは思いつかなかった。

事態はそこまで切迫していた。

もはや、世界は爆弾を抱えていると言っても良い。

しかも、その爆弾は善意で爆発する可能性がある分、余計にたちが悪い。

世界の存亡が、ひとりの人間の気持ち一つで変わってしまう状態なのである。

一人の愛する男を除いて人間の信頼していないクロームとて了承したくはなかったが、合理と倫理の天秤にかけるとどうしても——無辜の人間の殺害に同意せざるを得なかった。

世界を乱すような邪な人間を殺害したことはここ数百年で何度もある。

しかし、世界の一員である人間のむやみやたらな殺害をしたことなどないし、まして穢れも何も知らない人間の殺害など——全くもって初めてのことであった。

人間などよりも遥かに長い時間生きてきた自分でさえ今なお胸中の蟠（わだかま）りが消失しないというのに——

人間で言うところの成人にすら達していない女性が、こうもあつさりと同意してしまうとは——それだけジュデイスの、父親の罪滅ぼしから発展した世界を愛する気持ちが強いのだろう。

クロームは、それを見習うつもりはない。先達として達観するような態度を取るつもりもない。

ただ——全ての事実を見詰め、全ての罪を背負い、始祖の隸長（エンテレケイア）としてこれからも世界の存続に邁進するだけである。

*

港街に出るためには、エフミドの丘を越えなければならない。

ユーリとエステルは、早朝に昨日拵えた大樹の前の共同墓地で祈りを捧げ、慰霊をしてから、ハルルの街を発った。

そして、西に延びる街道を辿って間もなく、エフミドの丘に到着した。

エフミドの丘とわざわざ名前がつけられているが、雑草を刈り取り土を踏み固められてできた街道の一部と言っても差し支えない。

ただ、帝都と港街の交通の便を良くするため、また丘の近辺での魔物の襲撃を防ぐために、街でもないのに最近結界魔導器（シルトブラスティア）が設置されたのが特徴と言えば特徴である。

そのお陰で、丘周辺に差し掛かったところからエステルは魔物への警戒を緩め、前方を歩むユーリを——心持ち昨日よりも距離を取って——考察することができた。

相変わず自分を抱き枕にして就眠するユーリ。

男という臥所（ふしど）の温もりと快然に、もはや自分が丸ごと呑み込まれそうになっている……のはともかく。

今朝、自分とユーリの最大の違いに気付けたのである。

それは、羞恥心の違い。

エステルは、人に慣れていないということもあり、男と肉体的接触をするということが恥ずかしくて堪らない。

キスされ、触られ、抱きつかれ……そんな、十数年全く受けたことのない未知の刺激の連続は、毎夜エステルを爆発しそうになるほど燃え滾らせている。

……だというのに。

ユーリときたら常に素面（しらふ）のまま、臆面も何もなく、ひたすら自分に対して迫ってくるのである。

まるで自分が酩酊はおろか赤面させるにも度数の低すぎる、甘ったるいジュースのような果実酒に過ぎず、それ故、適当に遊ぶための玩具に過ぎないのではないかと懸念するほどに。

ただ、決してそうではないことをエステルは知っている。いや、知らざるを得ないというべきか。

ユーリは、エステルを——どういう形であれベッドに引き摺り込んでから、本当に一瞬間たりともエステルを逃がすまいとするからである。

まあ、さすがに寝返りを打つ時にまでご相伴を預かるのは、エステルとしても遠慮したい気分であったが……とにもかくもユーリが自分を一時凌ぎの放蕩の戯具（ぎぐ）と見做していると言うには、あまりにもその執着の度合いが強すぎた。

なので、ユーリは、自分のことを本当に大切に思っていて、なおかつ自分とあれこれすることに一切の臆面を感じないという……何だかむず痒くもよくわからない状態なのである。

ユーリ自身が仄めかしているように、必ず何かしら自分との接点があるはずなのだが……エステルにはほとんど思い当たる節がない。

仮初めにもお姫さまである自分によくもまあここまでできるものだ、と感心するのが一番楽な結論への帰着である。

イケメン高身長屈強賢明紳士料理上手おまけに自分の好みのタイプという、女の子なら誰もが憧れる超優良物件が、いきなり自分の所に舞い込んでくる理由がエステルにはわからない。

だから、ひたすらエステルは懊悩し……ユーリが口を開いてくれるまで、悶々としなければならぬのである。

しかし、そんな物思いに耽っていたせいで、咄嗟の反応が遅れた。

「……い……エステルっ！……こっち来い!!」

「……ふえっ！ ユーリ!?!」

ユーリは突如踵を返し、エステルの手を握って街道脇の草叢に向かって駆け出した。

元よりエステルが警戒を解いていた原因は、エフミドの丘に結界魔導器（シルトブラスティア）が設置されていることにある。

なので、魔物の襲撃などあり得ないという先入見が、すわユーリのオオカミが突然目を醒ましたか、と誤解を招かせた。

しかし、全速力のユーリに引き摺られている内に、

ドツカー——————ン!!!

まるで爆弾が炸裂したかのような轟音が鳴り響いた。振動で地面と空気も大きく波を打つ。

「え?」

ユーリに手を引っ張られ、既に大地と大気の騒（ざわ）めきの範囲外の所まで行き着いたエステルが、耳を劈いた音源の正体を確かめようと振り返っても——何も見えなかった。

それが濛々（もうもう）と立ち込める土煙のせいだということにも、そんな現象に出くわしたことの無いエステルは気付けなかった。

「よそ見してねえで、走れ!」

「は、はいっ!」

少なくとも絶対に自分を大切にしてくれる男の叱咤に、エステルは素直に従うことにした。

何が何だかわからないが、ユーリが逃走を選ぶからには確かに危険なんだろう。

エステルは頭を切り替え、文字通りユーリの足を引つ張らないように、手を強く握り返しながら走り続けることにした。

「ちいつ！ 待ち伏せか！」

「大きい……」

草叢（くさむら）の織り成す獣道を掻きわけながら——さすがに街道の外には結界の効力が及んでいないのか——沢山いた魔物たちを、ユーリはほとんど片手だけで剣を振るい、蹴散らし続けながら道をつくっていった。

エステルは、ユーリの疾走スピードに合わせるのが精一杯で、その曲芸のような剣裁きに魅入る余裕はなかった。

しかし、唐突に疾走は止むことになる。

草のトンネルを抜けて、辺り一面開けた先に差し掛かったところに——上部は茜色、下部は白色の鱗（うろくず）で覆われ、見事なまでに色映えのする翼をはためかせている怪鳥が地面に四つ足を着けて待ち受けていたからである。

人間を軽々と啜えられそうな怪鳥。草原の広場に身を捻じ込ませているような体勢の巨躯は、不動明王を連想させる。

「そちらの方。その娘を置いて行きなさい。そうすれば、貴方に危害は加えません」

「……だろうと思っただぜ。んじや、お前をどかすまでだ！」

謹厚ながらも威厳に満ちた声音が、先ほどとは別の意味でエステルを鼓膜を震わせ、連動して全身をも揺らめかせた。なぜ、いきなり自分が名指しされるのか。

しかし、エステルがお城で出遭った赤い怪鳥と同じように、眼前の怪鳥が喋ったことも、なぜ自分が怪鳥に求められているのかも分からないまま、ユーリは話し合いの余地すらつくらず瞬時に決裂を宣言した。

言うが早いのか、ユーリはのべつ幕無しに『蒼破刃』の無数の剣圧をつくりだして、兵装魔導器（ホブローブラスティア）のように一発に圧縮し、強烈な弾丸として怪鳥の胸部にぶち当てた。

「くうっ!？」

城を襲撃した赤い怪鳥と同様に、茜色の怪鳥もユーリの強烈な一撃で、背後に生えている木に勢い良く叩き付けられた。

しかし、怪鳥もさるもの。衝撃を木に受け渡した後、周囲の木々の枝を引きちぎりながら強引に両翼をはためかせて揚力をつくりだし、太陽を遮りながら再度警告を発する。

「……貴方は素晴らしい力をお持ちです。

しかし、もう一度要求します。その娘を渡してください。

さもなければ……この辺りを焼き払います」

「えっ!？」

皆既日食ならぬ怪奇日食の天啓の酷薄さは、筆舌尽くしがたいものがあった。

驚愕に凝固しかかった思考であるが、如何（どう）にかこうにか直感だけは、この怪鳥は紛れもなく自分の害為すに違いないということを示唆する。

なので、本能からの恐怖は、無意識の内に頼りがいのある男の背中へと誘った。それがこの場での最適解のように感じ取って。

……「守ってやる」という以前かけられた言葉が内から沸き立ち、背中と影が外からその実在証明をしてくれて、二重の安心感がエステルを温かく包み込んだ。

「どうやらお姫さまはアンタのそこには行きたくないみたいだぜ。

つか、んなデカいなりしてやるのが女の子を脅かして投降を促すことしかできねえのかよ」

「……卑怯なことは重々承知。

しかし、一人の命を狡猾に殺めることなど世界の安寧と比すれば、大した所業ではありません」

「へえ……大したこと嘯（うそぶ）くじゃねえか。なら、こつちも手段は選ばないぜ!」

剣呑な声を宿したユーリ。しかし、その剣もまた不敵な言葉すら霞むほど邪に満ち満ちている。

そして――

――ユーリは、剣を発射した。

……頼りがいのある男の背中から事態の推移を窺っていたエステルは、眼前で起こった事象をそう形容する他なかった。

怨霊を纏わせたかのような暗黒の闘気に満たされた一刀は、ボウガンよろしく猛スピードで怪鳥へと一直線に向かって行く。

そして、この『魔人闇（マリアン）』という禍々しい闇の剣技は、壮麗たる一翼の白い鱗を刺突し、剣の先端が茜色の鱗から出てきてしまった。

「ぐっ!?!」

刺し貫かれた剣による損傷は、怪鳥にとって大打撃であったようだ。

始祖の隸長（エンテレケイア）は超然たる存在ではなく、自然の一員。

その辺りを飛んでいる普通の鳥と同じく、羽ばたくことで揚力を生み出せなければ墜落せざるを得ない。

さらに止めとして、時間を逆再生したかのように、ユーリの手元へと致命的な刺創を与えた剣が戻って行く。

巨大な怪鳥は、傷口から身体の構成要素たるエアルを撒き散らしながら、重力に為すすべなく従い自由落下して行く。

――ただ、自らの宣言の一部履行は怠らなかつた。

グワツ!!

怨嗟と悲鳴の絢（な）い交ぜとなった口腔から放たれた強烈な火炎が、分散されて落下していく。

そして、着弾点は幸いにしてここまで歩んできた道。とはいえ、延焼によって先行く道までも塞がれるのは――火を見て明らかなことであった。

隕石群の飛来のような炎の降下には、いかなユーリとて防ぐ手立ては存在しないようだ。

「ちっ！ 急ぐぞ！」

「はいっ！」

顔を顰めて舌打ちをし、ユーリは再びエステルの手を取って走り出した。

*

縦横無尽の草叢を過ぎて辿り着いた先は、流れ星を集積したかのよう
うにキラキラ輝く海面を眺望できる断崖絶壁。

『海』というものを初めて瞳で捉えるエステルにとっては、状況が状況でなかったならば、うっとりとは嘆美していたに違いないものであったが——残念ながら今は脇目も振らず一目散に駆け抜けなければならぬ情勢である。

「はあっ、はあっ！」

エステルは剣の稽古の体力を身に着けるために、長距離のマラソンには慣れていたが、短距離の全力疾走は苦手であった。

それでも、巨躯が自らを狙っているせいで刺激される生存本能と、ユーリの右手がガツチリと自分の手を握って嚮導（きょうどう）してくれる、一語では纏めきれない正の感情の総和で、文字通り身体の全力を振り絞って風のような疾走を継続することができた。

——しかし、新たな襲撃者によつて、ランスパートは強制停止させられる。

「伏せろっ！」

「はいっ！……きゃっ！」

ユーリは言葉とは裏腹に、繋いでいた手を中心点に半円を描きながら、エステルを仰向けの体勢にするように前方へと放った。

柔らかい芝生で背中から受け身を取ったエステルは、瞬時に襲撃者の姿を目に入れる。

——鯨のような青い竜に乗った人。すなわち、竜騎士。

その竜騎士は、今まさに自分がいた場所めがけて槍を突き刺そうと

していたことに、エステルは戦慄する。

そして、転がっている自分めがけて竜は進行方向を修正しようとするが——言うまでもなく、ユーリはそれを是としない。

ユーリの剣は、まるで巨大な軍配団扇のように、風の魔力を剣に纏わせて情け容赦なく竜騎士に風圧の一撃を叩きつけた。

思わぬ打撃に、竜騎士は、竜ごと虚空へと、高々舞い上がる。新たな星が一つできそうな勢いであった。

「すごい……」

エステルは自分が標的にされていたことを一時的に忘れて、純然たる畏敬の念で、ユーリを一点に見詰めた。

つくづく、とんでもない人が自分を守護してくれていると思う。

「……行くぞ」

「はいっ！……っ？」

ユーリは、なんらの快哉を上げることなく、唸るようなくぐもった声だけを発して、エステルを軽々と起こし、先へと促した。

思わぬ低音ボイスに、微妙に違和感を覚えながらもエステルは逆に快活な返事の声を上げる。

しかし、些細な違和感に頓着する間もないので、先導に素直に従うことにした。

ところが——

「……はえーじゃねえか」

「もう戻って来たんです!？」

竜騎士の体勢の立て直しは速く、瞬間に2人の元へと——いや、狙いは進行方向であった!

「まずっ!」

竜から放たれた爆炎は、あつという間に先行く道を紅と黒煙で覆いつくした。

「どうしましょう!」

「いったん、崖の所まで戻るぞ!」

昨日のハルルを否が応でも彷彿とさせる火炎に、エステルは悲痛の声を絞り出し、ユーリも目前の妥協的な解を掴み取るしかなかった。

そして、急回転して、断崖絶壁へと舞い戻る（この時、エステルは海の煌めきに初めて気が付いた）。

しかし――

「な、なんです、この地響きは？」

「……さっき降ってきた奴だよ」

元来たハルルの街の方角から、恐怖で甚振（いたぶ）るかのよう
に、ズシン！ ズシン！ という轟音が止めど無く地面を鳴らしていた。

あちらも炎で包まれているにも関わらず、それをものともせず
――間違ひなく巨大な何かが近づいて来ている。

そして――間もなく、知りたくもない答えは明かされる。

「……大きい」

エステルは地面の揺れなどとうに忘れてしまっていた。全容を現
した生物を仰ぎ見た時の衝撃はそれほどのものだったのである。

小山ほどはありそうな巨大な亀である。

2本の前腕が異常発達し、古代の神殿の石柱のように太く硬質であ
ることが容易に窺える。

亀の象徴たる苔むした青い甲羅には、鶏冠（とさか）のような剛毛
がささくれ立っている。その上に、先ほどユーリが墜落させた茜色の
怪鳥が載っていた。

末端の長さだけで大人の身長を優に超える尻尾は、鞭という形容す
ら生温く、もはや建物を一打ちで倒壊させられることができるのでは
ないかと思うほど、しなやかにして凶悪であった。

そして――その身体に占める面積は間違ひなく小さいが、強烈に印
象付けられるのは、細く窄められた双眸。

種族の別を超えて、間違ひなく敵愾心が滾っていることがわかる――
エステルに対して。

（どうして……わたしが、こんなに……？）

港街へ続く道を潰した竜騎士も舞い戻り、加勢に回る。包囲網を十
分に狭めた後に、一斉に襲撃する心積もりだろう。

ここに集結する三種三様の敵意に、エステルは射竦められ、さすが
にユーリがいるという温かみのある安心感だけでは、身体に纏わりつ

くようなねつとりとした冷寒を抑えきれなくなる。

言葉を話す巨大生物たちから恨まれるようなことは断じてやっていない。生誕以来、お城から一步も出ていないエステルがどう考えても実行できるはずもない。

そうだとこののに、なぜ――

元来た道からは巨大な亀と怪鳥。先行く道からは竜騎士。いずれを踏破しようと猛炎の壁が行く手を阻む。

そして、後方は断崖絶壁。飛び降りれば、まず絶命は避けられない高度である。

「ゆ、ユーリ……」

聳（そび）え立つ絶体絶命の恐怖から、エステルは涙を浮かべ始め、ユーリの背中の裾に思わず縋る。

しかし、エステルは、その縋りついた偉丈夫が、泰然自若にして、炎も、地震も、空襲も、朝飯前のもものとして対処できる最強の存在であることをまだ認識してなかった。

ユーリは不敵な笑みを浮かべながら、エステルに振り返って、こう囁く。

「エステル――オレを信じろ」

「ユーリ……い！」

たった一言で。

エステルは身体を流れるモノが全て取り換えられたかのように思えた。

それどころか、世界の景色すら一変したようにも感じられる。

恐怖の冷えで凍えていた血液は、強心剤を打たれた心臓から力強く熱い血液が送られて、瞬く間に冷血は駆逐され、代わりに熱血が毛細血管まで潤した。

瞬時にして身体を駆け巡った熱血によって、ユーリの芯の強靭さを貰い受けたかのように、エステルも確かに自分の二本足で世界に立っているという自覚を持つことができた。

世界もクリアになる。

巨大な亀、おぞましい怪鳥、竜騎士、炎……それがどうした。ここにはユーリがいる！

絶対に自分を守ってくれるユーリ・ローウエルがいる！
恐るるに足るものではない。

ユーリが負けるはずがない。守ってくれないはずがない。

だから、わたしがやるべきことは、信じること！

ユーリを信じること！

ただ、それだけだ！

そして——同時に気が付く。

「エステル、オレの腰にしがみつけ！」

「はい！」

その精強な言葉にエステルが背く理由は、もう存在するはずもなかった。

全幅の信頼感をもって、ユーリの、逞しい男の腰にガツチリとしがみつく。

——今までユーリの身体に触れるとき、エステルの身体は大なり小なりの緊張で肩に力が入ってしまったが、今は完全に力が抜けきり、何もかもを委ねるように全身をユーリの身体に押し付けていた。

そして——ユーリは跳躍する。2人は断崖絶壁から飛び降りた。

崖から地面までの距離は、投身すれば即死するのが明瞭なほどである。

いかに武醒魔導器（ボーデイブラスティア）で身体強化を施しているようと、重力の齎す等加速度運動のエネルギーに耐えきれぬものではない。自らの運命が決まっていると悟るのが当然の高度。

もちろん、エステルは死ぬなんて思わない。絶対にユーリが守ってくれるという信念はこの程度では揺るがない。

だから、自分が良く手入れをした髪の毛が一斉に逆巻こうと、

ゴオーつと風が自分の耳に唸りを上げようと、一切確知することなく、ただただユーリの温もりだけに耽溺することができた。

優美な二次曲線の虹を描くに違いない、と確信の籠った笑みを浮かべているのである。

——そして、それは正しかった。

ユーリは、己の長髪を靡かせながら、虚空に剣を突き立てる。

その怜悯な思考は、増しに増していく落下速度に慌てる素振りをおくびにも出さず、墜死せずなおかつ襲撃者を誤魔化せる最適な距離にのみ頭を巡らせていた。

そして、それが確信できる位置に差し掛かったと判断した時——

——刀身が緑色に変化する。

「……………わぁ……………ユーリ、これは？」

エステルは、落下の感覚が喪失し、それどころか浮遊の感覚を覚えた。

そして、2人の足元にある緑色の渦巻きについて、上目遣いでユーリに訊ねる。

『エアリアルボード』。この剣でつくってる」

簡潔にユーリは答える。

表情を見るに、ユーリは『エアリアルボード』に目を据えて、その制御に集中しているようであった。

エステルはそれを察し、少々残念であるが、頼りがいのある勇者にしがみつきながら、見慣れた宝石よりもよほど美しい海の輝きを楽しむことにする。

「わぁ……………」

エステルは、世界の宝物を全て手に入れた気分になった。

お城の中では絶対に見られなかった白く煌めく海。

先程の危機の中では全く感じられなかった、大海原の香りを爽やかに運んでくる潮風。

渚から規則的に響く汐による潮騒（しおさい）は、荒々しい爆音の記憶をすべて洗い流してくれる。

でも、海洋への感動だけに、心が満ちているわけではない。

エステルは、確信する——ユーリに恋している。

……それを認めるのはとてもむず痒かった。

爆発するぐらい、恥ずかしかった。

けれど——

さっきの激励の精力は、未だにこの体を循環している。そして、ポカポカとした木漏れ日を常に照射されているような気分なのだ。

まるで、永遠の春が体を駆け巡っているかのように。

とても気持ち良かった。

勇気が出て来る。

嬉しさが込み上げてくる。

楽しくてたまらない。

面白くてたまらない。

暖かくてたまらない。

いつまでもいつまでも溺れていたたい。

思えば、最初から一目惚れしていたのかもしれない。

ユーリは、自分に一目惚れしたと告白していたが、自分も同じだったのだ——それを今の今まで認められなかっただけで。

自分を客観的に見つめれば、ある意味ユーリに押し切られたものなのかもしれない。

ユーリは、自分に対してとてもとても強引だったのかもしれない。

でも——

エステルとしては、もう何でも良かった。

こんなにたくさんの感情を教えてくれたユーリには、何の負の感情もない。

もう全部全部委ねてもいい。

何もかもをあげてもいい。

……その代わり、今度は、わたしが逃がさないようにするだろうか。

エステルは、円（まど）かな目を閉じ、よりいっそう強くユーリに抱きついた。

今までのユーリからの強い想いを返すように。

本当に虹が見えてきた――

*

海外線をジグザグと縫うように、2人はエアリアルボードで進んで行く。

追手の竜騎士から時折浜辺の岩場に身を隠しつつ、少しずつ少しずつ港町カプワ・ノールに向かって行く。

やがて、竜騎士も追跡を止めた。それを時間をかけて確認した後、エアリアルボードの空中浮遊を停止し、ユーリとエステルは沿岸の森林地帯に分け入った。

すると、雨が降ってきた。

今いる森林は、クオイの森のような密林と呼ぶほどには木々が密集しているわけではないが、ていの良い傘として樹木の並びは理想的であった。

エステルは、木の生えている場所とそうではない場所の地面の濡れ具合の違いを見て、いかに木の葉が互いに重ならないように生い茂っているかを発見し、改めて外に出る喜びを思い知る。

「ちよつと休もうぜ。これ使うと疲れるんだよ」

ユーリの声色は疲労からか、いつになく小さかった。

もちろん、新たな気持ちの芽生えたエステルは、満面の笑みで快諾する。

「はい！ わたしがテントを張りますよ」

「いや、もうすぐ街に着くから、ごぎでいい。結界張って、軽く休んだら出発すんぞ」

「わかりました」

木の根つこにエステルはごぎを敷いた。ユーリに木を背凭れにし

て休んで欲しかったからだ。そして、目論見通り、ユーリは背中を木に付けて座り、全身の力を抜いた。

エステルとしては、『エアリアルボード』については是非とも訊いてみたかったが、身体の怠そうなユーリに今訊ねるのは憚（はばか）られた。

なので、敢えて言葉をかけることなく、ユーリの隣にちよこんと腰かけ、しとしとと降りしきる雨を漫（そぞ）ろに眺めることにする。

たまにユーリの顔をチラチラと窺うが、ユーリは項垂れていてその漆黒の長髪が帳となつているため、表情を見せてはくれない。

ユーリと言葉を交わしたくてたまらないエステルはほんのりと残念に思うが、疲れている人に無遠慮に話しかけるのは礼節ある嗜みではないと思い、雨だけに集中することにする。

——それでも、頼もしい男の傍では、沈黙すらも心地よいものだったけれど。

しばらくの間、雨音だけが、世界に流れる音だった。

意外と雨というのが、窓から眺めていたころと違って好きではないな、とエステルが思い始めていた頃のことである。

「エステル」

唐突に、ユーリの声が雨音以外の静寂を破った。

エステルは、呼ばわれた瞬間ぴくっと肩を揺らしたが、

「ユーリ……なんです？」

ほんのり陶然としながら、笑顔をユーリに向けた。

「ちよつとこつち来てくれ」

「……？」

相変わらず俯くユーリからは、表情は窺えない。

こつちに来てくれと言われても、隣に座っている状態で詰めるべき距離などない。

——じゃあ、正面に来て欲しい、つてことかな？

首を傾げながらもそう予想して、エステルは立ち上がり、回り込んでユーリの正面に立った。

すると――

「ひゃっ!？」

ユーリが卒然とエステルの腰に抱きついてきた。

「ゆゆゆゆユーリ!？」

嬉しさと、恥ずかしさの緋(な)い交ぜになったエステルは、どう対応すればよいかわからない。

しかし――

「わりい……ちよつとだけ……このままでいさせてくれ。……頼むから」

ユーリはいつもと趣が違っていた。

いつもなら、エステルの全身を覆いつくすように襲い掛かってくるのがユーリの常套手段である。

でも、今は――

ユーリは、エステルの腰に腕を巻き付けている。それが逃がすまいとする蛇のようであることには一切の変わりはない。

だが、頭を、顔を、エステルの胸の下、お腹の辺りに押し付け、ユーリの上半身はエステルの下半身に当て……跪くような姿勢になっている。

体躯が体躯なら、子供が母親に縋るような格好なのであった。

……とはいえ、エステルの赤面の衝撃を止めたのは、そんなことではない。

「……………」

肩が震えている。頭が震えている。――全身が震えている。

そして、連動して小刻みに揺れるエステルは――聴いてはいけない気がする音を、聞いてしまう――

「ユーリ……」

その正体が、何なのか――

エステルは、降雨に耳を傾けて認識を遅らせた。

なんとなく、ユーリの沽券に関わってしまうような気がして――

次第にユーリの身体の揺らめきは激しさを増す。

……それがどこか、求めている物をくれなくてせがんでいる子供のように思えて――

反射的にエステルの母性本能が刺激された。

「ユーリ、大丈夫ですよ。……わたしはここにいますよ……決して離れたりしませんよ」

「……………」

エステルは、胸に湧いてきた言葉を紡いだ。そして、押し付けられたユーリの頭をゆつくりと優しく撫でる。

雨の匂いでユーリの魅惑の芳香は届かないし、ビロードのような黒髪の触感に耽るべき場合でもない。

正解かどうかはわからないが、今のエステルには、思いつくままの慰めの言葉をかけ、無心にユーリを摩（さす）ることが精一杯の慈愛の形であった。

ユーリの体の揺れはますます激しくなる。

間違えたかと思いきや、エステルが慌てて、「ごめんなさい、と謝罪すると、否定するように横に体が振られる。

「……………」

結局、エステルはユーリの頭を撫で続けるほかなかった。

（いったい、何があったんだろう?）

こんな風にされても、エステルの中で、ユーリへの評価が下がるとはならない。

人間、こんな風になることもあるだろう。誰かに思いの丈をぶつけたくなることもあるだろう。

エステルは、ユーリを神様を具現化した偶像として崇拜するつもりは全くない。

むしろ、力になれることがあったら、力になりたいと感じている。けれど――

すべてにおいてほとんど完璧なユーリが、こんな風になってしまうとは…………?」

そう。そこが腑に落ちなかった。

圧倒を権化するユーリならば、大概のことは問題にならないはずだ。

どんな困難も薄っぺらい紙のように、ユーリなら切り捨てられるに違いない。

悩みというものが醸成されるならば、突き進んで解決すればよい——たいていの場合、それがユーリにはできるはずだ。

しかし——

ユーリは現にこうなってしまうている。

エステルの勘では、ユーリは悩みの許容量すら大きいはずなのに、耐えきれなくなっている。

そこまでのことが、果たしてこの世界に存在するのだろうか？

そうだとしたら、恐い。

ユーリすらをも蹂躪できる存在など……常人には空恐ろしくてたまらない。

けれど、これはまだ憶測に過ぎない。

——ユーリは、いつか話すと言ってくれた。

ならば、自分は、それを待つしかない——じつくりと、待つほかない。

それが——すべてを与えてくれた想い人に対する恩返しだ。

エステルは、いまはそう締めることにする。

エステルは何も訊かず、ユーリの後頭部をいつまでもいつまでも撫で続けた。

*

しとしとと降る雨に、ベタベタと粘つくような不快さを感じたのは、気のせいではなかったらしい。

港街カプワ・ノールに着いて、エステルはそう実感する。

街に着いたのに、人心地が付いたとは言えないのだ。人がいないせいで。

港街というのは、活気にあふれるものと思っていたエステルは、憧憬図通りとはいかず、肩を落とす。

縞模様のカラフルな敷物を屋根代わりにした屋台があるが、その中では雑然と箱やタルが積み上げられているだけで、店番となる人はいない。隣も、そのまた隣も似たような雰囲気であった。

屋台だけではなく、歴とした建物で営まれている商店も、シャッターが下りていてまったく人気は感じられない。夕暮れ近くになると買い物客が増えると、ユーリが教えてくれたのに。

あちこちで木が植えられ、花壇が至る所に見られる自然豊かな場所は素晴らしいのであるが……エステルとしては、帝都で買い物をした時のような人混みの方が今は恋しかった。

はたと、この街も減んでいるのではないかと疑懼(ぎく)したが……結界が確(しっか)りと機能し、魔物が人を食い散らかしているという二度と直面したくない凄惨な景色ではないことに、エステルはほつとして馬鹿な想像を切り捨てられた。

とはいえ――

街の様子も心配ではあるが、目下のところ、エステルとしては、ユーリを一刻も早く休ませてあげたかった。

不調ごときで道中の魔物に対してユーリの剣が鈍ったりはしないが、それでも疲労困憊の表情は見ていて痛々しい。

なので、エステルは街に入ったとたん先導し、自分の目で宿屋を見つけて、ユーリに手を振った。

「悪かったな、エステル。無様なところ見せちゃまって」「いえいえ。辛い時は甘えてくれてもいいんですよ」
森林地帯から続いていた沈黙の帳を、ユーリが申し訳なきような声で破った。

エステルはホツとして、慈愛を込めた本心からの言葉をかける。それと同時に、食事の持つ力にも感謝した。

連日の降雨で新鮮な海の幸を提供できなくて申し訳ないと、宿屋の主人は謝っていたが、街の中で食事をするだけでエステルとしては十分であった。

また、食堂で食べるのではなく、広々とした宿屋の個室で食べる形式だったのも……ユーリを少しでも早く休ませられることができ嬉しういな、と感じている。

それでも、ジエントルマンなユーリは、宿屋の人の配膳を手伝い、見習って手伝おうとしたエステルをも、帳尻を合わさせてくれ、と手で制してしまつたが。

「それにしても、この街はどうしたんでしようね？ 何日もずっと雨が続けているなんて」

小さなステークを切り分け、カップに入つたお茶を飲みながら眉を曇らせるエステル。

「どうだろうな……生活の糧である漁業ができねえくれえだから、よほど深刻なんだろうが……お天道様を恨むしかないのかね」

ユーリも、かぶりを振りながらそう言うほかない。

天気のことなど人間の司ることではなく、茫漠とした議論にならざるを得ないからだ。

「……明日は、この街を見て回りましょうか。何もできることはないかもしれないけど、心配ですし」

「船が出ねえなら、そうするしかないわな。なら、今日の所は早く寝ちまって明日に備えようぜ」

「そうですね……ふわあ……」

エステルは欠伸を手で押さえる。

やはり自分も疲れていたのか、唐突に襲ってきた眠気はかなり強い。

せめて、ユーリが眠るまで踏ん張りたいのだが……食事すら終われないとは、何だか情けないな、とぼんやりと思う。

「ほれほれ。今日はいろいろ大変だったろ。お前のおかげでオレは助かったんだから、姫様は早く寢床に就けよ——あとは、オレが何とかするからさ」

「……………そうですね。……申し訳ないですが、お願いします」
エステルは、何とか抵抗しようとしたが、人を背負ったかのように
全身が怠く、瞼の重みにすらまったく勝てない状況では、ユーリが眠
るまで持ちこたえられそうにない。残念ながら、そう判断せざるを得
ない。

——もちろん、ユーリの最後の「何とかする」と言った時の、決然
とした語調にも、まったく気付けなかった。

ふらつく足取りでネグリジエに着替え、歯磨きをするのが目一杯
で、ベッドで布団をかぶった時、エステルはもはや思考ができるよう
な状態ではなかった。

*

——睡眠薬の効能は靦面（てきめん）だった。

これをどこで手に入れたのか——もはやまったく覚えていない。

あつという間にベッドに就いてしまったエステルをオレは見遣る。

エステル。言葉では言い尽くせないほど、オレの心を席卷している
存在。

こんな韜晦（とうかい）の海に沈んだ男のアイデンティティーに
なっているとは……まったく不幸なことだ。

コイツがいなきや、オレは死ぬ。エステルを守る以外にオレの存在
意義はない。

仮にエステルの命を脅やかすものがいなかったら、オレがエステル
の前に現れることもなく、とつくの昔に自殺していただろう。

……罪咎（ざいきゆう）の川に溺れ、ぬばたまの暗濤から屍人のご
とくオレが這い出なければならぬのは、エステルを何としてでも茜
さす太陽の下へと生者として残さなければならぬからだ。

エステルに安全な場所などない。

始祖の隸長（エンテレケイア）たちが、引つ切り無しにコイツを殺

すチャンスを窺っているからだ。

……だから、この上なく馬鹿馬鹿しくてたまらないが、それ以上に合理的なことがないから、今からやることにもコイツを連れていかなければならない。

スヤスヤと眠りにについている、あどけなくも可憐なエステルを
見詰める。

愛おしくてたまらない。思わず絹の糸のようなピンクの髪の毛をかき分けて、その清楚に輝く額にキスを落とす。

桜と太陽と蜂蜜が混ざったような甘美にして爽快な風味を、唇と鼻腔から知覚した。

んんんんと、むずがるようにエステルはほんの少し眉をひそめる。まったく怖くない。

よほど非人道的な振る舞いをしない限り、コイツの怒りは怒りではないのだ。そんなことはとっくの昔に知っている。

……もつともオレは、アレクセイ以上にその外道に当てはまるのだが。

苦笑しながらオレは、またしてもいつ手に入れたのか忘れてしまった防水仕様のアクアマントを背中に羽織る。

背徳感を覚えながら布団を剥ぎ、エステルのだらりとした両腕をオレの肩にかけ、マントの中に入れて背負う。

そして、エステルとオレの腰にマジックテープを巻きつけて、きつめに固定した。これで準備完了。

部屋の入り口に目を移す。

そして――

――5度目のラゴウ暗殺に向かう。

7. Y・16Y+5≦0

1 周目。

まさか、そんな名前と呼ばわるとは夢に思わなかった心躍る冒険の日々。

少しばかり個性が強過ぎる仲間たちと出会い、絆を育み、しまいは世界の危機に立ち向かった歷程。

万事が順風満帆だったわけではない。オレ自身のミスや、仲間の失敗や裏切りだって何度もあったし、理不尽な出来事に何度も対処しなければならなかった。

だが、押しなべて言えば、間違いなく幸運だったと言える。——周回を重ねれば重ねるごとに余計にそう感じざるを得ない。

例えば、最初にデイドン砦に着いた時、『平原の主』の群れから、怯えて竦んでしまった女の子と負傷して動けなくなっていた男をオレとエステルで救出したが……もしもこれが間に合わなかったら？

例えば、ケーブ・モック大密林の最深部で、一体だけでも苦戦した強力な魔物に何匹も圍繞（いじょう）された時に、デュークによってたまたま助けられたが……この時、デュークが来てくれなかったらどうなっていた？

例えば、戦艦ヘラクレスが帝都に向かって砲撃した時、フレン隊の艦船の特攻で何とか着弾点を逸らすことができたが……このことが必然的に生じた出来事と言えるだろうか？

そう。オレたちの最初の旅は、夥しいばかりの幸運に支えられ、一歩間違えば破綻したかもしれない薄氷の道を辛うじて歩んで来たに過ぎないのだ。

それを早くに自省していれば、オレの、数えきれないほど致命的な間違いを犯した循環の道程で、もう少しばかりマシな振る舞いをできたかもしれない。

——オレは、最初の旅の中で殺人の罪を犯した。

無辜の民を玩具と見做して、我儘な子供のようは無意味に蹂躪（じゆうりやく）してくれていた2人の悪党——ラゴウとキュモールを無防備な状態で暗

殺した。

今でも、その暗殺が間違いだつたとは思わない。ただ、その罪は最終的にお節介な皇帝候補様たちによって恩赦されたのだが、罪に対する罰はきちんとして受けるべきだったように思う。

何しろ、その罪を——確かな正義で糾弾した親友すらも、オレは葬り去ってしまったのだから。

これだけでも十分過ぎるほどに大罪であるが……もはや一人を除いた仲間全員を——望まぬ道に叩き落してしまったのだ。自己弁護のしようがない。

——罪人は、罪を繰り返す

中途半端な仮借は、結果として一人の男の罪科を徒（いたずら）に増やさせてしまった。

今ならたとえ件の暗殺の咎で捕まって極刑に処されたとしても、オレは諸手を挙げて歓迎するだろう。——そちらの方が、よほど自分を慰められるのだから。

もはや、オレは生きていることすら烏滸（おこ）がましい量の罪に沈んでいる……しかし、不幸にして罰則を与えてくれる人間はもういない。

——いや、裁きを与える人間を消すのが罰というならば、ある意味で最大級の罰なのかもしれないが。

……そんな愚かしさを書き溜めた不定にして曖昧な書物を繙（ひもと）くことが、一種の罰になるというならば、敢えて顧みてみようと思う。

——それは、星喰み打倒の方途が順調に推移していた頃のことであつた。

ウンディーネ、イフリート、シルフ、ノームと4体の精霊化に成功し、リタとエステルが精霊の力を収束するための装置を作るための材料を購入して準備に差し掛かっていた。

そして、パティが己の戒禁を破って、魔物化してしまったサイ

フアーを必死の思いで討伐した直後。

『楽園』を探しに行くのじゃ！」

水色の瞳をキラキラ輝かせながら、パティが「パンドラ」の箱を開ける宣言をってしまった。

『楽園』？」

最近貰った『カルロウX』という機械人形を弄っていたカロールがパティの方を向いた。

「ワウ……？」

給餌用の受け皿でドッグフードを平らげている最中のラピードも顔を上げる。

「そうじゃー！ かつてグランカレイが発見したという『楽園』の鍵が手に入ったのじゃ。

だから、是非とも探しに行きたいのじゃー！」

「鍵って……サイフアーってやつが持っていた宝石みたいなやつのこと？」

元帝国騎士団隊長主席シュヴァーンにして、レイヴンとして生きることを決意したおっさんが、こっそりと眇めていた心臓の魔動器から、パティの掲げた宝石に視線を移した。

「そうじゃ」

「うふふ……面白そうね、宝探しなんて」

かつては竜騎士であったが、仲間となったジュディが嫣然として興味を示す。

「あたしは、早いとこ星喰みの退治に行きたいんだけど」

本に耽って、装置の組み立てに没入していたリタが、不機嫌さを隠そうともせずパティを睨み付ける。

「まあまあ、ちよつとくらしいいいじゃないですか、リタ」

そして、このころは、さしてオレの心を傾かせているわけではなかったエステルが、リタを宥めた。

「ま、ちよつとはオレも興味あるし、少しくらい付き合ってやるよ」

オレは、この後の命運など欠片も考えずに、議論の帰趨を決してしまった。

……断っておくが、今から振り返ってもこの提案をしたパーティも、賛同した仲間たちをも恨むつもりは露ほどもない。

後にわかったことであるが、この『パンドラの箱』は、恐らく放っておいても自分で勝手に開錠されていたから、遅かれ早かれ結末は一緒だっただろう。

それに――

――いや、話を続ける。

オレたちは、その『楽園』とやらの手掛かりを探し回り、最終的に世界のへそ――ザウデ不落宮が怪しいのではないかと目星をつけた。アレクセイが起動してしまった星喰み封印のための巨大な魔導器。その稼働のために、エステルの先祖『満月の子』たちの生命力が投げられていた場所。

そこにもう一つ秘密が隠されているのではないかと推理したわけである。

果たして、それは正しかった。

ザウデ不落宮の地下に隠された仕掛けがあり、そこを下って行く、確かに『楽園』には辿り着くことができた。

と言っても、その実態は、ザウデ不落宮に自らの生命力を使うことに反目しかつての満月の子たちが、不老長寿の妙薬を飲んで途方もない年月のあいだ幽閉されていた場所である。

記憶も言動も朧げな彼らにとっては、ある種の永久平和の確立されていた『楽園』であったが――そちらの方は重要ではない。

問題だったのは、『楽園』の盟主――オーマ。

コイツだけは、延々と裏切られた記憶を保ち続け、異形の怪物に変化してまで虎視眈々と、満月の子の子孫と始祖の隸長への復讐の機会を窺っていたのだ。

しかし、コイツ自体に打ち克つことは容易であった。そして、いったんは討滅したと確信し、『楽園』よりなおも地下へと続く道程をオレたちは下り続けた。

――それが、墓穴を掘るのと同義であることに気付かないまま。

降下する階層に比例して魔物たちも強力になつていたが、オレたち『凜々の明星（ブレイブヴェスペリア）』の敵ではない。

ところが――

とうとう最深部まで到達してしまつた時、その悪夢に出くわしてしまつたのである。

その名は――スパイラルドラゴ。

「かつて存在した始祖の隸長（エンテレケイア）の王。世界が生んだ最強の力！

獣よ、この身を喰らえ！ 我が力を糧となし、もつて世界を焼き尽くせ！」

異形の怪物のオーマは、その身をもスパイラルドラゴに食わせ、最強にして最悪の力を持つその巨体に乗っ取つた。

今までバカみたいにデカイ魔物と戦つたが、とりわけコイツは別格である。

そのケンタウロスのような怪物の足の付け根ほどにしか、オレたち人間の体は届かない。

人と同じように二本の腕を振り回し、しかし頭頂部には何をも刺し貫かんという鋭利な一角が突き出ている。

しかし、それだけではなく、人で言うところの脇腹に当たる所から竜の頭が2対飛び出て、容赦のないブレス攻撃を吐き出す。

ケンタウロスの背中からは、鷹や鷲と言つた猛禽類すら生温く感じるほど巨大な翼をはためかせている。

さらに、伝記に残るケンタウロスとは反して、全てを薙ぎ倒さんとか言うほどの竜尾を2本も従えていた。

その4本足も、とにかく強い動物を詰め込み、合体させたその「異容」を支え切るほど十分に強靱である。

……オレたちは、その威容に何とか呑まれないようにしながら、戦いに挑んだ。

——惨敗だった。

オレが意識を取り戻した時、原形を留めていたのはオレだけだったと言っておく……それ以上に言葉を知らないかつての無学さを、この時ばかりは感謝した。

「……………」

呆然自失のオレが、この時何を思ったかはわからない。

だが、当然ながら無意識下では、こんな結末を変えられる手段を願ったんだろう。

それに応えるように、スパイラルドラゴのいた跡には、紫色に輝く剣が突き刺さっていた。

すべての理性、知性、悟性……そう言ったものが削ぎ落されたオレは、自然と吸い込まれるように妖しく揺らめく剣の元へと足を引かずった。

近づくと、剣はよりいっそう禍々しさを掻き立てたが……オレは、何とはなしにその剣を引き抜いた。

そして——

「ユーリ、大変だよ！」

気が付いたら下町の自分の部屋にある窓辺に腰かけていて、息を切って訪ねてきたテッドを見遣っていた——紫の剣と一緒に。

これが2周目の始まりである。

順調だった。どこまでも順調だった。

オレは、懐かしさに浸りながら、かつてと同じ旅路を歩んだ。

まず、下町の水道魔導器（アクエブラスティア）の魔核を盗んだデツキを追って、貴族街に行き、キュモールにわざと捕まる。

それで、牢屋の中でおっさんことレイヴンと馬鹿話をしつつ、牢屋の鍵をゲット（おっさんを解放しに来たアレクセイにさえ、どこかノスタルジーを感じた）。

夜になるのを見計らって牢屋を脱出して、騎士たちに追われていたエステルと合流。フレンの部屋には行かずにザギはスルー。

2人で城を抜けた後、下町でラピードと合流して、帝都を後にする。デイドン砦で前回と同じように女の子と男を助け出して、カウフマシからクオイの森について聞き出す。

クオイの森で、カロールと合流。エッグベアを退治して、ハルルの樹の解毒をし、最終的にエステルの力で樹を回復。

アスピオでリタに吹っ掛けて、共にシャイコス遺跡を探検し、エステルの力を見せるとリタが仲間に加わる。

エフミドの丘は……さすがに面倒だったが、リタの痛癢が起こした騒動に付き合ってた。

カプワ・ノールでは、フレンと作戦を練って、とつとつとラゴウを逮捕してもらった。

この時、竜騎士ことジュデイがラゴウの屋敷の襲撃して天候を操っていたヘルメス式魔動器を壊すのであるが、あいつは話が分かるやつだから頼み込んで、あとで破壊を許すことを条件にラゴウ逮捕のために行ったん見逃してもらった。……さすがに、怒髪天を衝くりタと共には行けなかったが。

前回とは違い、きちんと連絡船でカプワ・トリムに向かった後、カールボクラムでグシオスを捻ってから、騎士団にわざと連行されてヘリオードまで向かう。

そこで……リタが結界魔導器（シルトブラスティア）の暴走を静止した後、オレはとつくの昔にその悪行を知っているアレクセイを暗殺

した。

コイツに関しては、生きているだけ世界の害悪だから、何らの良心の呵責もなく切り捨てることができた。

後は、ギルドの街ダングレストの魔物騒動を未然に防ぎ（結界魔導器をいじる奴らを倒せばいいだけのこと）、ケーブ・モック大密林でレイヴンと合流し、エアルクレーネ騒動でデュークと知己になる。

ついで、前回は歯が立たなかったドンを軽くひねって打ち倒した。

ギルドと帝都の戦争を前回と同じようにフレンが止め、オレたちはジユデイと力を合わせながらバルボス討伐に赴いて撃破し、水道魔導器の魔核を奪還する。

討伐後、ひとまず旅のメンバーは解散した。

さすがに、ラゴウの悪行は、魔導器の大量使用の咎に、バルボスとの結託も重なったせいとか、評議会の権力でも打ち消すことができず、オレが暗殺する必要もなかった。

当たり前だが、オレは旅の顛末を全部を知っていたから、順調でないわけがなかった。

まるで再上映された演劇を役者の一人としてなぞらえているような妙な気分になりながらも、悪い部分以外は前回と極力似せるようにした。自分の予想している未来とズレると厄介だからである。

前回の、皆の最期を見てしまったこともあって、戦闘に関してもオレが出しやばり過ぎてしまった。……これは、後に反省したが。

——ただ、オレの力の及ばない範囲で、1周目とはまったく異なるところがあった。

パティがいない。

……カロールによると、『ブラックホープ号事件』は確かに発生していた。

それで、アイフリード（パティのことだ）の名前は、ギルド間で忌み名として知れ渡っていることも。

バタフライエフェクト——蝶がはばたく程度の非常に小さな攪乱でも遠くの場所の気象に影響を与えろという意味であるが、それと同じように微妙な時間差が生じてパティとしばらく出会えなくても仕方ないのかもしれない。……アイツと出会えたのは割と偶然の要素が強かった気もするし。

そう思っ探し回ったのであるが——結局、この周回でパティと合流することはなかった。

1周目でサイファーから頼まれて、幼児化したアイツを保護したカプワ・トリムの灯台に住んでいる夫婦を訪ねても、そんな子は知らないの一点張り。

あちこち回っている時も、注意深く耳を澄ませたが……アイフリードの悪行の噂は聞こえど、アイフリードの孫と名乗る少女について耳に入ることはなかった。

……もちろん自分の時間逆行のせいかとオレは疑った。

ただ、自己弁護とは別に……少なくともオレの逆行した前の時間で『ブラックホープ号事件』は起きていて、バタフライエフェクトの及ぶ範囲外の出来事のはずである。

つまり、たとえオレが時間逆行したことで世界に影響が出るにしても、それよりも過去の時間にまで影響が生じるのは、論理的にあり得ない。

そうは理屈を立てられるのだが……しかしながら、現にパティはどこを探してもいないのである。

どこかで魔物にでもやられたのかとも思ったが……灯台の夫婦の元へは、サイファーが送り届けたはずである。だから、アイツが冒険に旅立つ前に必ず面識がなければならぬ。

しかし、あの夫婦が知らないということは……『ブラックホープ号事件』で、パティが……死んでしまったという結論しか出せないのである。

うすら寒いものを感じた。

いるはずの人間がない——心に大きな穴が空いたような、そんな虚しさ、畏怖を感じたのをはつきりと覚えている。

決してみんなの前では見せなかったが……それでも、自分を好きだ好きだからかい続けた少女の喪失は……けっこうオレの中で響いた。

仲間だと認められた時の、大海原を表したかのような笑顔。

あれやこれやの策でみんなを驚かせ、敵を罠に嵌めた時の得意げなウインク。

そして——自戒を破らざるを得なかったかつての仲間を介錯したときの、なみだ。

そのすべてが失われてしまったのである。

ただ、この時のオレは、パティが『楽園』を探しに行こうと言わなければ、前回のようなことが起こらないだろうとも思っていた。

むろん、パティを殺してでも止めたいだとか、いなくなつて都合がいいなどは露とも思わなかったから、この結果は大いに心外であったが……。

……旅は、やはり順調であった。

フェローがダングレストでエステルを襲撃してきたとき、当然来ることを予期していたオレが撃退する。

そして、ジュディスとカロールと共にダングレストを出て（アレクセイがいらないからか、騎士団の追跡も前回よりはしつこくなかった）、ギルド『凜々の明星』を結成。

エステルの、フェローに会いに行くというのをひとまずの目的として、砂漠までの旅を開始。

道中のヘリオードでリタを拾い、キュモールの労働者の酷使を今回はしっかりと食い止めて、フレンに逮捕させた。

カプワ・トリムで、今回は本当にドンからの仕事の一つを承ったレイヴンがエステルのお目付け役として再合流する。

カウフマンの依頼で船を譲り受け、操縦士トクナガが怪我をしないように気遣いながら、途中で幽霊船アーセルム号に出遭う。しかし、

パーティとも、魔物化したサイファーとも会えずに、訝りながらも『澄明の刻晶（クリアシエル）』を回収。

そして、ラーギイ（イエガー）に係（かかずら）うことなく、砂漠へと直行。

砂漠で倒れたみんなが死なないように気遣いながらも、フェローの幻がつくりだした過去のヨームゲンに行き着く。

ヨームゲンからの帰路にある闘技場都市ノードポリカでベリウスと会合。

アレクセイが死んでいるため、前回と異なり、ノードポリカが騎士団によって封鎖されることも、ベリウスが襲撃されることもなく、ノードポリカを出立した。

ジュデイが駆動魔導器（ゼロスブラスティア）を破壊するのをわざと見逃し、しばらく漂流した後、彼女を追ってテムザ山に急行（ドンが死ぬ理由もない）。

そこで、再び彼女の魔導器破壊の経緯を聞いてから、バウルの成長を共に見守り、やがて巨大化したバウルと共に空を旅して回った。

あとは、フェローの話聞き、全員に事情を分かせた後、クリティア族の街ミヨルゾを訪ねて、古代の伝説を耳に入れた（念のためエステルとレイヴンを見守っていたが、アレクセイがいらない以上、やはり何の謀り事も生じ得なかった）。

そして——地上に降りてきて、唐突に旅が終了させられる。

「な、なんで、アイツが!?!」

前回以上に澄ましていたオレが、この周回で驚愕したのはこれが初めてであった。

視界の中に——『楽園』を降りてもいないのに、あのスパイラルドラゴがいたから当然である。

世界の中心——ザウデ不落宮の上空を飛行していた奴は、前周で見せたように、猛攻を放っていた。

隕石群を降らせるかのように、火炎弾の放射が世界中に降り注ぐ。ありとあらゆる地形を永久凍土に変えんと、氷弾が大地を凍り付か

せる。

奴の羽ばたきから生じた旋毛風（つむじかぜ）は、世界中の都市を微塵に切り裂く。

思い立ったように海底に巨体を、流星よろしく猛スピードで叩きつけられれば、世界中の大地を文字通り鳴らし、津波が沿岸部を飲み込んだ。

「野郎ツ!!」

「な、なんなんです、あれは!?!」

「どうなっちゃうの!?!」

「あの勢いで暴れられたら!」

「世界がお陀仏になっちゃうわよ!」

「急ぎましょう! 何としてでも食い止めないと!」

「ワン!」

——義をもってことを成せ、不義には罰を

それがオレたち『凜々の明星（ブレイブ・ヴェスペリア）の掟。

当然、全員がスパイラルドラゴの元へと、バウルを以て急行した——が、結果は言うに及ばない。

前回以上に旅の障害が少なかったということは、前回よりもみんな弱いということである。

前回の面子でも殲滅させられたのに、今回の面子で叶うはずもなかった。

オレ自身は例外であるが——独りで倒せるほど、奴が弱いわけもない。

満身創痍になり、仲間も、世界もダメだと確信した瞬間——

オレは、すぐさま紫の剣——エターナルソードを振り回して時間遡行を決行した。

3週目……この周ほど、自分の愚かしさを嘆いたこともない。なぜ、毎度毎度おなじように世界が回ると思ったのか。どうして、パ

テイがいなかった原因をもっと深く考えなかったのか。

……そうすれば、もう少しマシな行動がとれたものを。

2周目と同じように、魔核ドロボウを追ってキュモールに捕らえられたのだが——隣の牢屋にレイヴンがいなかった。

いくら声をかけても、隣に人はいない。——つまり、牢屋のカギを入手できないということである。

いくら世界を2回、旅しているとはいえ、武醒魔導器（ボーディブラスティア）を取り上げられている状態では、独房を破ることはできない。

オレが行動しないと、エステルが騎士に襲撃されるため、何度も何度も牢屋の柵を叩きつけたが——この程度では、不真面目さに定評のある見張り番を起こすことはできなかった。

夜が明けて、食事を差し入れに来た見張りを殴り倒して、すぐさまエステルの元へと赴いたが——もう遅かった。

アイツは怪我をして、とても旅に出られるような状況ではなくなっていた。——治癒術はアイツの専売特許ではあるが、1周目で操縦士トクナガが負傷した時に完全には治せなかったように、重傷を負ってしまうとどうにもならないのである。

ただ——アイツが城に残っていたとしても、アレクセイさえいなければ何の問題もない。アレクセイさえ消えれば、アイツが道具として使用されることなど万に一つもなくなるからだ。始祖の隸長（エンテレケィア）たちも、治癒術を乱発しないエステルを襲撃する理由はないだろうし。

だから、この段階では帝都にいたアレクセイをとつと暗殺した。

——面倒くさいから、完全犯罪で。

ついでに、キュモールも暗殺し、後々の懸念を取っ払う。

そして、ラピードと共に、急いで帝都を発ったが——初動の遅れは致命的だった。

まず、クオイの森をいくら探しても、杳（よう）としてカロルの消

息は知れなかった。

嫌な予感がして帝都やデイドン砦付近まで舞い戻ったが、カロールを捉えることはできない。

……後々の周回を鑑みると、おそろくだが、カロールはクオイの森で合流できなければ、行方不明になってしまう運命だったのではないか、と思う。その末路は……想像もしたくないが。

アスピオに赴いて、リタと出会っても仲間に加わることはない。

アイツは、最初エステルとの体質に興味を示して旅に同行したのであって、そのエステルがいなければ、アイツの独りよがりな部分を取り除くことはできないのである。

……どんなに言葉を尽くしても、徹底的に証拠を重んじる学者肌有一部分が、最終的にオレと行くという選択を排除してしまった。やはり、この辺りも、エステルの柔らかな対応が必要だったように思える。……最初のころだと、フレンがハルルの街の魔導器の対処を要請しても同行しなかったからな、リタは。

カプワ・ノールに着いて、若干八つ当たり気味だったかもしれないが、フレンと合流する前にラゴウを暗殺して、ついでに天候を操る魔導器を破壊した。……あれだけ1周目で糾弾された暗殺に対して、オレはもはや何の躊躇いも感じなかった。

カプワ・トリムで、パティの足跡を辿ったが、1周目と変わらない。ダングレストに着いて、レイヴンを搜索したが……やはりいなかった。ドンのギルド『天を射る矢(アルトスク)』を探し回ってもいない。ジュデイと出会うのも待ち遠しくて、バルボスを独りで討伐し、水道魔導器の魔核を下町まで自力で届けてから、オレは城の資料室に忍び込んだ。

レイヴンを、シユヴァーンを一度殺した人魔戦争の記録を閲覧するために。

すると——案の定、極秘の戦没者名簿にその名前があった。イエガー、キャナリの名前と共に。

むろん、アレクセイがこっそりと蘇らせた可能性もあるが……シユヴァーン隊というのが2周目まで存在していた以上、わざわざ生きて

いることを秘匿するとは思えない。

かつてルブランの言っていたことを思い出す——『シユヴァーン隊長は、人魔戦争を生き残った英傑だぞ!』

そう。アレクセイ以外は誰もシユヴァーンが一度死んでいたことを知らなかったのである。

その心臓が、もはや自分のモノでないことなど、誰も……。

……一瞬だけ、人魔戦争の前まで遡っておっさんを救おうかと思っ
た。

だが、それはアレクセイのやったことと何が違うのだろうか？

死に逝く運命にある者を自分の都合のためだけに強引に捻じ曲げることと、死者に心臓を植えつけて強引に蘇らせることと、何が変わらないのだろうか？

それは、死者を冒瀆していないと言えるのだろうか。

ただ牢屋のカギをくれなかった、ほんらい仲間になるはずだったから救い出す……これは本当に正しいことなのだろうか？

そこまで考えて……オレは、レイヴンを眠らせたままにしておくことを選択した。生者の我儘よりも、死者の尊厳を守ることの方が重要と捉えたのである。

——それと同時に、オレは気が付く。

時間遡行する度に、それ以前の時間の出来事にも変化が生じている
ということに。

理屈はわからない。どう考えても普通じゃあり得ない。

だが、現に時間を巻き戻すごとに——仲間が消えている。

……オレは、エターナルソードを見遣った（この時は、こういう名前だと知らなかったが）。

この周で生きるべきか？

エステルと出会えず、カロルの姿を捉えられず、リタもおそらく永久的に仲間にならず、ジユデイとも合流できそうなチャンスを失ったこの周で？

……とても満足できる選択肢とは言えなかった。アイツらとの知己を未来永劫を得ることなく生きていくなど……オレには、到底考えられない。

なら、またこの剣を使うか？ 仲間を消す可能性があるのに……？

……………

葛藤は、ずいぶん長くかかったんだろう。

だが、最終的にオレは——この周を放棄することを選択した。

今度こそ、誰も消さないように。最後の周回にするように。

スパイラルドラゴの討伐に全力を尽くすことを、消えていく、あるいは消えていった仲間たちに誓って——

オレは、時間を巻き戻した——

……この時、そう誓ったならば、なぜこの周でスパイラルドラゴについて深く調べなかったのか、よく考えなかったのか……後々に、自分のバカさ加減を罵倒しまくることとなる。

*

——ここに最初に着いた時には、エステルだけじゃなくて、ラピードも、カロルも、リタもいて……そこに、レイヴンが来たのにな。

ラゴウ邸に続く長い長い登り坂を上り切り、オレは、いったん物陰に隠れ——かつてみんなと隠れた場所だ——屋敷の門の前にいる衛兵たちの様子を窺った。

ラゴウの魔導器の継ぎ接ぎが齎した天候異常による雨は、マントに包まれたお姫さまには当たらず——罪深き愚者にだけ正しく降り注いでいる。

——そうだ。消すなら、オレだけ消せばいいものを。

なぜ大切で大切で大切で大切で大切で仕方のない仲間たちを消すのだ。

この雨のように、正義公平に適った裁き方をするならば——オレの地獄の業火に焼（く）べる焚き木が増えるだけで、何も仲間たちに牙を剥くことはなかったら？

なのに、なぜ……。

……オレは、かぶりを振る。油断していると、下らない自己憐憫が自分の思考を止めてしまう。追い払わねば。

少なくとも……もう幸か不幸かオレにはわからないが……できることがある。

この背中の温もりを、確かに感じられる唯一の仲間を——オレは守らなければならぬ。

スヤスヤと規則正しく可愛らしい寝息を立てている女の子を——オレは守らなければならぬのだ。

そのためには——

オレは、剣を抜いた。そして、いつものように、『蒼破刃』の蒼い剣圧をホーミングして、2体の門番をまとめて蹴散らす。

……これで4度目か？ ラゴウの暗殺のタイミングは割とズレるから。

正解でも不正解でも……誰も判定者はいない。——決していないのだ。

オレは、寂寥感が自分を食らいつくす前に、或いは騒ぎを聞きつけられる前に——ラゴウ邸へと足を急いだ。

*

4週目——意識が戻った瞬間に、ハンクスじいさんが5年前に逝去したという記憶が流れ込むんできた。

いつも挨拶のように憎まれ口を叩いていたというのに……。下町の絆すらも、時間遡行は消し去って行くのかよ。

しかし、嘆いている暇はない。さっさと行動せねば。

今回は下町がプールになる1週間ほど前に遡った。懸案事項を取り除く猶予期間が欲しかったのである。

まずは、完全犯罪でアレクセイ、キュモールを暗殺した。——やはり、レイヴンも存在していない。そのことも胸を痛めながら確かめた。

一応、恐る恐るエステルやフレンの存在も確認したが……ちやんと生きていて一安心。

そして、エステルが城を脱出する日にオレも城に忍び込む。

——そう言えば、アレクセイを殺害したら、巡り巡ってフレン暗殺も消えるんじゃないかとも思ったが——幸か不幸か杞憂だった。

2周目までと同じように、三叉路の廊下でエステルが騎士たちに追われているところにオレが割って入って救出する。

そして、ラピードと共に帝都を抜け出し、1、2周目と同様に首尾よくカロールとリタと合流——ただ、ハルルの樹をエステルが治療した時、以前見たときよりも治療術の光が強力だったのは少し気になった。

あとは、カプワ・ノールに着いて、フレンと合流。宿屋に泊まった時、オレ独りで夜陰に乗じてラゴウ邸に赴き、ラゴウと、ついでに傍らにいたバルボスも暗殺した。そして、天候を操る魔導器を破壊した。

仲間を方に一つでも失う可能性は避けたかったし、もはや魔導器を壊してリタがキレることなどどうでもいいことだったのである。

大騒動になっているところを無視して、カプワ・トリムに船で向かう。

そして——案の定、パティがないことを確認してから、カルポクラムをすっ飛ばして、ヘリオードに向かったのであるが……

「な、何よこれ!?!」

「どうしてこんなことに……!?!」

「こんな……ひどすぎるよ……!?!」

「ワフウ……」

……

時間遡行の魔手は、どうやら世界の街にも及ぶらしい。

ヘリオードの結界魔導器（シルトブラスティア）の暴走で、彼の新興都市は爆散しており、見るに堪えないものとなっていた。

無念を散らした煉瓦の残骸に、ひしゃげた扉、物見櫓の木片が際立った。連綿と轟く瀑布のみが、記憶の中のヘリオードと結びつき、過去の追憶との隔たりによる悲哀を醸す。

人の様相など……言うまでもない。

……これでなんとなくわかった。

時間遡行をするときの副作用とは、幸運の糸を抜き取って、代わりに不幸の糸を織り込んでいくようなものなのだろう。

ヘリオードで言うならば、今まではリタや騎士団が手を施したから幸いなことに最悪の事態は避けられたが、今回は間に合わない、或いは間に合いそうもない不幸な状態にまでなってしまったようだ。

それで今回の結界魔導器（シルトブラスティア）の暴走による街全体の爆発が起きたのだろう……要するに、そう心中で嘯（うそぶ）いているオレのせいってことだが。

しかし、4週目の悲劇はそれだけではとどまらない。——ジュディが、どうしても仲間にならなかつたのである。

アイツの友達のバウルに跨（またが）り、隙あらばエステルを急襲してきた。

かつてのヘリオードでジュディはヘルメス式魔導器と同じぐらいの危険分子と見做した、満月の子たるエステルを襲撃した時は、すぐさま矛を取めたというのに——この周回からは、いつさい友好の手を差し伸べることなく、追跡者として対決せざるを得なかつた。

もちろん、何度もコンタクトを凶ろうとしたが……フェローよろしくの黒鉄（くろがね）のような頭脳をほぐすことはいそいでできなかった。

夜半に空爆、ケーブルモック大密林を焼失させかける、街中で不意打ちを仕掛けるなど、その執念はもはや常軌を逸していた。

ターゲットにされたエステル以上に……彼女に懐いているリタの『バカドラ』と呼ぶ語調も、記憶の中にある怒気を超えて、怨嗟で固く冷え切っていた。

……リタとジュデイが、異母姉妹であることを知っているオレからすれば、その骨肉の争いは目を覆いたくなるものであった。

むろん、オレにとつても嫣然で怜悧であったかつての仲間と相対するのは、心が軋むことである。

交渉してもにべなく、万が一ジュデイが交誼を結ぼうと歩み寄つても、怒髪天を衝いたリタの説得が困難であることを悟つたオレは……結局、諦めざるを得なかった。

……しかし、こんな有様でも4周目は、時間遡行の旅を総覧すれば比較的マシな部類にカテゴライズされる。

オレは、スパイラルドラゴ討伐に心血を注ぐべく、帝都やギルドに助力を要請した。

もちろん多少、猜疑の目は向けられたが、それでも、友人のフレン、オレを気に入ってくれたドン、始祖の隸長の中では話のわかるペリウスを介して世界中の強力な勢力が一致団結することを惜しまなかった。

アレクセイとバルボスがいなければ、恐ろしいほどスムーズに修好の運びと相成ることを実感できた。

もちろん、旅の仲間（ずいぶん減っちゃったが）、エステル、ラピード、カロール、リタに関しても、道中の魔物や闘技場を利用して可能な限り鍛えてもらった。

2周目の反省でオレが戦闘で出しゃばり過ぎることなく、なるべく強い状態になるように仕向けたのだ……結果、1周目よりも強靱な状態で、スパイラルドラゴとの対決に足を進められた。

フレンを新しい長として再編成された騎士団、ドンを旗頭に纏め上げられた血気盛んなギルドの武装兵、戦士の殿堂（パレストラーレ）が誇る屈強な鋭兵……いくらなんでもこれだけいけば、勝鬨（かちどき）を上げられる……そう確信していた。

だが——奴は以前にも増して、遙かに強力になっていた。

……意識を取り戻した時、眼前に広がる光景は2周目以上に、惨憺たるものであった。

ザウデを囲んだ帝都・ギルドの連合艦隊は、無残にも海の藻屑と成り果て、辛うじて漂っている船籍には焦げた人間が刻印されていた。海上を凍土がプカプカと歪に浮かび、近郊の島々に生えている木々はすべて薙ぎ倒されている。

遠目から見ても、大陸は天からの一閃を浴びたかのように、その大地が抉られていた。

……いくらなんでも、2周目まではここまで力を持っていなかった。つまり、周回を重ねるごとに、奴は強くなっている——

暗澹たる気持ちに胸を塗りつぶそうとした——が、すぐにまだ策はあると思ひ直す。

まだ絶望してはならない——その想いだけで、胸中の暗い侵食を食い止め、オレは、再びエターナルソードで虚空を切り裂いた。

*

5周目。——何度自決をしようかと思ったかわからない悪夢の周。

この周に至っては——誰とも出会えなかった。
まず。

「ぐっ……うおおおおっ!!」

流れ込んできた記憶は、ハンクスじいさんの死と……フレンの溺死を告げる。

8年前に、よりにもよってオレを庇って川に飲み込まれた——そんな信じられない事件が起こったらしい。

あの、謹厳実直が過ぎ、ムカつくぐらい万事優秀でオレの前を悠然と進んでいたフレン・シーフォが……よりにもよって吞まれたら

い。

……もはや、オレの中で、その喪失感をどう表せばいいのかわからず、しばらくの間、思考が形をなさなかった。

我に帰り、矢も楯もたまらず、ザーファイアス城へ急行する。

そして——エステルが生きていることを確かめて、心底胸を撫で下ろした。

よかった。しばらくしたら迎えに行くからな。

——この時のオレの頭は、フレンがないならば、そもそもエステルが旅立つ理由がないことなどすっかり抜け落ちていた。

——そして、不幸にして、その愚鈍さは意味をなさなかった。

いつものように、アレクセイ、キユモールを殺害した後——城から爆音が轟く。

急いで駆けつけると——フェローが飛び去った後で、エステルが死んでいた。

なんで、2人も……？

縫るべき仲間がまた一人抜け落ちた、余りにも強烈な理不尽さにオレは打ちのめされた。

怨讐でフェローを追跡し、剣で叩き伏せてから事の次第を問い質したところ——

『満月の子は、世界の毒。故に消さねばならぬ』

「つっても、あまりに性急すぎんだろ！」

1、2周目の、まだ存在した寛大さとのギャップで、オレの声は戦慄（わなな）いていた。

『あの娘の力は、かつてのいずれの満月の子を遥かに凌駕するものであった。』

もはや、手を下さずにはおれぬほ——』

それは八つ当たりだったのかもしれない。

オレ自身の怒りをコイツにぶつけたただけかもしれない。
ともかくもオレは——フェローを断頭した。

満月の子。魔導器がなくとも術を使えるエステルの特異能力。
しかし、エアルを大量消費してしまうが故に、アイツが魔術を使う
度に世界の環境を乱してしまう。

このせいでエステルは、1周目からフェローに襲撃されたが、あの
時はジュデイがとりなしてくれた。

しかし、その抑止力の不在はもとより——否が応でも、時間遡行の
副作用が及んでいるのではないかという疑惑がオレを苛む。

——確かに、1周目でスパイラルドラゴに敗れてから辺りを見回し
た時、エステルの姿はなかった。

それは、死体が跡形もなく消されたからではなく——アイツがスパ
イラルドラゴに取り込まれたせいじゃないかと思いはじめた。オーマ
は、満月の子の子孫に殊更に復讐したがっていたし。

さらに、オレは慄然とする。スパイラルドラゴが強化されているの
も、時間遡行のせいなのではないか、と。

すなわち——エターナルソードから何らかの力がスパイラルドラ
ゴに巻き付き、取り込んだエステルもろともその内在する力を強化し
てしまったのではないか。

……………すべては、憶測。まだ、仮説にすぎない。

だが………いつたい、オレは何をやっているのだろうか、思わずに
はいられない。

道化として、オレはスパイラルドラゴ——引いてはオーマの操り人
形として踊らされているだけではないか。

仲間をどんどん消し去って、敵の親玉を強くしていく……こんな滑
稽な話があるだろうか？

ガンッ!!!

胸中を逆巻くやり場のない怒りを、近くの壁に叩きつける——石礫
と爪が食い込んで手が血で滲んだ。

それでも理性で猛炎を蓋できたのは、まだやれることがあると知っ

ていたからだ。

まだ。まだ、できることはある。

復讐の念を込めてスパイラルドラゴの鼻を明かす手段は残っているのだ。

星喰みを倒すためにリタが作ろうとした装置……あれを開発すれば、スパイラルドラゴを討滅できる！

縫れるものがある以上、止まるわけにはいかない。

だから——オレはアスピオへと足を進めた。

まだ「平原の主」の襲来していないデイドン砦をくぐり抜けて、相変わらずの常闇に沈んでいる学術都市アスピオに着いた。

ようやく仲間に見える息を切らしていたオレは、一目散にリタの小屋へと急行し、ノックの代わりにドアを勢いよく殴る。

それは、この周で2人も消された以上、もう誰も失うことはないという先入見からの確信からの行動であったが——

「はい……？　どちら様ですか？」

オレは逃げた。そして、嘔吐した。

ほとんどまともな食事をしていないのにどこから出るのかと不思議に感じながらも、逆流する酸味が現実へと思考を向き直させた。

なぜだ。なぜ……あのリング頭がリタの小屋にいるんだ？

ウイチル、とか言ったか？　フレンと一緒に居たチビの魔導士。そいつが、あの小屋にいるということは……。

人目につかないところで吐き出すものを吐き出したオレは、眩暈でふらつきながらも手当たり次第、リタについて聞き込みをした。

しかし、返って来る答えはみな同じ——「そんなヤツは知らない」

アスピオに遍（あまね）く知れ渡っているはずの、天才魔導士の称号を恣（ほしいまま）にした少女を知っている者は誰一人としていな

かった。

それでも現実を認めたくないオレは、一縷の望みを胸に燃やして、アスピオのすべての戸籍を検めたが——結果は同じこと。

リタがいない。仲間の喪失というのは言わずもがな、その打撃はどこまでも大きい。

オレたちの旅の魔導器関連の対処は、すべてリタに頼りきりであった。

アイツの頭脳労働が、数えきれないほどの利扱を齎してきたのである。

そんなやつがいなくなるということ——

……3周目のように、にべ無く突き帰されてもよかった。

今度こそ、折れずに何とか粘る自信があつたのだから。

だが、リタが存在しないのに、星喰みを倒す装置をつくれ、と？

……アスピオの暗黒にオレは同化しそうになった。

いや、この街には照明がある分だけ、オレの胸の内よりは明るかつたであろう。

オレの吸い込んだ闇の酸素は、辛うじて活動していた大脳を間違はなく一時停止させていた。

そのせいで、オレはまたとんでもないドジを踏むことになる。

カロルの顔を、一瞬でも早く見たくて、ダングレストを目指したのである——日付を確認しないまま。

……気が付いたらカプワ・ノールにいて、そして、既にクオイの森にアイツが張っている日にちであつたのである。

自分の愚かさを呪いながら慌てて来た道に戻ると——もう、アイツの行方は杳（よう）として知れない状態になっていた。

「ははは……」

乾いた自嘲をこぼしながら、クオイの森を抜けて、近くのデイドン砦で夜を明かそうとすると——今度は「デイドン砦が『平原の主』に蹂躪されていた。

……ここもかよ、ぐらゐの捨て鉢に爛れた嗤いを浮かべるほかなかつたが。

帝都に戻った。

「ワン！」

下町の宿屋の一室にラピードがいた。

アイツには、この時のオレがどう映っただろうな？

オレは下町から市民街に引越した。これ以上、見知ったヤツがいなくなったりしないように……そもそもオレなんかと絆を結ばないようにと願いを込めて。

……無駄に金だけは貯まっていたからな。

「ま、リタの代わりをするか……」

その決意の火種は、微粒子レベルに小さかった。そのことに気付いたのさえ、ずいぶん後のことであった。

「……わけわかんねえ」

慣れない本の中に、ビツシリと余白なく詰め込まれた数式の羅列にオレは幾度となくそう呟いた。

リタが如何ほどに天才だったのかを、再認識する。

オレは、これまでの旅でアイツ自身さえ知らなかったエアルや魔導器について色々と聞いていたから、少しは何とかなるかと考えていたが……とんだ思い上がりだったらしい。

水道魔導器を例にとってみる。

機能としては、井戸の水を自動で吸い上げること、魔核を嵌めてスイッチを入れればすぐに起動する……ここまでなら素人でもできる。

ところが、その仕組みとなると……夥しいばかりの数式を基礎に成り立っている術式を解読しなければならない。

つまり、使用するだけならばボタン一つで完了することも、調整や中身まで理解するとなると……途端に難しくなるのだ。

無学なオレには、象形文字としか思えない未知の数式ばかり。

“使用”するだけの魔術の習得すら投げたオレにとって、魔導器の深奥までしかも応用が効くレベルまで学習するとなると……とても

容易いものではない。

おまけに、5周目のオレが使用していたのは、分厚い参考書ばかりであった。

それが手っ取り早いと考えたのであるが……読者がある程度以上、既知であることを前提に書かれた学術書レベルのものを初学者が読み解くのは無理な相談だったのである。

勉強をしてこなかったオレには、一歩ずつ薄くて易しい本から基礎を固めて、応用へと積み上げていくという発想そのものがなかったのだ。

筆を執るよりは遥かに才能があつたと相対化できる剣術を我流で貫き通せた分、こつちもそうできるかと思つたが……そうは問屋が卸さない。

多少なりとも自分に言い訳を許して良いならば——焦っていた。

スパイラルドラゴが迫つて来るといふ焦燥のあまり、理解できないことにイライラし、わからないことを読み飛ばすと、前でやったことを前提にした説明が続く。

そして、わからないことを調べることなく無意味にそのまま読み進め、結局時間だけが浪費される。

体を動かしている時は感じたこともない、キリキリとした胃の痛みを抱えながら、文字を目で移すという眼球運動に没入していた。

……後から考えれば自己満足であつた。そうしている間は、仲間を助けられる、世界を救える……そんな夢に酔っていただけである。救うべく仲間を次々殺したくせに。

「ゲホッ！」

血を吐いた。紛れもなく慣れない勉強によるストレスからだろう。むかしエステルが、血を吐くまで勉強した皇帝の話をしていた気がしたが……そいつも単に勉強嫌いだけだったんじゃないやねえの。

分厚い本に付いた血を拭きながら、オレはそんなことを思った。敵について知らねば始まらない。ならば、古代グライオス文明の古文書を調べよう。

血を拭き終わった後、別の勉強で気を紛らわせるべく、オレは書店

へと向かった。

……わかんねえ単語を逐一辞書を引けば、意味が通ると思っ
た。

だけど、まず古代グライオス文字の多さに愕然とすることになる。
複雑にして多様な意味に多様な発声音を持つ文字、その一部分を崩
して成立した文字、さらに方言の入り混じった文字……嫌がらせかと
思った。

辞書を引くにも、まず文字の順列を学ばなければならない。何日も
何日もかけてそれを覚えきった後も、必要な古文書を探し出し（タイ
トルを読むだけで一苦勞）、さらに求める情報まで検索するのは、本当
に骨が折れた。

古代グライオスの文章は、文型が現代の文字と異なり、動詞や形容
詞の格変化まで多種多様と……これをスラスラ読み解けたエステル
もたいがい化け物だと、認識を新たにしたものである。

オレは剣だけを振るっていればよかった。難しいことは、全部仲間
たちに押し付けていた。

偉そうに、あれこれアイツらに言ってきたものだが……そんなこと
を言う資格すらオレには本当にあつたのだろうか。

仲間がいない。ラピードはいるが……もちろん、アイツに頼れるこ
とでもない。

そもそもこんなことをやって何の意味があるのか？ またスパイ
ラルドラゴに破壊しつくされるだけではないか。

みんなが消えて、下町からも逃げて……今のオレにいったい何が
残っているというのか？

拷問のような勉強のあいだ、何度自己嫌悪と無力感と闘い……時に
負けたかわからない。

実際、疲れてベッドに身を投げ出したことだって、幾度もある。

そして、消していった仲間たちの亡霊たちの昏い眼光がオレを睨み
付け、追い詰められるままに勉強を再開する……そんな日々だった。

孤独ではなかった。仲間が「いた」という罪悪感が孤独以上に才

精神のダメージで大打撃を追った果てに辿り着いた解答は、自分を責め苛むだけ。

しかも、ヤツに与える有効打を模索しようとする方途は、入り口の段階で弾かれてしまった。……マジで役に立たねえヤツだな、オレは。

暗澹たる気持ちだが、オレを骨の髄まで真っ黒に染め上げる。

このまま、爆風とともに消えてもいいか、とも思った。

だが――

まだ、救える可能性はある。オレのミスさえなければ、何とか会えるかもしれない。

もはやスパイラルドラゴを倒そうとか、そんな積極的な理由ではなく……ただ誰かに会いたいという消極的な理由で――

――オレは、エターナルソードを振りかざした。フレンが水死する8年前に向けて。

8. ⑥前編

「ハハハハハ……」

舞い戻った下町の部屋で、オレの狂った哄笑がこだまする。

記憶が流れ込んできた。ハンクス爺さんと仲の良かった下町のヤツラ数人と……フレンが12年前に死んだって。

アイツの、8年前の命日の前にこの時間を選択したつてのに。

これが意味することは――

一度エターナルソードの副作用に吞まれたら、もう救出できないってことだ。

だから、リタは存在しないだろうし、ジユデイは敵のまま。

おっさんも死んだままだろうし、パティもないだろう。

ひよつとしたら、エステルも、カロールも、ラピードも……。

……だが、確認しなければならぬ。

そして、誰もいなかったら、今度こそ――仲間を葬りま

くった狂人なんて必要ないだろう。

のろのろとオレはベッドから立ち上がる。疲弊を感じる資格があるのかと疑いながら。

*

「今日からエステリーゼ様の専属護衛官を務めさせていただきますことになりましたユーリ・ローウェルです。よろしくお願ひいたします」

「ユーリさんですね。こちらこそ、よろしくお願ひいたします」

記憶の中にあるよりもチビで、しかし幾分か高音のボイスでぺこりと頭を下げるエステルに、オレは思わず笑いが込み上げそうになる。

バカ丁寧に挨拶をする自分を嗤いそうになったのもあるが、こんな時代からでも性格が変わっていないエステルを見ると、安堵とともに妙ちきりんな気分を抑えきれない。

相変わらずの桜色で短かい髪の毛。

草原を内包する、顔の面積に占める割合の大きいパツチリとした瞳。

純白なプリンセスドレスを纏わせられるのは、成長する前の純真無垢さの表れゆえか。

でも、オレの顔の中ほどまで背があるのは、やはり女の方がこの時期は若干成長が早いからだろう。もちろん、胸はない。

オレの肉体年齢は13歳、コイツは10歳。……微妙に以前よりも相対的に背が高いことにややムカつく感じがしないでもないが、とりあえずは存在していることに一安心といったところだ。

頭を上げた幼気なエステルは、目を見開きながらオレのことをじつくり、まじまじと見詰める。

……相変わらず、いじらしいほどに人に慣れてないやつだこと。

「……ビックリしました。こんなに若い方だなんて」

「騎士団は実力主義だからな。剣の腕さえあれば、年齢なんざ関係ねえさ」

「あ……そうなんですな」

とつぜん敬語を崩したからか、エステルは戸惑ったがすぐに納得の表情になる。

どうせ言葉遣いなんざ気にしねえヤツだから、こつちも遠慮なくタメ口になれる。

調べてみても、やっぱりシュヴァーン隊はなかったし、フレンもない。

ラピードは、あと3年半経たないと生まれて来ねえし、カロルは……いるとしたら4歳児。ダングレストの親元にいるだろう、恐らく。

だから、オレのやれることは、始祖の隸長からエステルを守るってことになる。

んで、ちよつくら乱暴に騎士団の門を叩いた。

ま、騎士団が実力主義なのは間違いないが、希望のポストに就くには少しばかり賄賂が必要だったのはコイツには内緒である。

アレクセイの身分差を厭わない騎士の登用にこの時ばかりは感謝するとともに、騎士団の腐敗を嘆かずにはいられない。

今回は、大いに便乗させてもらったが。

「でも、わたしの師匠（せんせい）を打ち負かすなんてすごいです。とっても強いお方なのに」

「相手もオレがガキ過ぎて油断したんだろうよ」

「そんなことないですよ。師匠は年も身分もまったく気にされない方ですから」

「もういいだろ、過ぎたことは。それより、これからよろしくな、エステル」

「はい！……エステル？ エステル………はい、こちらこそ、よろしくお願ひします、ユーリ！」

18歳の時と同じように、新しい愛称を口ずさみ、丸みを帯びた相好を崩すエステル。

……頼むから、「エステル」に感動するのは今回で最後にしてください。オレ次第なんだけどさ。

*

それからは、心が洗われる日々だった。

まだ慣れない手つきで剣を振るうエステルに、オレは厳しく指南した。

オレの剣術は、独自で作り上げたとはいえ、基礎は騎士団で習得している。

記憶の中のコイツは、型に嵌まった丁寧な剣術だった。

旅の中でべつだんの不自由はなかったから、その基礎から離れようとは思わない。

……ただ、非効率な部分も素直に継いでいるため、自分で考えさせ

て、もつと効率的な剣の振り方はないかを考えさせた。

エステルは、厳格な指導でもへこたれない。だから、強くなつてもらわなきゃ困るといふ意味も込めてこつちもガンガン詰め込んだが……あんまりにも嬉しそうにやるもんだから、却って面食らった。ここまで激しい指導に根を上げない騎士の卵も、そうはいねえつてのに。

訓練ばつかじやつまんねえし、たまにエステルをこつそり外に連れ出した。さすがに箱入りが過ぎてたからな、成長したエステルは。

剣の修行と託（かこつ）けて、例の女神像の仕掛けをくぐり、不安げで、真面目なエステルの制止を引きちぎって、たびたび城の外で太陽を浴びせた。

腰が引けていたエステルも、一回お外に連れ出せばこつちのもの。

肉屋で見慣れないビーフやポークの生肉をしげしげと眺め、服屋でふつうの女の子と同じように何時間もあれこれ試着し、生まれて初めてのアイスを丸ごと頬張って頭痛に悶えたり……。

相変わらずの好奇心の乱反射で、引き戻すのが大変だった。つた、く、隠密行動を弁（わきま）えろつての。

殺伐とした異常に喘いでいたオレとしては、こんな日常的な光景を享受していいもんかと思つたが、満面の笑みではしゃぐエステルにいつしかそんな疑問は消し飛んでいた。

いつかい外に連れ出してから、初めての時の逡巡もどこへやら、エステルは剣の稽古の度に外に連れ出すことをせがむようになった。

目を輝かせながら懇願するエステルを押し止めるのはなかなか大変だった。剣の訓練に段階を設けて、ここをクリアしたらオーケーと、あれやこれや条件をつけても、あつという間に乗り越えちまう。

思つた以上に強くなるのは結構だが……賄賂だつてそんなに何回も通用するもんじゃねえんだぞ。

そんなこんなで、エステルは、すくすくと成長していった。……一時、オレの身長を抜かしやがって、この野郎。

とはいえ、オレがエステルを世話していただけじゃない。

旅の中じゃあんまなかったことだが……エステルにはかなり助けられた。勉強面で。

ある日、オレが前周と同じように、魔導器の専門書に顔を顰めてみると、

「なんです、それ？」

オレの部屋に入って来たエステルが、興味津々、訊ねてきた。

専属護衛官、っていう都合上、オレはエステルの私室の隣の部屋に住んでいる。

いちおう、身分とか諸々の理由で出入り禁止だが……もはやそんなことを律儀に守りはしないエステルである。誰のせいなのやら。

「どうもこもねーよ。難しい本っただけ。……エステル、わかる？」

お手上げな俺は、エステルに分厚い本を渡した。

本には目がないエステルではあるが……

「ダメです。わたしにも難しくくて」

今回ばかりは首をひねってからかぶりを振った。

「だろいな。でも、オレ、何としてでもこれを理解しなきゃいけねーんだよな」

「……ユーリ」

「ん？」

振り向くと、エステルは口角をこれ以上ないほど大きく上げていた。

要するに、ものすごく得意げな表情だった。

「勉強って言うのは、簡単な、分かりやすい本から入るのが一番です。なので、まずはもつと薄くて、簡単な本から入りましょう」

「……そうなの？」

剣術は体で、もしくはほとんど見ただけで吸収できたオレにとつて、その発想はなかった。

いや、空回りし過ぎて辿り着けなかっただけかもしれないが。

「はい。まずは、わたしの部屋にある教科書から始めましょう。」

わたしも一緒に頑張りますから」

「……そうだな。なら、よろしく頼むわ」

「はいー」

ああ、そう言えば。

コイツは、人の役に立つのがものすごく好きな奴だったな。

*

エステル先生は大したもんだった。

齡はオレの方が断然重ねているはずなのに、本の読解力だとアイツに敵ったことはほとんどない。

いつも先にアイツが読み終わって、オレが躓いている部分を極限まですりつぶして解説してくれる。

おかげでオレもオートミールのように知識の消化が速くなり、あの分厚い本の数式群も徐々に解きほぐされていった。

2年も経つ頃には専門書の読破も終わった。それじゃ足りないから、エステルが家庭教師に頼んで城の蔵書を引っ張ってきてもらったり、オレが騎士団に頼んでアスピオから稀観書（きこうしよ）を送ってもらったりして、段々と応用を積み上げていった。

いろいろと分担しながら、内容について議論を交わしあい、魔導器についての理解をさらなる深みにまで踏み込んでいく。この辺りになると、エステルの家庭教師を遥かに凌駕していた。

本に書かれていること……すなわちリタの通ってきた道を概ね踏破した後は、昔の旅で見聞したことをそれとなくエステルに披露して、星喰みを倒すのと似た装置をエターナルソードに組み込んでいく。

この剣は、硬度が非常に硬く、材質的にちょうどよかったのだ。

2人でリタの頭脳の代わりを担い、エターナルソードは、打倒スパイラルドラゴの剣へと変貌を遂げる。もう、これ以上は強化できないほど改造した。

オレもエステルも調子に乗ったのか、それ以外にもいろいろと改造を施して、エターナルソードは多機能型の剣にしてみた。ま、これは枝葉末節のことだけどな。

古代ゲライオス語も似たような感じだった。

エステルは、魔導器以上に古典や語学に関しては天才的で、スポンジで水を吸収するように単語を覚え、複雑な文章の解釈も瞬時に提示する。

スパイラルドラゴについては、特性についての記述を除いて大きく役立つものはなかったが、古代ゲライオス文明の古文書で魔動器について現代ではできなかつた発想が書かれており、魔導器研究をより進捗させた。

あと、御伽話の類からも、意外とスパイラルドラゴの伝説じみたことが描かれていて、全貌解明に邁進できた。

まあ難点だったのは、どれもこれも強さばかり記載されていて、肝心の弱点についてはまるで記述はなかつたことであるが。

オレは、フレンには剣も体力も負けていた。エステルには学習面では全く敵わねえ。

どうにも、劣等感に置かれる立場が宿命付けられているらしい。

……だが、悪い気はしなかつた。

*

そんなこんなで、年月を順調に積み重ねていった3年後のこと、エステルが13歳の時のことであつた。

「ユーリ……」

オレがエステルの部屋を詣でると、どでかい天蓋付きのベッドで毛布の塊が、か細い声を出した。

「エステル、どうかしたか？」

声には出さなかつたが、エターナルソードの副作用が、病気という

形でエステルに及んだんじやないかと、内心で肝を冷やす。

オレは、小走り気味にエステルの元へと駆け寄った。

ところが――

「えいー!」

「……………」

布団からひよっこりと、リンゴのような顔を出したエステルが、オレの腕を引っ張った。

武醒魔導器を装備していたが……13歳ごときの腕力で無駄に強くなつたオレを動かせるはずもない。

「あ、あれ? ……えい、えい!」

真つ赤な顔のまま、目をぎゅつと閉じてエステルはオレを一生懸命引っ張った。

むろん、オレは動かない。

「……………何してんの、お前?」

色んな意味でオレは訊いた。

「だって、ユーリと離れるの寂しくて……今日は一緒に寝ようかと」

「……………はあ」

どうやら、男をベッドに引きずり込むという真意は理解していなかったらしい。

とはいえ、心配させてこの野郎という気持ちと、アホかお前の気持ちで、軽くエステルの頭にチョップを下ろす。

「いったくい! 何するんです!?!」

「それは、こっちのセリフだつーの」

さほど強くないだろうに、大げさに頭を両手で押さえるエステルに、オレは呆れの籠った溜息を吐き出す。

「いっつも隣の部屋にいるんだから、寝るときくらい我慢しろよ」

「だって、最近、『寂しい』っていう気持ちを知ってしまった……ユーリと離れると、とたんに胸がスカスカになるというか心にぽっかり穴が開いた気分になるんです……お願いです、ユーリ。一緒に寝て下さい」

成長したエステルは、旅の中で当たり前のように男女別で寝ていた

から、きつと貞操教育は施されていたんだろう。

んで、このちつこいお姫さま(暫定的に上回っているのは無視して)は、生憎とおしべとめしべについてまで学習を終えてない、と。

だから、いつか身悶えするであろう発言を平然としているんだろうな、と思った。

「却下だ」

「どうしてです!?!」

「あとでわかる」

説明を放り投げて、クルリと方向転換したオレの腰に、布団から飛び出したエステルは抱きついてきた。

「……聞き分けのねえお姫さまだこと」

「ユーリこそ、わたしはお姫さまなんですから、あなたのご主人様なんですから……わたしの命令を聞いてください!」

コイツが、身分を理由に命令してきたのは、オレの記憶の中でも初めてのことだ。

その記憶の堆積が、オレの思考を一時停止させたのか、次に喋ったのもエステルだった。

「わたし、幼いころに両親を亡くして……それ以来ユーリみたいに気さくに接してくれる人は初めてだったんです。

だから、人に飢えているというか、こうやって肌と肌で触れ合える人を心の中で求めていたんだと思います。

「お願いです、ユーリ!一緒にベッドで寝てください!」

「……爆弾発言はともかく。」

「なんかやたらと切羽詰まってる感じがしたのはそのせいかな。」

あの旅に出る2年ぐらい前は、フレンを定期的に会って寂しさを紛らわしていた。ま、アイツは堅苦しいからこんな事を頼めるはずもないが。

んで、旅をしている時は、どんどん仲間が増えていったから寂しさもなくなっていたが……今は身分に頓着せずに接する非常識なヤツはオレしかないからこうしてオレに懐いてきた、と。

とはいえ……その将来のお前の絆をまるごと奪い去ったオレが素

直に頷けるはずもない。

「……お前の事情は分かった。けど……やっぱ、オレじゃダメだ。

オレじゃ、お前と、ずっとは一緒にいられない」

言葉の選び方を間違えたと思った時には、もう遅かった。

「なんで……なんでですか！ わたしはユーリと一緒にいたいです！
ずっと一緒にいたいです！

それなのに、それなのに……どうして、そんなことを言うんです!？」
ひとしと腰に巻き付く腕の強さが、さらに増した。コイツが権力を笠
に着るヤツだったら、命令を受けた騎士たちによってオレは緊縛され
ていたかもしれない。それくらい、強かった。

そして——涙まで零してきた。もう、振り向かなくてもわかる。

「悪かったよ、エステル。……けどな、お前には、オレよりも頼りにな
るヤツがいつか現れ「今です！ 今の話をしているんです!」……」
荒唐無稽な行動以外で、エステルがオレを怯ませたのはこれが初め
てだったような気がする。

旅の間もそうだし、3年の城勤めでコイツのことを深層まで理解し
たと思ったが……どうやらそうでもなかったようだ。

過去を掘り下げていくと、意外なほど深い傷跡がコイツの中で疼い
ていたということか。

そう思うと……あんまり無下にもできねえな。

「……エステル」

エステルの腕をそっと緩めてから向き直り、なるべく真剣みを帯び
させた語調で声を落とす。

泣き腫らしたその面(つら)は、自分でも意外なほどオレの心にずつ
しりと押し掛かってきた。

ことによると、前回の周で嫌というほど味わった寂寥感が、響いた
のかもしれない。

あの想いの中に幼年期からエステルが沈潜していたとするなら――

「その思いには応えきれねえ。……けど、お前の元から離れたりはし
ない。

だから……安心してくれ」

齒が浮くような台詞。しかし、弱つちい弁明。

だが、罪人たるオレにはこれが精一杯だった。

サラサラとした髪の毛を梳（くしけず）る。お前にこうすることすら浅ましい所業なんだぜ。

「……………わかりました。すみません、取り乱して」

明らかに不承不承の声色であったが、エステルはきっぱりと身を翻してベッドへと戻って行く。

記憶よりもずいぶんと小さいその体は、サイドテーブルに置いてあるヨレヨレのクマのぬいぐるみを引っ張って、また毛布の塊へと変化した。

幸いにして暗い部屋の中では、団塊が小刻みに震えている原因がよくわからないように自分の心を韜晦（とうかい）することができた。

むろん、真摯に向き合うこともなくオレはエステルの部屋から出て行った。

*

「エステル……ねえ」

隣の部屋に帰ったオレは、適当な椅子に腰かけ、もう何年も一緒にいる——仲間と見做していた少女のことを想う。

エステル——嫌いではない。いつつもバカで真面目で、そして未熟さの残るピンクのお姫様を疎ましく思ったことは一度もない。

今回の周で、その存在自体がどれほどオレに恵みをもたらしたか——アイツには想像もつかんだろうな。

勉強をリードしてくれたことはもちろん、ただ隣の部屋にアイツがいるだけで、赤い花畑の中で亡霊が出て来る悪夢に苛まれることもなくなった。

だからこそ——オレにはもったいない。

身分差なんざどうだっていい。オレの周りにもアイツの周りにもまともな絆がない以上、そんなものはどうでもいい。

でも、オレじゃダメだ。アイツから何もかも奪っちゃったんだ。襲撃してくる始祖の隸長がいなけりゃ、もう顔を見せることすら許されない領域に達してしまっている。

こんな泥濘の河に沈むべき悪人が、穢れをまったく知らない女の子をどうこうしていいはずがない。

だから——無理だ。

そう心に蓋をしたオレは、さっさとベッドへと潜り込んだ。

——めんどくせえ。余計な贈り物をしやがって。

寝心地の悪さから、オレはエステルにそう悪態をついた。

*

「ユーリ、わたしががんばりますから！」

翌朝、やや気まずい心持ちでエステルの部屋を訪ねると、エステルから澆刺（はつらつ）にそう宣言された。

顔をやや赤らめながらも、決然と言い切るその語調から翻心は難しそうに思える……というか、コイツが梃子でも簡単には動かせない頑固者だって知ってるから、オレはすぐに匙を投げた。

「そうかい」

オレはにべ無く返答し、古文書を机の上に置いて、背凭れも格調も高い椅子に座る。

するとエステルは、自分の椅子を引きずりながら、オレの隣に置き、左腕にすり寄るように腰かけた。

内心まだ逡巡があるのか、オレの左肩に頭を乗せようか乗せまいか、プルプルしている。

「……エステル」

ずいぶんとベタなことを、と胸中で失笑しつつ、しかし口調はいつもと変わらないように声をかける。

「は、はい！　なんででしょう！」

成長したエステルよりも、2オクターブほど甲高い声が耳元に響いた。

「本開きづらいんだけど」

「あ、す、すみません！」

とつくの昔に知っているが、何かに集中すると周りのものが見えなくなるのはコイツの悪い癖だ。

注意を受けたエステルは、今度は椅子をテーブルから思い切り離す。

そして、離し過ぎたと遅まきながら思ったようで、どのぐらいがちょうどいい距離なのか思案しながら、ようやく落ち着いた場所に置いた。

——相変わらず、コイツはバカだな。

騙すとか誑かすとかそういうのが一切できない小さな体に、オレはよくわからない溜息をついた。

これを皮切りに、エステルの、拙（つたな）すぎて見ていられないアプローチは激化した。

まず、へそ出し肩出しの、なんかの漫画にあったような魔法少女のコスチュームを外出の時に購入し、頻繁にオレに披露した。

ニーソックスから覗く白く透き通った絶対領域に関しては悪くない。——もう少し体が大きかったならば。

いかんせん13歳の身体で、もう年齢を数えていないオレを魅了するのは不可能である。

だからオレがすげなく普段通りに接していたら、むくれたエステルが自分でスカートを捲り上げて紺色のパンティーを見せてきた。

さすがに、はしたなかつたので叱ったが。

別の日は、料理にチャレンジした。

厨房を借り、レシピを開いてなんかかんかの料理をオレに差し出してきた。

それがハツシユドビーフだとわかったのは、煮詰まり過ぎているのに、なぜか赤ワインのアルコールが残存していたからである。

本来のさまざまな具材と食感を調和した味もどこへやら、エステル
のハツシユドビーフは、しょっぱい以外の感想が出て来ない。

多少なりとも言葉に気を付けてあれこれ指摘したが、聞いている内に涙目になってきたエステルを憐れに思えてきたから、オレ自身の身の安全も考えて料理の手ほどきをすることにした。特に味見の重要性を強調して。

すると、エステルはパツと晴れやかな顔になるもんだから……いつの間にもやら女狐に転じたかと思った。

もつとも、馴染みきつた性格というのは、そう簡単に抜けるものではないことがすぐにわかったが。

剣の稽古や勉強中にそんなアプローチは仕掛けて来ない。ある程度の分別がついていたのは幸いだった。

あるいは真面目な時は真面目にやることも、コイツに思いつける戦
略の一つだったのかもしれないが。

ただ、ことあるごとにオレの部屋に入って来てわざとらしくオレの膝に座ろうとしたり、ベッドに潜り込もうとするもんだから少々辟易した。

ハロウインの時期には、魔女っ娘コスチュームで「ト、トリックオ
アトリート……！」と、明らかにトリックの方を期待した目線と震え
た声で仕掛けてきたり。

クリスマス
の時期には、ミニスカサンタのコスチュームで、空気穴を作るのを忘れたドデかいボックスに入って、オレが来るまで酸欠で目を回していたり。

まあエステルなりに一生懸命考えたんだろうなーというアプ
ローチや、季節感あふれるアプ
ローチを企ててきた。

ただ、あんまりにもオレが素っ気ないと、「いいんです、いいんです、
どうせわたしには魅力がないんです」と拗ねてベッドから出て来なく
なる。

そういう時は、さすがにオレも反省して膝枕をしながら髪を梳いた

り、お姫様抱っこをしたり、逆に料理を振舞ったり（鍋焼きうどんとかの庶民の味がコイツの好みだったりする）して、ご機嫌を取ってやった。

どれもこれもあつという間に元気になるもんだから、コイツは単純で助かる。

——まあ、それだけでもない。

いつもいつも考えが見え透いていて、策略も何もあつたもんじゃないアプローチばかりであるが……存外オレには効いていた。

オレは、案外頼まれることに弱かったりもする。たいていは、頼まれる前に問題の解決を図るから。

エステルのことはもともと嫌いではないし、そのそばから離れられない。だから、未成熟な身体とはいえ、ほとんど直接的に好意をぶつけられると——オレの心も揺れ動いてくる。

鬱屈とした時間周回、他に行く宛てもない自分の身。その中で、今回のエステルの存在はとても心地よかった。

当然と言えば当然か。もうすぐラピッドに会えるかもしれない、カロールに会えるかもしれないとはいえ——今現在、エステル以外にオレの絆は存在しないのだから。

コロツと落ちてしまっても良かった。アイツの想いに応えてもよかった。——オレの心が穢れていなかったならば。

むろん——オレがエステルに縋るわけにもいかない。本当は傍にいない資格だってない。

エステルに絆（ほだ）されそうになる度に、アイツから絆を奪ったのは誰だ、と内奥からの呵責の槍がぐさぐさとオレを突き刺すのだ。それで、どうしても落ちるわけにはいかないから——結果としてオレは何でもないような振る舞いをしてしまう。

絆が欲しい。けれど、エステルに甘えるわけにもいかない。

噛み合わない歯車がガリゴリと不協和音を立てる。そんな葛藤が、だんだんとオレを苛んでいった。

*

頃合いを見て、ラピードを拾ってきた。

アイツが前の主人から離れて、帝都の犬のビッグボス争いに敗れて大怪我をしているところを外に出たオレとエステルで手当てをしたのだ——フレンがいたときは、フレンとオレで必死に怪我を治したんだがな。

エステルの治療術は——使わせるのに躊躇いはあったが、下手を打つとエターナルソードの副作用に吞まれる可能性がある以上、背に腹は代えられない。

オレが何をするでもなく、エステルはあつという間にラピードの怪我を治癒した。

ラピードは、今までの旅の最中において、エステルには素っ気なかったが、今回は別だ。

仔犬のラピードは、しょっちゅうエステルをぺろぺろと舐め回した。エステルも、初めてのペットを持って嬉しかったようで大いにはしゃいでいた。

その姿を見て。

ラピードが存在してよかったという安堵は別として。

ほんの少しラピードに腹を立てる自分がいたことに……ずいぶんとエステルに毒されたもんだと、自嘲した。

*

“ほんの少し”でもなかった。それからはイライラする日々が続いた。

エステルがオレを見てくれない。ラピードばかり見ている。それに腹が立ってしょうがないのだ。

むろん、最初はラピードが来たばかりからだと妥協した。エサやりも、お風呂に入れるのも仕方ないことだと自分に言い聞かせた。

だが、エステルは一点集中の性格。ラピードの世話をしている最

中、アイツの視界にはオレが入っていない。入る余地がない。

とろけるような無垢な微笑みも、耳朶を柔らかく愛撫する声も、小さくも透き通るような肢体も……すべてラピードに独占されているのだ。

思い出す。前週の、ラピード以外すべて喪ったことを。

誰もいないという飢饉を。

誰かが欲しいという飢えを。

否が応でも思い出させられた。

エステルがオレを見てくれる時間が減るのに反比例して、オレがどれほどエステルによって満たされていったか、知った。

そして、エステルの誘いをすげなく断ち切っていたオレがいかほど愚かであったかも理解した。

前回、嫌というほど喪失の痛みを、寂寞の辛さを理解したというのに……。

ラピードじゃダメなんだ。

人に擦り寄るわけじゃない、素っ気ない性格っていうのもあるが、やっぱ人でないと。

包んでくれる奴じゃないと。

……そんな内に秘められた想いを、たぶん表面上でも抑えきれなかったのだろう。

「ユーリ、最近、あんまり元気ないですよ?」

魔動器の研究中、憂いの籠った口調で、エステルが訊ねてきた。

まさか自分の飼う犬に嫉妬しているなどとは言えない。

オレを取り巻く社会が喪失したとはいえ、まだそれぐらいの矜持はある。

ちなみに、その件の犬は制服姿のエステルの生脚の上に乗っかってる。

ほんの少し前に、オレが転寝（うたたね）した際にエステルがオレの頭を乗せてくれた至福の枕の上に。

あの時はオレへのサービス精神のつもりで着替えたんだろうが、今はラピードの毛皮を地肌で感じたくて制服姿になっているのだろう。

気に入らない。たまらなく、気に入らない。

お前の向いていた相手はいつだってオレのはずなのに、どうして今は犬の方に集中しているのだ？

「別に」

エステルの膝の上で丸まっているラピードを一瞥することなく、それどころかエステルの方に視線を向けることすらなく、オレは本に目を落とし続けるフリをした。

「もう。また、そうやって誤魔化すんですから」

本の内容など頭に入っていない。見ているのはエステルの膝の上。エステルはむくれながらも、ラピードを丹念に撫で続けている。そう、丹念にだ。

そのたおやかな手つきはよほど心地よいのだろう。ラピードも、かつて見たことがないほどスヤスヤと眠っている。

——オレの枕で。

しばらくして、エステルは眠っているラピードをバスケットのタオルの包みへと運んだ。

そして、心の中でほっと一息ついているオレに、柳眉を逆立てたエステルが戻って来て、

「それで、何に悩んでいるんです？」

腰に両手を当てながら詰問してきた。

いつもは優しさを湛える草原の瞳も、いまは妥協を許さないと語っている。

「……………」

それでも、オレは黙秘した。誰が話せるというのか、犬を妬んでいふということ。

同時に、かつてこれほどまでにエステルに対して畏怖の念を持ったこともなかった。

自分がエステルに支配されている——そう自覚しなければならぬ。

「……………もういいです」

目を逸らし続けるオレに、エステルはプンプン怒りながら本を持つ

て部屋から出て行こうとした。

嵐が去ったと弛緩するオレに——エステルは痛烈な一撃を放つ。

「そんなユーリ、嫌いです」

その一言で。

身体がかつとなった。

内側の血液がすべて蒸発するような強烈な煮えに襲われる。

すぐ後に、極寒ともいえる冷えが襲ってくる。

溶鉱炉から出たばかりの溶銑が一気に冷銑になったような、強烈な変化だ。

——そして、オレは爆裂した。

「きやつ!!」

気が付いたら、オレはエステルを後ろから抱き留めていた。エステルの悲鳴でようやく自分の所業が理解できたのだ。

しなやかな身体を捕まえて、視界は桜髪で埋め尽くされ、鼻腔をエステルの首元にあてる。

どうやらエステルは、抱えていた本を落としたらしいが、オレにはそんなもの映らない。

ただただ、エステルという温かみと香りだけあれば良かったのだ。

「ゆゆゆゆゆユーリ!?!」

見ずとも、エステルがどんな表情をしているかわかる。

熱で凝固しているであろうエステルの身体を、オレは一寸の隙間すらないほどにひしと抱き締める。

最近ようやくエステルの頭に顎を置けるくらいの優位的な身体を以て、オレはエステルの支配に取り掛かった。

まず、両腕とオレの胸の中という拘束具でエステルの身体に残る力という力を大かた吸収する。

震えていた身体が、頼りなく垂れ下がったのを確認した後、オレは

エステルの耳元にふーつと風を吹きかける。

「ひゃっ！」

未知の刺激に驚愕しているエステルに構うことなく、現われ出た、美しくも赤い耳にもう一つ刺激を——食んだ。

「はうっ！」

バラエティー豊かな悲鳴を提供してくれるエステルの、媚びなき嬌声を心地好く感じながら、外耳を甘噛みした。

姫さまもあらば、耳にまで美容に気を遣われているようで、コリコリとした食感を歯で感じ、段々とした軟骨を階段をステップするよう舐め回す。

流れ出ている汗の塩分も、今は素晴らしいアクセントになっている。

そして、十分に堪能した後、エステルの耳がオレの涎でビチャビチャになっていることでオレの跡を付けられたことに満足する。

名残惜し気な意味を持つはずの粘液の糸も、エステルとの確かな繋がりだと確信でき、独占欲を満たした。

そして、最後に、「ほらほらユーリ。わたしは首元が弱点なんですよ」と、わざわざ嘯（うそぶ）いてくれた情報を十全に活用し、ワイシャツの襟元に舌を忍び込ませる。

「ひゃっ……………はうー！」

オレがきめ細やかな肌を味わうとともに、エステルはその場で崩れ落ちる。

しぶとく体内に残っていたエステルの力も、これで完全に抜けきった。

オレはいったん解放し、皇族の部屋らしくやんわりとした絨毯の上に顔（くずお）れるエステルを満足げに見下ろした。

十分に支配欲求が満たされた後、コイツの大好きなお姫さま抱っこをすべく膝を折る。

膝の裏と背中に腕を通した後、何が何だか状況を理解していないエステルの虚ろな瞳に苦笑しながら、文字通り軽々と持ち上げた。

そして、今いるコイツの部屋ではなく——隣のオレの部屋の、ベツ

ドへと向かう。

ベッドに着いたと同時に、ようやくエステルも焦点を合わせられ、正気を取り戻したようだ。

だが——もう遅い。逃がしてやれる時期は疾うに過ぎ去ったのだ。「はあはあ……ユーリ、ど、どうしたんでしゅ……?」

いろいろと刺激が強過ぎたせいか、エステルの呂律が回っていない。

真つ赤なエステルの頭脳は、未知の感覚を未だに処理しきれてないみたいだ。

「どうしたって……オレにこういうこととして欲しかったんだろ?」

イタズラっぽく、オレは答える。

エステルの頭の脇に両腕、腰の脇に両膝をついて、エステルのためのだけの檻を拵える。

「こうって……わたし……まだ、こころのじゅんびが……」

そういえば、最近貞操教育が行われて、トマトになりながら聞いていた。

齡14では、いささか怖いかもな。でも、オレはもう妥協しない。

「……エステル」

囁いたオレは、グイッとエステルの顔に近づいた。

天井すら、エステルの視界に入れることを許さない。

「……! ひゃあっ……!」

悲鳴を上げたエステルを、改めてつぶさに観察する。

桜の花びらをそっくりそのまま引き継いだんじやないかと思うぐらい桃色に栄える髪の花園。

太陽が何よりも照り映えさせ、しなやかにして瑞々しい触り心地をも内包する女の美の究極体。

今は、あたふたと困惑を表す柳眉も、ふだんは物柔らかな円(まど)かさを醸し、出会うすべての人間緊張をやんわりとほぐす。

大きくパツチリと見開かれた瞳は、コイツにとっては未知のはずの青々とした芝生を描き出す。

記憶の中にあるよりはなだらかな顎のラインも、出会った頃と比べ

るとだんだん尖り始め、成長の兆しをキツチリ見て取れる。

現在の服装はブレザーの制服姿。

真っ白なワイシャツを赤いネクタイで締めるといふ露骨すぎるコントラストを、黄土色のブレザーが和らげて調和させる。

「ちよつと長めのブレザーの袖で、手の平を隠しているのがポイントなんですよ」とおててを挙げて、生意気な口調で語っていたが、確かにエステル特有のいじらしさを醸成するにはベストマッチングだ。赤いチェックのミニスカートからは、日焼けすることなく育った白磁で、潤いたつぷり美脚を存分に大胆に露出する。それを黒檀のようなハイソックスが際立たせるものだから、憎らしくて仕方がない。

スカートの中身が黒のパンティであると、先日わざわざ生の情報で教えてくれた。

こんな美味そうな獲物を今の今まで見逃していたとは……目が腐っているにもほどがあるぜ。

もういい。オレが生きるにはコイツが必要だ。

罪？ 罪悪感？ そんな心の留め具はいつたいどこへ行つたのやら。

本能の歯車が強過ぎて、あつという間に吹き飛ばしてしまったぜ。いや、忘れたわけじゃねえ。ただ、生きる気力を削ぐ言い訳にするのをやめにしたただけだ。

御託はもういいんだ。オレにはエステルがいなきやダメ。そう自覚した以上、もう生きる気力をエステルから貰い受けるほかない。

身重にしなけりゃいいんだ。身分はどうでもいいが、エステルが身を守れなかつたらマズいからな。

ということ——

まずは、キスを落とす。

オレは、腰を落とし、エステルに体重を乗せて、身体を中心に固定する。

両手を挟み込むようにして、エステルの火照り過ぎている顔を逃がさないようする。

そして——エステルの桜貝にオレの唇を落とした。

「んんっ！……ん……………」

エステルは電気ショックを受けたかのように一瞬ビクンと身体を跳ねさせたが、すぐに大人しくなった。

すぐにエステルの唇という柔らかな門扉だけでは飽き足らなくなり、口内への侵襲を開始する。

歯は閉じてないが……やはり、怯える羊のようにエステルの舌は大人しかった。

あれだけアプローチをしたくせに、と不満げなオレは、最初に外に連れ出した時と同じく強引に吸い出す。

肌と同様に、エステルの舌はざらつきが少なく潤っていて、優艶であった。

味わいつくすほどにしゃぶりつくしてから、ようやく解放してやる。

「ぶはっ！……はあ……はあ……」

もうエステルの瞳はトロンとまどろんでいる。14のコイツには刺激が強過ぎて、いっばいっばいだらう。

次は、胸。

いかんせん幼過ぎて成長した時のようなお手ごろサイズとはいかないが、それでもぶつくりと膨らんでいる小ぶりのサイズ。

揉むというよりは、手の平で摘まむようなイメージでまずは制服越しに触感を確かめる。

「あうっ！！」

「おお、わりい」

どうやら強過ぎたようで金切り声を上げた。しかし、まんじゅうのようなモチモチ感としっかりとした弾力は手の平に残る。

直に触れてみたくなって、エステルの制服を脱がしにかかった。

まずは、お腹のあたりまでを留めているブレザーのボタンを、続いて全身を上半身を覆うワイシャツのボタンを下からじゅくり一つ一つほどこいてゆく。

ボタンが外れ、直接空気に触れていく地肌の面積が増えていく度に、横隔膜の上下運動は激しさを増し、しかし目は虚ろなまま一点だ

けを見据えている。

荒い呼吸音のBGMに、黒いブラジャーが露出する。——まったく、コイツには白が似合うってのに、無駄に大人らしさを追求しやがって。

でも、それもオレに気に入られたいからだと思うと、ゴクリと唾を飲み込みたくもなる。

ブラジャーを捲し立てて、肌色の全容を掌握したと確信した時、オレの身体も内側から燃え立ってきた。

そして、乳房がオレの目に曝されたあたりで——突然、エステルの腕が邪魔をしに来る。

「エステル、腕どけろよ」

「だ、ダメです……。こんな、ち、ちいさな胸だと……」

口を尖らせても、エステルは自信がないから余計に強く、腕をクロスさせて乳房の防備を固めてしまう。

オレにはよくわからんが、確かに胸の大小にやたらとこだわるヤツがいるのは事実だ。

だが、エステルしかいないオレにとってはもはやそんな贅沢なことなど言っていられない。

だから、とつとと力づくでどかさそうと思っただが……。少し考えてちよつと趣向を変えることにした。

「ぎゃっ!!」

オレは俄かに腕を背後に回し、スカートの中身——恥部を指で突っついた。

予期せぬ刺衝に、エステルの腕は思わずそちらに回ろうとするが、馬乗り状態にされて上体を起こせず、そこまで腕の長くないエステルに届くはずもない。

なので、目論見通り両腕が解かれ、肌色のちんまりとした膨らみと本当にチビのイチジクのような赤い突起が露呈する。

本能的にオレは、その小さな丸い膨らみに舌を這わせた。

「あうっ！」

エステルはとても艶めかしい声を上げる。それがよりいっそう、オ

レの嗜虐心を盛り上がらせた。

今度は、口全体で、乳首と乳房を纏めてしゃぶることにした。

「ん~~~~っ!!」

コロコロと、口内で凝った乳首が回るのを、汗の塩分と共に愉しんだ。

吸うというよりも飲み込むような感じでエステルの乳房の触感を味わった。

「ゆ、ユーリ……」

いきなり日常が破壊されたエステルは、呻きながらオレの名前を呼ばわる。

胸から口を離して顔を見てみると、物欲しそうな顔に婁（やつ）していた。

今までに見たことのない、屈服したメスの表情。

……ああ、コイツの守護が必要でなかったら、この先に進めるのに。身体のキレをなくして万が一のことになったら目も当てられない。

だから、オレは——

「はう……っ~~~~っ!!」

エステルに巻き付くことにした。存分に。

顔を桜の森に埋め、腕は剥き出しの胸をガツチリと束縛する。

ベッドを泳いでいるようなエステルの脚を、オレの両脚で螺旋状に縛り付けた。

その柔らかな肢体は、やはり抱き枕としては最高の触感であった。ふわふわと雲を抱き留めているような感じがする。

桃色の髪の毛の芳香は、整髪剤と花蜜の甘さが和をつくり、オレの脳を蕩けさせる。

そして——何よりも、〃存在する〃という温かみが、オレにとっては当たり前でない温かみこそが、何よりもオレの身体を満たした。

ある種の母性を、女というより包み込んでくれるような温かみを、オレはずっと求めていたらしい。

皇女という立場の人間に、かつてよりも幼げな体軀にそれを乞うのも、バカらしいと言えばバカらしい。

だが、ダメなんだ。そんな常識に沿っているだけだと、得られないものがあるんだ。

オレは二やついている。それが何の笑みなのか、もはや吟味する必要もない。

オレは眠ったことがなかった。エステルを抱いて、それを初めて自覚した。

心からコンコンと湧き立つ充溢感が体内を巡るのを細胞一つ一つで知覚しながら――

オレは、眠った。

*

その後のエステルとの関係は、以前とあまり変わらなかった。

あの日から、数日の内こそどこか恐れている風であったが、毎晩いっしょに寝ることで段々とエステルの方も落ち着いてきた。

それどころか、日が経つにつれてエステルの方からオレに向けて腕を伸ばし始めてきたのだ。

……まあ、いつもいつも千里の道も一歩からという趣だから、毎度もどかしくなったオレの方から抱き寄せるのだが。

ラピードとの関係も前周までと同じように、嫉妬することなくオレも世話をし始めた。

まあ、あの日以来、エステルがラピードよりもオレの方を長く見てくれることになったからなのだが……それにしてもコイツを妬む期間があったのは甚だ決まりが悪い。

心に余裕ができると、ラピードがエステルにじゃれついていても特に何とも思わなくなった。

——4年が過ぎた。

魔導器を研究し、エステルを鍛え上げ、ラピードもすくすくと成長し、毎夜エステルを抱いて眠る……折々の季節の行事を介在しながら、そんな心穏やかな日常を過ごした。

すべてが順調で、すべてがうまくいっていた。

スパイラルドラゴの討伐のための装置もエターナルソードにでき得る限り組み込めたし、エステルも、ラピードもかつてとは比べ物にならないほど強くなった。

何もかも上手くいく……そう思う度に、あの「呪い」は牙を剥くのだ。

エステルが18歳を迎えて幾ばくも無いうちにフェローがやって来た。

そして、オレは苦も無く撃退する。むろん、誰も怪我人は出ない。

このタイミングで、オレはアレクセイ、キュモール、デデツキを暗殺した。

エステルは、やはりフェローの調査に行きたいと言ってきたから、少し迷うフリをして領いた。

そうして、前回滅んでいたデイドン砦を避けて、クオイの森でカールと合流できるように日程を合わせて帝都を発ったのだが——

「いやああああ!!!」

エステルの運命を変えられ、ラピードも確かに今日まで生き延び、カールにも久方ぶり会える……8年の歳月はエターナルソードの恐怖を弛緩させてしまっていたようだ。

カロルは、魔物たちによって食べられていた。

恐怖が貼りついたその顔は、もう二度と動くことが叶わない。

喉笛を切り裂かれ、そこかしこの穿傷からとめどない血が流れている……嫌というほど見てきた、既に事切れている状態であった。

かつて勇敢に仲間を救った、根底では勇敢な少年は、暗黒の森で人知れず命を散らしてしまっていた。

「ゆ、ユーリ……」

涙目のエステルがオレにすり寄って来る。

本来は、生々しい死体を初めて目に入れてしまったエステルを慰めるべきだった。

男として、あるいは恋人として、そうすべきだった。

だが——冷え込みの激しいぬばたまの闇は、かつての喪失を想起させ、オレの全身を凍えさせた。

まるでゾフェル氷刃海にワープしてしまったかのような気分になったオレは——

事もあるうちに、エステルに縋りついてしまった。

「!? ……ゆ、ユーリ……?」

自分を抱き留めるはずの体躯が、翻って自分を抱き寄せてきたから、エステルも面食らっただろう。

だが——男らしさだとか、騎士道精神だとか、モラルだとか……いつの間にやらオレは喪失してしまった。

エステルに縋ってはいけない、頼ってはいけない、情けない姿を見せてはいけない……一方のオレは殊勝にもそう叫んでいるのに、もう一方のオレを制止することはできなかった。

久しぶりに、いや、もう何年経ったかはまったくわからないが……

オレは落涙した。

「……………」

息を呑むエステル。そりやそうだろうな。

身体だけは、外面だけは、いつも強い所を見せてたもんな。

でも……心は、ずいぶんと脆くなっちゃった。

もう、エステルなしには生きられないほどに……。

——ハルルの街の宿屋に着いて、オレは禁を破った。

厳密に言うと、エステルが妊娠しないように気を遣ったが……。

スパイラルドラゴを討滅するまで取っておくつもりだったんだけどな。

*

ラゴウと、傍らにいたバルボスもついでに暗殺した帰路——

「その娘を渡してもらおう」

禍々しい妖気を湛える剣を片手に銀髪的美丈夫——デュークがそう要求してきた。

始祖の隸長（エンテレケイア）たちが、コイツを憂える気持ちは、嫌というほどわかるが……生憎とそれを受け入れられるほど、オレも素直ではない。

返事の代わりに『蒼破刃』を放った。

「なぜだ？　なぜ止めを刺さぬ？」

天を見詰めながら、デュークが虚空に言葉を投げる。

天候を操る魔動器を壊したから、積乱雲はなくなって、そんなに悪くない景色だろうな。いや、ある意味清澄すぎるお前の心には知りたくもない真実ばかりが映るのか？

「さあな。なんとなくだ」

「……また、襲ってくるやもしれぬぞ」

「そんな時は、また勝ってやるよ」

いちおう、世界を守護する志に敬意を表するとともに、コイツを恋い慕う始祖の隸長がいきり立ってこないようにするためだ。

恋い慕う人間の喪失は……痛いもんな。

倒れるデュークを尻目に、オレはカプワ・ノールの宿屋へと急ぐ。

……身体が怠い。熱が出そうだな、こりや。

やつぱ、『エアリアルボード』なんて魔術に近いヤツは、オレには向かないってことか。

ベッドに着いて、マジックテープを外し、背中に固定していたエステルを降ろす。

むろん、エステルは今日もオレの抱き枕だ。

羞恥心なんてもんは、取り巻く社会があつてはじめて成立する贅沢な感情だ。

エステル以外、誰も……すべての絆を喪ったオレに抱く資格はない。

今日も今日で確かな温かみを感じながら、オレは心の中でエステルに誓う。

——— 今度こそ、永久（とこしえ）の桃源郷にお前を連れてってやるからな。